
wonderful☆world～奇跡篇～

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

wonderful world ～奇跡篇～

【Nコード】

N3163N

【作者名】

みかん

【あらすじ】

★4000アクセス突破、大変ありがとうございますm
m★恋愛篇も引き続き宜しくお願いします
〔

夢があるってこんなに素敵なコトだなんて思わなかった。

何かに向かって突き進むコトがこんなにも無限の力を生み出すなん

て、知らなかったよ。

みんなのお陰でアタシは物凄く幸せだよ。

アタシは今生きている。

アタシが夢見た場所に立っている。

憧れていたこのステージに！！

計り知れない歓びをカラダいっぱいを感じながら…

初めのイッポ

夢にまで見た武道館のステージ。

友達の付き合いで始めてライブを見に来て、あまりの迫力に圧倒されたのもまた、武道館だった。

ソレがアタシの原点で。

その武道館のステージにアタシは今、立っている。

夢みたいだ。

カラダがフワフワしてる。

足が地についてないみたいで。

目の前には満員のファンの人達。

みんなの顔が涙で滲んで見える。

“頑張ってー！！！！”

客席からたくさんの声が聴こえる。

アタシの頬には、大量の悦びの涙。

止まらない。

メンバーがアタシの元へ次々に寄ってきて、アタシのアタマを軽く叩く。

だからアタシは歌う。

声を振り絞って．．．．

数年前．．．．

「お帰り。」

「お帰りヒヨリ。」

『ただいま。お腹空いたあ。』

バイトを終えて家に帰ると、必ず毎日パパとママが迎えてくれる。

帰りはだいたい毎日10時近くになるんだけど。

彩沢陽依・高校2年。
ひより

加入して1年になる、愛する我がバンドの為に、日々バイトに励ん

です！

入浴・食事を済ませて部屋に戻ってするコトは、キーボードの練習。

アタシはバンドでボーカルとキーボードを演ってる。

約1年前、友達の付き合いで武道館にあるアーティストのライブに行ったのがきっかけで。

アタシはすぐにバイトを始めた。

同級生のバンド演ってる男子の関に、“とにかくバンドは金が掛かる”って聞いたから。

パパもママも2つ返事でOKしてくれたおかげでアタシはバンドもバイトも始めるコトが出来た。

関が学校帰りに楽器屋に連れてってくれて、ソコで見つけたのは男だらけのバンドだった。

でも演りたいジャンルがアタシと一致したから、即連絡を取ったら偶然にもその日練習があるからってすぐ合流して。

演りたいジャンルが一致してるだけに、“コレ歌ってみて”って言われた曲がアタシがカラオケで良く歌ってる曲だったってのと、何でか一発で意気投合したってので、アタシは即加入が決定した。

アタシが加入したバンド、“wonderful☆world”は、アタシ以外のメンバーはかなりのキャリアで、それぞれが別々のバ

ンドから集まったばかりだった。

にも関わらず、もうかなりのレベルで出来上がっていて、アタシはかなりの疎外感を感じたから、とにかく練習した。

バンド練習もバイトもない時は1人カラオケに行ったり、

いろんなバンドのライブ映像見て研究したり。

そんなある時に関に言われたの。

「オマエさあ、キーボード演ってみたら？」

って。

初めは呆氣に取られたよ？

正直“何で??”って。

関が言うには、

“ワンワー(wonderful☆worldの略称)ってギターは2人いてキーボードいないからキーボード演ってみたら? バンドの戦力になるならないは別としてさあ。曲創るのにギターかキーボードどっちは役立つから。”

ってコトらしい。

メンバーと初対面の時に関も一緒にいて、他のメンバーのテクニクに惚れちゃって、今じゃすっかり関とメンバーは仲良し。

そして関は、アタシの良き相談相手。

関とは演ってるジャンルが違うけど、とってもいい音楽仲間。

早速次の日に関とキーボードを買いに行つて。

まだ練習段階だから、メンバーには言っていないけど。

まだ言えるレベルじゃないから、こっそり練習中。

早く言えるようになって、必死で練習中。

そんな時だった、アタシのキーボードの上達を否応なしに急がせたのは。。。。

ある日、リーダーでギターのテツちゃん（新藤哲弥）からメールが来た。

“明日の練習前、いつもの店に4時に集合！”

なんだろう。

いつもは練習後にファミレスでミーティングなんだけど。

“当たり前構わずオーディションに出しまくる”

作戦のウチの何かの結果でも来たのかな？

ちょっとした期待を持ってみたいして。

それにしても学校終わってからだから、着替えに帰る暇ないなあ。

仕方無い、持って行くか。

翌日・・・

『今日の練習はそのまま行くね。夕飯は済ませて来るよ。』

着替えを入れたデカバックを持って学校へ。

「おはよう、ヒヨリ。どうしたの？その荷物。」

クラスメイトの紫織が呆れ気味に声を掛けてきた。

『おはよう紫織！今日は練習直行なの。』

「ふん。」

確かにアタシ、異様な出で立ちだよな…。

「アレ？彩沢、今日練習じゃねえの？」

廊下でアタシの異様な出で立ちに気付いた関が、廊下から言ってきた。

机に荷物を置いて、廊下の関のトコロへ行った。

『うん。今日は練習前にミーティングらしく、集合が早いだよ。』

「何か結果来た？」

嬉しそうな表情の関。

『分かんない。何も言ってないけど。』

関もウチらの“当たり前構わず作戦”は知っている。

関も気になる様子。

放課後、幸い掃除が無いアタシは大急ぎで学校を後にした。

途中着替えていつものファミレスに着くと、もう4人は集まっていた。

「お疲れ！ヒヨ。」

立ち上がり呼んでくれたのは、テツちゃん。

テーブルに行くと、4人が口々に挨拶。

「おう。」

と、軽く手を上げたのはベースの“まゐ”クン（矢幡学）

「お疲れい！」

ハイタッチを求めて来たのはドラムの“セン”ちゃん（風間千多）。

無言で手だけ上げるのが、もう1人のギターの“ナオ”くん（渡部直弘）

我がwonderful☆worldは、この5人。

制服が入ったデカバックをソファアの脇に置き、ナオくんの隣に座った。

「じゃ、ヒヨが来たところで改めて。」

テツちゃんが徐にハガキをテーブルの上に出した。

何なに??? やっぱり結果かな?

身を乗り出してハガキを確認。

「すげえ…。」

「マジで??」

「やっぱオレらってすげえんだな…」

口々に感嘆の声を上げる男子の中、アタシは啞然として開いた口が塞がらなかった。

ハガキに書いてあったのは驚くべき文字だった。

“一次選考通過のお知らせ”

悦びも束の間、差出人を見た瞬間、アタシは目がテンになった。

“グレイトロックフェア事務局”

「テツ、オマエグレイトロックにも出したの？」

声が上がると驚いているのはまあクン。

顔色1つ変えずに冷静にテツちゃんは答える。

「当たり前構わずって言ったろ。」

何も言い返せないまあクンの代わりなのか、今度はナオくんが言った。

「当たり前構わず過ぎだろ。グレイトロックだぞ？」

ちょっとキレ気味にも見えるナオくん。

「まだ一次だよ。」

失笑気味のテツちゃん。

「そりゃそうだ。」

ボソッと呟いたのはセンちゃん。

アタシはただただ絶句…。

ナオくんやまあの反応は無理もない。

グレイトロックフェアと言えば、毎年夏に行われる国内最大級で国際レベルの音楽の祭典。

ジャンルを問わず、超一流のミュージシャンが世界中から集まる超ビッグなお祭りだ。

そこにアマチュア枠が2つあって、1つの日本枠を決めるオーディションが約1年前から始まるのだけど、

来年出場枠のオーディションの1次選考を通過してしまったのだ。

確かにセンちゃんの言う通り、まだあくまでも1次選考だ。

だけど、コレはかなり一大事だ。

何せそんだけデカ過ぎる“お祭り”なだけに、アマチュアのみならずプロだってみんな憧れを抱く。

オーディションの応募数だって毎年ハンパ無い。

そんな中でステージに上がっちゃったら、否応なしに注目されるのは必至。

そんな大会の、1次選考とは言え、かなり凄いコトなのだ。

アタシはつくづく、とんでもないバンドに加入してしまったコトに、恐ろしさすら感じたのである。。。

アタシの運命を変えた、初めて行ったライブを演ったバンド、メンバー全員リスペクトしている“キャンディバー”もまた、グレイトロックのアマチュア枠がきっかけでデビューした人達だった。だからたかが1次選考、されど1次選考なのだ。

「オレ、今まで毎年応募してたけど、1回1次通っただけだったぞ。」

コーヒーを一口飲んでおどろおどろしい声を出したのはまあクン。

「オレは何回か出して全滅。」

ちょっとコーフン気味のナオくん。

アタシは震えが止まらなかった。

テツちゃんは自信ありげな含み笑いを止めなかった。

「やっぱりすげえんだな、このメンバーは。」

アタシ・ナオくん・まあクンとは逆に、笑顔のセンちゃん。

「オレ行くと思うよ、グレイトロックのステージ。」

テツちゃん??????

次の瞬間、

「はあああああ？」

まあクンのすつとんきような声が、見事に店内に響き渡った。

でも、アタシも心の中では大絶叫。

めちゃくちゃ涼しげなんだもん、テツちゃんもセンちゃんも・・・。

確かにアタシが初めて4人と会った時、テツちゃんは言っていた。

“最強な予感がする”

って。

男子4人のレベルは確かに凄まじい。

アタシがかなり足手まといに見える程。

でも、アタシも何となく思えちゃう。

“このメンバーなら何とかなるんじゃないか”

って。。。

2次選考は2ヶ月後。

「練習、週イチに増やして大丈夫？」

とテツちゃん。

「当然だろうな。」

ナオくんのコトバに全員頷いた。

「オレ、マスターに聞いて見るわ。」

センちゃんはスタジオ兼ライブハウスでバイトしている。

たまにスタジオ代節約の為に、ライブのない午前中とか、スタジオの予約が入っていない日に時間が会えば、安く貸してもらっているんだ。

「頼むわ。」

とテツちゃん。

その後、スタジオの時間まで選曲でかなり白熱した。

練習はさらに白熱した。

もともとみんなかなりのキャリアなだけに、何かと音楽の意見では衝突する。

みんながみんな、バンドのコトを考えているからこそなんだけど。

それだけでなく今日の演奏は、コトあることにストップした。

みんな気合いが入りすぎて空回りして。

『普段通り演ろうよみんな。普段通りに演って1次通ってるんだから。』

アタシのコトバに、ソッコーで噛みついてきたのはナオくん。

「普段通りって、グレイトロックだぞ!？」

見事にコーフンしている。

「ひーの言う通りだ。」

センちゃんが仲介してくれた。

センちゃんに目をやると、その斜め後ろのテツちゃんも頷いていた。

ホッ…。

「ヘタに空回りして悪化したらどーすんだよ。グレイトロックも他のオーディションも同じだよ。」

テツちゃんが言った。

「だいたい、応募してんのはグレイトロックだけじゃないんだから。当たり構わず作戦はまだまだ続くんだから、グレイトロック一本でワケにはいかないよ。」

続けたテツちゃんのコトバに、ナオくんは黙ってしまった。

もう一度ホッ…。

胸を撫で下ろす。

そんな調子で練習は終わった。

大きくため息。

その後、通常通りファミレスミーティングへ。

2時間のスタジオ練習で、ウチらの持ち曲全て演奏して、それを元にミーティングでみんなで話し合って、グレイトロックの2次選考の曲を決めるコトにした。

「あのさあ、ちょっとイイかなあ。」

テツちゃんのコトバに、みんなテツちゃんを見る。

「“moon”は次を取っておきたいんだ。ちょっと考えがあつて。」

「あん？」

「・・・おう。」

センちゃんとナオくんはためらいながらも承諾。

「確かにバラードはまだ出すには早いな。」

珍しくまあクンがテツちゃんの意見に一発で乗った。

このバンドの暗黙の了解、

“テツちゃんとまあクンの意見がイッパツで合致した時は素直に聞け”

に従い、バラードの“moon”は今回は見送るコトに。

テツちゃんとまあクンは正反対の性格だから、いつも衝突してばかり。

だけど2人の考えが同じ時は、だいたいイイ方向に行くコトが多い。

「まだアップテンポでイイだろ。次ってライブハウスだろ？ノリ重視だな。」

まあクンの意見で、曲が絞られていく。

とりあえず3曲に絞り、1ヶ月の練習で決定するコトにした。

帰り際……

帰りはいつもテツちゃんと同じ。

「コレ、練習しといて。」

テツちゃんがギターケースの中から1枚のクリアケースを取り出した。

街灯の光でクリアケースから中身を取り出す。

アレ？

『“moon”のスコア？』

「イントロでキーボード演って欲しいんだ。」

パキ・・・ン

アタシの心臓が破裂した気がした。

「純也に口止めされてるから他のヤツらにはまだ言わないからゆっくりにイイよ。今はあの3曲中心で。」

スコアを見つめたままボー然。

純也？

関????

ひゃっつっ！！！！！

まさかアイツ・・・。

血の気が引いた。

「オレで良かったら練習付き合うからさ。ヒヨのキーボード、楽しみにしてるよ。」

ちゅど↓↓↓↓↓↓ん

（アタシの中の何かが崩壊する音。）

関
い
い
い
い
い
い
い
い
い
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!

血の気が引いたと思ったら、今度は一気にアタマに血の気が集まった。

何とも説明のしようのない感情がアタシに今、沸き起こっている。

「純也は悪くないよ。純也はちゃんとやってたからさ、
“アイツに口止めされてる”って。」

「つて言うかさあ、前に純也にボヤいたコトあったんだ。“キーボードいたらイイなって思うコトがある”つて。そしたら純也がヒヨが悩んでたからキーボード勧めたつて言つて。すげえ嬉しかった。」

ふしゅううううううううう。。

（何かが抜ける音）

気が遠くなりそう。

「でもコレだけは言っとく。オレだけじゃなく、ナオもまあもセンもみんな、オマエの歌、大好きだよ。」

ひ
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
○

（思考停止の音）

「センのドラムがあつて、まあのベースがあつて、オレとナオのギ

ターがあつて、オマエの歌があるから wonderful ☆ word
ldなんだよ。オレの自信はこの5人だから起きるんだ。」

テツちゃんの優しい笑顔が胸を刺した。

ちよつと涙が滲む。

『ありがとう。』

涙声で呟いた。

テツちゃんはアタシのアタマを優しく撫でてくれた。

翌日……

「彩沢！」

関だ。

校門近くで関が駆け寄ってきた。

『おはよー、関。』

関に言わなきゃ。

「で、何だった？」

明日への階段

たかが1次選考。。。。

されど1次選考。。。。

1次選考の結果発表の前に明かされた、驚愕の真実。

今回の応募総数、

13058組

アタシは、尋常じゃない速度で全身鳥肌が駆け巡るのを感じた。

事務局は何十人もスタッフで約2ヶ月、応募開始から締切までの間を掛けて、全て聴くらしい。

そんな途方も無いコト、聞いたダケでどっと疲れがくる。

スタッフに感服…。

その中から2次選考に進めたのは60会場×15～20組。

この時点で既に概算で1／12くらいに絞られて、次の3次選考には各会場から2組ずつ。

更に1／7。

最初からは一気に1／130。

そのコトがアタマにあったかどうか分からない程、演奏中のコトは全く憶えていなかった。

まるで夢の中にいたかのような感覚で。

ステージから退く時に、みんなからもみくちやにされた辺りからは憶えていた。

それくらい、無我夢中だった。

「2次選考、当ブロック通過者2組目は、wonderful☆worldです!!」

え え え え え え え え え え え え え え え え ? ? ? ? ?

前のテツちゃん、微動だにせず。

アタシの背後からみんなの声がする。

誰かがアタシに抱きつく。

やっ
ちや
つた
よ・
・
・
○

「まだ2次だよ。まだ浮かれていけないよ。」

喜ぶナオくんとセンちゃんは何故か付いてきた関に一喝、テツちゃんがいとも通りc o o lに言い放った。

アタシは、通過したコトがまだイマイチ把握出来てないのと、“m o n”を演るのが近付いてきている猛烈な緊張で、心中はぐっちゃぐちゃだった。

「今日くらい浮かれさせろよ。」

畏縮するセンちゃんと関。

強めに反論するのはナオくん。

「このくらいで浮かれんな!! お楽しみは取っとけ!」

いつにない真剣なまあクンに、みんな何も言い返せなかった。

まあクンらしくない。

ソレがみんなの正直な感想だったと思うよ。

でも分かった。

誰よりもコレに懸けているのはまあクンなんだって。

まあクンは誰よりもアツい男。

もちろんみんな音楽のコトにはアツいケド、まあクンは1番アツい。

ソレが原因で、バンドが長続きしないって自分で言ってた。

「次からは2曲ずつだ。と言うコトで、バラードとアップテンポ1曲ずつがイイと思うんだけど。」

ドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓！！！！！

「だろうな。」

「賛成。」

「オレも。」

テツちゃんの提案にみんな即答するなら、アタシは1人、何も反応出来ないでいた。

「来たっ！！！！！！」

1人喜ぶ関。

何だかムカつくわあ。

つい関をキツく睨んでしまう。

その後、上目遣いでテツちゃんを見る。

やっぱり涼しげな顔のテツちゃん。

みんな口々に上げた候補曲の中に、当然moonも上がった。

アタシは恐れ多くてmoonを上げなくて、別の曲を上げた。

でも結局moonは候補の中に上がってしまい、数日後に控えているライブでのリストにも入ってしまった…。

また眠れない日々が続くわあ…。

アタシが大人しすぎるコトを不思議に思ったセンちゃんが、アタシの顔を覗き込んできた。

「ヒヨ？」

『ん？』

ん？って言ったつもりが、声が上がっちゃって、“ん”じゃなくて気の抜けた“ふう”になっちゃった…。

「ちなみに“moon”はイントロでヒヨのキーボード入れるから。

」

「ええええええ？」

今回はナオくんの絶叫が店内に響いた。

一気に周りの視線がウチらに集まる。

相変わらず恥ずかしい…。

しかも今回は加えて自分のコトだし。

「オマエ、いつの間にそんな…。」

啞然としているナオくん。

「ココんとこ忙しいのに御苦労さん。ましてやオマエが一番忙しいのにな。」

センちゃんの優しい笑顔に思わずジーンとなる。

「ヒヨが、加入してしばらくの間あまりにもオレらが出来上がり過ぎてたから、自分が足手まといになるんじゃないかって悩んでたんだって。」

ぷう↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

テツちゃん・・・。

恥ずかしいいいいいい…。

照れ臭くて顔を上げられないよ。

今にも顔から火を噴きそうだよ。

「やるなあ、ひー！」

隣のまあクンに羽交い締めにされた。

目にはうつすら涙。

羽交い締めに遇ったからではないよ。

あえてみんなの前で言われちゃうとね…。

「じゃ、練習行くか。」

テツちゃんがスッと立ち上がった。

せっかくみんな休み取ってるからって、2次選考が通ってもダメだったとしても練習入れようってコトになった。

否応なしに、アタシはみんなの前で“moon”を演るハメになった。

それはそれはもう半端ない緊張につぐ緊張で。

手が震えちゃって。

たかがイントロの12小節足らずなのに情けない…。

でも、みんな温かい笑顔で拍手してくれた。

それでまた泣いちゃった。

かろうじてミスは無かったケド。

その後も何回かみんなに合わせて。

「決定だな。」

とんでもないコトを言ってくれちゃったのは、ナオくん。

だけど他のメンバーもみんな頷いてる。

関を含め。

とりあえずライブで演るコトになってしまった。

ライブと言っても、まだまだ動員数のほとんどは身内や知り合い。

自分達のノルマをさばくのがやっとで。

まだ数回しか演ってないけど。

グレイトロックって言っても、まだ2次選考だから、メディアで取り上げられるワケじゃないから知名度は変わってない。

着替えと道具の入った、一段と大きなバッグを持って学校から直行。

やっぱり関も一緒。

関もなぜか大きなバッグを持っている。

「おはよーございまっす」

『おはよーございまあす』

2人揃って会場入りした時にはもうリハーサルが始まっていた。

取り急ぎ制服のままでリハーサル。

えっ!?

同じく制服のままの関は、一眼レフを片手にステージに向かってカメランみたいな格好してる。

『どーしたの?ソレ!』

歌そっちのけで関に突っ込む。

「アニキの借りてきた。」

ビックリしたあ。

さすがにいくらなんでもあんなご立派な一眼レフを自費購入まではしないよね。

ナオくんやまあクンはかなり興味を持っているよう。

ウチらのリハースルが終わり、アタシの準備中、男子はみんな一眼レフに夢中だった。

みんな凄く子供みたいな顔してる。

『アンタは何なのよ。』

何の違和感もなくウチらの中に溶け込んでいる関に、アタシは違和感炸裂。

ヘアアイロンで髪をセットしながら鏡越しに関に噛みつく。

「もう純也は完璧にスタッフだろ。」

隣のナオくんが言った。

みんな黙認。

『アンタ自分のバンドどうすんのよ!』

更に噛みつく。

関は高校の軽音部でバンドを演っている。

ポジションはボーカル。

「問題ねえよ。他のヤツらもみんな校外で別に演ってるから。」

何喰わぬ顔の関。

ダメだこりゃ・・・。

ウチらの出番が終わった時に関はいなかった。

舞台袖で待ってるかと思ったら…。

楽屋にもいなかった。

どこ行ったんだ? アイツ。

アイツの荷物は置きっぱなし。

大事な一眼レフもある。

フロアにでもいるのかな。

構わず着替える。

しばらくすると関は満面の笑顔で戻ってきた。

「おうお帰り。」

至って自然に挨拶するテツちゃん。

「お疲れ様でした！！バンドチェンジの間にビラ配って来ました。」
やりきった感爆裂の関。

『ビラ？』

すかさず聞き返す。

自信満々の関がバッグから出したのは、1枚のビラだった。

「すげえ・・・」

「うおおおお！！！！！！！！」

「やるなあ純也！！」

「頼もしいな。」

みんながみんな口々に絶賛してるのを、アタシはなぜか素直になれ

ないでいた。

素っ気なくあしらっちゃって。

でも、確かにクオリティは高かった。

「オマエ才能あんなあ。」

べた褒めにやたらと照れている関。

かくして、関は完全にウチらのスタッフに染まってしまったのだった。

とは言え関もバイトしてるから、何でもかんでもくつついて来るワケじゃなく、校内で常に2人でいるワケでもなく。

気になるのはライブの時や、勝手にポスターやビラなんかを作ってくる時くらいで。

しかもステッカーまで作っちゃって。

“何者なんだ” って、呆れを通り越して唾然としちゃう。

そんな中でも、

“ 今度の日曜、店空いてるって。”

なんてセンちゃんからのメールが来ては、バイト先の店長に頭下げ

て休みもらって。

“「全国大会行かなかったら当分無給な。」”

なんて、冗談まじりだけど、みんな協力してくれている。

休みを代わってくれるバイト仲間も、

“全国行かなかったら当分お昼おごってね。”

なんて。

みんなにアタマが上がらない。

是が非でも進まなきゃ…。

いい意味でのプレッシャーだよ。

“「くれぐれも練習し過ぎて喉やられたとか腱鞘炎になったとかアホなコト言わないでね」”

ってテツちゃんに念を押されてるから、あまり無理はしないようにしてるモノの、やっぱり練習は無理しちゃうよね。

でもやっぱりそれより気を遣っているのは喉。

のど飴は結構マメになめてる。

飲み物もお茶やミネラルウォーターを飲むようにしてるし。

風邪引かないようにも注意して。

“「ここまで来たら後は自己管理だ」”

ともテツちゃんから言われる。

アタシは大人しく従っている。

最近ホントに忙しいから。

もう少しで冬休みなんだけど、今すぐに冬休みが来ないかなって祈っちゃう程忙しい。

ココで根を上げてたらこの先まだまだあるのに、とてもじゃないけどもたないけど、

こんな日々、経験ないから正直キツイ…。

3次選考進出は、それでもまだ120組。

7会場から2組が選ばれて、その後が全国大会。

全国大会で優勝した1組が、晴れてグレイトロックに出場出来る。

当然だけど、進めば進む程、忙しくなる。

さすがに根は上げないけど、ただ1つ、

“休みを下さい・・・”

“当たり前構わず作戦”の成果がイイ方向に出て、ちよつとずつオー
ディションが重なって信じられない程の忙しさだから。

カラダ壊さない方がおかしいんじゃないかって思う。

そして冬休み初日、

事件は起きた。

キーボードを背負ったままで、アタシは会場を見上げたまましばらく
くその場に立ち尽くした。

何度か、観客としては来たコトのあるホール。

まさかココにこうして来ちゃうなんて。。。

今更ながら畏縮。

アタシのそんな気持ちはもちろん御構い無しに、大会は粛々と進み、
、、、、

「発表します！」

心臓、ぶち破れそう…。

何度か客としてライブを観に来たコトのあるホールの上のステージの上。

アタマが真っ白になった演奏を終え、結果発表の時。

自分の心臓の音、あまりの大きさに周りの音を掻き消す程の威力。

「グレイトロックフェス全国大会、当ブロックもう1つの代表は・・・」

気絶しそう。

足が震えてる。

力が入りすぎて手が痛い。

目が潤んでる。

「wonderful☆worldです」

ピ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

アタシの耳にはそんな音がした。

まさに思考停止……

どうやらアタシは立ったまま気絶してたらしい。

ブロック大会からテレビカメラが入っていたコトにより、アタシのトリップ状態は、後にモノの見事に全国放送で流れてしまうコトになるのだが、

立ったまま気絶したと言う事実は、かろうじてメンバーしか気付いてなかったらしい。

とにもかくにも、

wonderful☆world、

グレートロックフェス、

約1／1000の確率の、全国大会に

出場決定・・・

してしまいました↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓!!!!!!

信じていたい

ウソ・・・でしょ？

夢だよねえ……………。

どんだけ凄いバンドなのよ、wonderful☆worldって。

全国大会だよ??

あのグレイトロックの!!!

あたしゃもう満足だよ。

その証拠に、名前を呼ばれてから、しばらく涙が止まらなかった。

目が見事に腫れてる。

会場を出た今でも思い出すと込み上げてきて、涙が滲む。

さすがのまあクンもテッちゃんも、浮かれていた。

「いやぁ・・・、オレ的には3度目の正直で一気に全国かよ。」

遠くを見つめながらナオくんが呟いた。

「オレも5年越し。」

とまあクン。

「言っただろ、行くと思うよって。」

イヤミっぽいテツちゃんのコトバもまた、みんなのテンションを上げた。

みんなのテンションは、しばらく収まらなかった。

アタシはその姿を見ても、じわっと涙が込み上げるのだった。

カメラマンさんが1人、ウチらに付いてきている。

番組用らしいんだけど、今の状態だと、カメラが向けられてようが向けられてまいが、テンションは同じだった。

“「誰か報告に行ける人いませんか？どこにでもいいんですが。」”

テレビ的な映像の為に求めるカメラマンさんに応えたのは、協議の結果、アタシになってしまった。

家族よりも反応がありそうだと判断して、バイト先に行くコトに。

行くとみんな、明るく温かく迎えてくれて、みんなの表情に加え、カメラがいるコトで敏感に察して、一気に大喜びしてくれた。

報告した本人が一番驚いてるけどね。

その後カメラマンさんは帰っていった。

全国大会まで何回か取材にくるらしい。

正直、オンエアを見るまでは実感沸かないかも。

・・・と、思ったんだけど・・・

影響は、まさかの練習中に、如実に出てしまうコトになる。

「ゴメン。」

練習中、まあクンがいきなり演奏の手を止めた。

気にせずみんな平然と演り直す。

だけどソレは、センちゃんにも感染した。

「何演ってんだよ！」

キレルナオくん。

イヤな予感がしてならなかった。

すかさずテツちゃんが判断した。

「休憩！」

ちょっとひと安心。

無言のまま喫煙組はスタジオを出ていった。

アタシもみんなのコーヒーを買いに外に出た。

喫煙所のセンちゃんとなおくとまあくんは、笑い合いながら、楽しく話していた。

さっきの雰囲気がウソみたいに。

だけど、練習終了後のミーティングでまた起きた。

「全国大会だぞ！？どーゆーコトか分かってんのか？」

まあクンの何の気ない一言になおくんが噛み付いた。

2人とも、それぞれにグレイトロックには並々ならぬ思いがある。

でも、それはみんな同じ。

ダブってしまっている大会の予選について話している時だった。

合格通知が来ている2つの大会も、しっかり同じテンションで受けようと言うまあクんに、他の大会は捨てようと言うなおくん。

メンバー内の衝突は今に始まったコトではない。

むしろ良くあるコト。

だけど、間違いなく言えるのは、今まで以上にちょっとしたコトが原因になっている。

フタコト目には、

“「全国大会だぞ!？」”

“「グレイトロックだぞ」”

って出るくらい、みんな“グレイトロック”と言う巨大なモンスターに喰われてしまっていた。

つくづくアタシはコトの大きさを感じずにはいられなかった。

しまいには、

意見がまとまらなくて、候補曲がなかなか決まらないって言う事態まで。

こんな時もテッちゃんはやっぱり冷静。

あたふたするアタシに、テッちゃんはただ一言、

「気にすんな。」

って、サラリと言い飛ばして。

気にすんなって言われても、候補曲が決まんないって…。

とは言え、どうやら気を揉んでるのはアタシだけみたいで。

関も静観。

『なんでみんな冷静でいられんの？』

ある日の夜、アタシは電話で関にぶつけていた。

「オマエはメンバーのコト信じてねえの？」

関は一言そう言い放った。

えつつつ。

正直一瞬ためらった。

「信じてるから黙ってんだろ？」

信じてるから言いたいコト言えんだろ。お互い信じてるから、言っても大丈夫ってボーダーラインが引けんじゃねえの？」

関はやたらとあっさりしていた。

アタシはしばらくボー然としてしまっていた。

「みんながぶつかり合うのは、その時だけだろ？男は女と違って長引かないからさあ。」

“男と女”・・・。

確かに男だらけのバンドで、1人アタシは戸惑うコトが多々ある。

そう言えば、ハラハラしてるのはいつもアタシだけだった。

“男と女”か。

おっつつつつ!!!

ふと歌詞が浮かんできた。

『ごめん！ありがとう。』

慌てて電話を切り、バタバタとアタシはノートに書きなぐった。

“男と女”

単語単語ではあるけど、思い付くコトバを全て。

男心と女心はまるっきり別のモノなんだよね。

前にテレビで“男と女じゃ脳の造りからして違う”って言ってたし。

“男のコトは男に委せとけ”ってか？

そうするか。

テレビでこの前のブロック大会のコトがオンエアされ、深夜番組と

は言え“グレイトロックのアマチュア代表を決める大会”の注目度は想像以上に高く、

“「頑張ってください」”

って、知らない人に声を掛けられたり握手を求められたりし始めてきた。

正直、戸惑いを隠せない。

もう冬休みだから、通学中や学校でどうこうってのがないからまだイイけど…。

バイト先で声を掛けられるコトは多いかな。

アタシのバイト先はファミレス。

店にメンバーで押し掛けてみんなに報告する場面オンエアされてるしね。

全国大会まであと1ヵ月半…

まだ候補曲すら決まっていない。。。

『アンケート取らない?』

ある日の練習の最中。

突然アタシは閃いた。

みんな何事かと驚いてる。

『今度のライブで来てくれた人達にアンケート取るの。誰目当てに来たかとか、ウチら目当てなら何回目かとか書いてもらって。』

アタシのキラキラ顔にみんなポカンとしている。

『ウチらで決めようにも決まんないんだからさあ、当日だってウチらを知らない人が大半なんだからさあ、ちょうど良くない？ウチらがイイと思っても観客がイイと思わなかったら何の意味も無いんだし。』

アタシがここまで仕切るのは今までなかった。

「イイね、それ。」

「やるな、ひー。」

「思い付かなかったワ。」

「お見事。」

みんなの意見は一致した。

来ていた関と目が合い、関が小さくガッツポーズしてくれた。

アタシも笑顔でガッツポーズで応える。

“メンバー内でモメてるヒマはない！”

内心そう叫びたかったけどね。

結局アンケートはアタシが作るコトになり、ライブで関が配布し、MCでアタシが呼び掛けた。

オンエアの影響で、ウチら目当てのお客様が増えてきた。

対バンの皆さんにも、

“「ワンワ―が出るって言うのと、今までより売りやすくなった」”

とか、

“「ワンワ―出るなら行くって言われる。」”

なんて、嬉しいおコトバを頂くようになり…。

ライブハウスからも出てくれていると言われたり。

今まで無かったコトに戸惑いまくってる。

幸い冬休み中だから、学校がある時よりは比較的ラクで、今までよりもライブの回数が増えてるにも関わらず、店にもあまり迷惑を掛けずに済んでいる。

有難い限りです。

とは言え所詮冬休み…。

あっという間に終わってしまうんだけどね。

ソレが終わればまたスーパーハードな日々が始まる。。。

しかももなく試験付き。

前回の試験の時もキツかったのに、今回は更にキツイ。

単位を落とさない程度でやろっと。

今回はとりあえずダブんなきゃイイってパパママにも言われてるし。
。

みんなの協力でアタシは成り立っております。

ライブのアンケートでようやく候補曲が絞られた。

やっとだよ。

いつも演った曲だけに、何もしなくても完成度はかなり高いハズ
なんだけど、、

「何か違う。」

突然演奏を止めたのはナオくん。

またか…。

「行くぞ！」

構わずテツちゃんがイントロを弾き始める。

弾きながらも納得行かない雰囲気のアオくん。

「セン、ちょっと走り気味じゃね？」

アオくんがまた演奏を止めた。

「走ってねえよ。」

センちゃんもキレ気味。

もちろん雰囲気悪い。

もおおおおおおお！！

限界を一気に振り切った。

『モメてるヒマないでしょ！みんなしっかりしてよ！！こんなWonderful☆worldじゃないよ！』

自分でも驚いたけど、それだけ我慢してたんだって気が付いた。

もちろん異様な空気になった。

「ヒヨの言う通りだ。オマエらヒヨに言わせんなよ。ヒヨが言うなんてよっぽどだぞ！？」

テツちゃんが入ってくれたお陰で空気は何とか良くなったけど、アタシはいるに耐えなくなってる。

スタジオを飛び出した。

涙が溢れてきちゃって。

“ 何で言っちゃったんだろう ”

“ どうして我慢出来なかったんだろう。 ”

後悔が怒濤のように溢れ出てくる。

アタシはトイレに駆け込んだ。

すぐに関の声がした。

「ヒヨお！」

涙で返事出来ない。

ドアを叩いて反応する。

「大丈夫か？」

大丈夫なワケないだろ…。

ノーリアクション。

「今休憩してる。出れるか？」

うつ向いたまま、トイレットペーパーで鼻を押さえたままトイレを出た。

顔は洗い流したから濡れたままで。

関はアタシのアタマに優しく何も言わずに手を当ててくれた。

「今日はもう2人で帰ってイイよ。関、ヒヨよろしくな。」

テツちゃんの声だ。

「あつ、すいませんありがとうございます。」

うつ向いてる視線の先にアタシのバッグが見えた。

テツちゃんが持ってきてくれたのかな…。

「ヒヨ、ありがとな。ヒヨに言わせちゃってゴメンな。ヤローだけでキツチリカタつけるから。」

今度はテツちゃんの手がアタシのアタマに触れた。

男子の中でテツちゃんが一番アタシのアタマに触れてるから、テツちゃんの手は感触でわかる。

“ヤローだけでキツチリカタつけるから。”

何だか頼もしいような、寂しいような、フクザツな気持ちだった。

でも、確かに今日はもう無理だから、テツちゃんに任せよう。

『じゃあ帰るね。』

“ 男のコトは男に委せろ ”

関の言う通りにしよう。

キズナ

気を取り直してアタシと関は、駅の近くのカラオケに移動した。

「テツさんにメールしといたよ。ココにいるって。」

アタシが選曲している間に関はそんなコトをしてくれていたようだ。

『ありがとう。』

みんなのコトは信じてるけど、心配は心配。

テツちゃんには帰れって言われたケド、気晴らししたかったから関に付き合わせて。

練習にもなるしね。

「無理もねえよ。きっとみんなそれぞれにプレッシャー感じてんだよ。今だってフロントでお前声かけられただろ？」

関の言うコトは確かに思うよ。

プレッシャーはハンパないって。

だけどそんなヒマは無いのも事実なのに…。

確かにさっきフロントで声かけられたよ？

“「頑張ってください！」”

って。

今に限らず、最近やたらと声をかけられる。

写真撮って下さいとかも。

それはアタシだけじゃなく、みんなもそうだと思う。

実際、ライヴの動員数増えてるし。

それがあーいうコトになったのも分かるよ。

だけどそんなの大好きなみんなじゃないから…。

だからアタシは言っちゃったんだ。

言って後悔してるけどね。

気が付くとため息。

「言って良かったんじゃないの？」

見かねたのか、関が一言。

「ヒヨが言っただけなのは意外とデカイと思うぞ。」

恐らく気のせいだと思うけど、関が頼もしく見えた。

『だどイイんだけどね。』

またため息。

「だって無理無いよ。相手はグレイトロックだぞ？デカ過ぎるよ。あーなって当然だよ。」

関のいうコトはそりゃ全くだ。

『だけど目の前であからさまにメンバーが押し潰されんの見たくないよ。』

アタシは窓の外を眺めていた。

『他にも大会は何コかあるんだし、アタシは全国大会に出れただけで十分だと思ってる。だってさあ、グレイトロックの全国大会に進んでるハズのバンドが他の大会であっさりコケてたらおかしいでしょ？だから“グレイトロックだから”とか何とかってのはしたくないの。』

コーフンして涙が滲んでいた。

「それもまた、男女の違いなのかもな。やっぱり男女混成の方が上手くいくかもな。」

含み笑いで関が言った。

『関、やたら“男女の違い”にこだわるね。何かあったの？』

最近のキーワードか？

「いや、ワンワ―を見てるとつくづく思うからさ。今までヤローだけでした組んだコトねえから。」

ふーん。

何だか思わせ振りだけど、あえて突っ込むのは止めよう。

たぶん、今までの自分の過去を振り返って言ってるんだと思うから。

しかし何だかんだ言って結局、歌ってるより喋ってる方が多いな。

「よし！歌うぞ！！」

何故か突然、関が吼えた。

関が入れたのは、関の大好きなと言うか、超リスペクトしているバンドの曲だった。

アタシも関の影響で聴くようになって。

だから関とカラオケに来ると、アタシが入れた曲も関が入れた曲もお構いなしに、ひたすら2人で歌ってしまう。

気晴らしにはもってこいなのだ。

もうそろそろ練習終わる時間だな。

『大丈夫かなあ。』

また外を眺めながらぼんやり呟いた。

「大丈夫じゃないワケねえだろ。大丈夫じゃなかったらどうすんだよ。」

関が鋭く突っ込む。

『そうだけどさあ…。』

ちよつとふてくされる。

「後悔してんのか？」

ズバリ関に指摘される…。

『ちよつと…。』

ひきつるアタシ。

「後悔する必要ねえって。さっきも言っただろ、ヒヨが言って良かったんだって。」

今日の関はやけに頼もしい。

アタシが弱ってるからかなあ。

弱ってる時ってココロにスキマが空いちやうから、ちよつとしたことでも良く見えたりするもんだからな。

でも、、

『ありがとね。』

言わずにはいられなかった。

「あん? ? ?」

照れ隠しなのか、ニラみ返されてしまった。

「何だよ歌ってねえのかよ。入れろ入れろ! !」

ナオくん?

「もしかしてお取り込み中だった?」

まあクン? ?

えっ? ? ? ? ?

みんながぞろぞろと入ってきた。

センちゃんもテツちゃんもいる。

みんないつも通りだ。

良かったあ。

「時間延長してきたからさ、歌うぞ! !」

無理になのか、張り切るナオくん。

“ごめんね”

って言い掛けた。

そしたらテツちゃんが首を横に振って、口元に人差し指を立てて見せた。

気付いたまあクンも、笑顔で頷いてくれて。

練習後のミーティングが、ワンワー史上初めてカラオケに変わった。

みんなよっぽど溜まっていたのか、物凄く盛り上がっちゃって。

アタシの発言が効いたのか、このカラオケが効いたのかは定かじゃないケド、何にしてもその後の練習はみんな肩の力が抜けて、いつも通りの練習に戻れた。

「あの時カメラ来てなくて良かったな。」

なんて、笑い話になるくらい。

『来てたらアタシキレてたかなあ…。』

考えると恐ろしいワ。

でも後日談としては、テツちゃんがインタビューで答えてた。

「もうワンワーは大丈夫だろうな。後は優勝に向かって一直線だ！」

ある日の昼休み。

ここ最近、昼休みは関にトレーニング付き合ってもらってるの。

腹筋してる最中に突然関が言い出した。

『何よ突然。言ってるでしょ？全国出ただけで十分だって。』

呆れるアタシ。

『他の大会もあんのよ？』

アタシはまるつきりその気なし。

メンバーじゃない関が張り切っている。

腹筋を続けた。

「オレもワンワーに入れば良かったな。」

あまりにも切なそうにボソツと言う関に、アタシは不覚にもドキッとしてしまっていた。

関のこんな寂しそうな表情、見たコト無かったから。

アタシは何も言えなかった。

“入れば？”なんて軽々しく言えないし、

“ワンワーよりもスゴいメンバー見つければいいじゃない”なんて無責任なコトも言えない。

アタシは腹筋を続けた。

でもその日の夜、アタシはテツちゃんにメールしてみた。

“関をメンバーに入れられないか”

って。

想像以上にテツちゃんは驚いていた。

「どうしたの？ヒヨ。」

なんて。

最近の関の発言と、昼休みの発言を話して。

「アイツもメンバーに苦労したんだろうな。」

ボソッとテツちゃんが言った。

テツちゃんはすぐに続けた。

「ヒヨはすぐにワンワーだったから分かんないと思うけど、メンバーの相性って、なかなか難しくてさ。」

テツちゃんも経験者なんだろうか。

コトバの端端に何かを感じた。

アタシは恵まれていたんだな。

「オレがワンワーに絶対の自信を持ってるのは、ソコなんだ。」

えっ???

意味が分からなかった。

「ヒヨが入ってメンバーが全員揃った時にピンと来た。インスピレーションでヤツ。」

直感??

「メンバーとの相性なんてインスピレーションなんじゃないかな。じっくり音楽性を話し合ってたっていつかは食い違うし、音楽性が合ったって人間的に合わなきゃどうしようもないし。初めて合った時に感じた。この前ヒヨが帰った時にそんな話になってさ。ナオもまあもセンも言ってたよ。」

コレは奇跡なんだろうか。

全員が全員同じコト思うなんて。

全員が同じコトを思うなんて、奇跡意外の何物でもないよね。

「だけどオレは、関もステージには上がらないけど wonderful world の立派な一員だと思ってるよ。みんな思ってるんじゃないかな。」

アタシはその夜、詞を書いた。

この出逢いに感謝して。

みんなで共作に出来たらいいなんて思いながら。

昨夜のグレイトロックの番組で、ウチらがオンエアされた。

テッちゃんがインタビュで話した、“あの事件”のコトを見事に取り上げられ、“奇跡の復活”なんて言われちゃって。

関が言ってたみたいに、“後は優勝一直線!!”だとも言われて。

“トラブルを回避し視界が完全にクリアになった wonderful world。”

なんて大げさなナレーションまで。

アタシは狙ってません！！！！

で、心の中で叫んだよ。

でも、みんなはこのフレーズをやたらと気に入っちゃって…。

やたらと口に出している。

“優勝一直線だああ！！！”

って拳上げたりして。

“「天狗になるな」” ってテツちゃんに言われてるけど。

他の大会の予選や、ライブハウスや対バンの人達からの出演依頼が増えちゃって、バイトに学校に練習にライブにで、アタシは嬉しい悲鳴が止まらず、やむ無くバイトを休職するコトになった…。

アタシは退職を申し出たんだけど、店長が休職にしてくれて。

「頑張って来いよ！」

って言うてくれて。

バイトがなくなって、気持ち的にはラクになったけど、それでもハードな日々は続いて。

この数ヶ月、ホントに殺人的だった。

いくら体力が有り余っている女子高生とはいえ、コレはツラすぎた。

関との昼休みトレーニングが、睡眠時間になっちゃってしまいうこともしばしばで。

その代わりってわけじゃないけど、毎朝のランニングはずっと欠かさなかった。

アタシがワンワに加入した時から続いているから。

もう完全に習慣だよね。

朝、自然とその時間に目が覚めちゃうんだ。

どんなに睡眠時間がなくても。

恐ろしいワ。

今までの予選の日も、喜びに明け暮れた翌朝も欠かさなかった。

特に今朝はいつもよりも早く目が覚めた。

グレイトロックフェスティバル全国大会当日――――

前日は早く寝たよ。

テツちゃんに釘刺されて。

“「ここまで来たら後はベストを超える状態で挑むしかない。だから今夜はすぐ寝るコト。深酒しなきゃ酒も許す。ヒヨはダメだけど。とにかく寝ろ。睡眠不足なんてふざけた真似したらブツ飛ばす。」”

普段のテツちゃんとは思えないほどの迫力だった。

みんな、頷くしかなくて。

ためらいながら頷くしかなかった。

だから練習後のミーティングも無しで。

そのせいと緊張のせいなのか、いつもよりも早く目が覚めちゃった。

だからいつもよりも早くランニングに出た。

3月の早朝だからちょっとツライケド、それよりもアタシはコーフンしていた。

距離は変えずに、近くのスーパーの駐車場で発声練習してみたりして。

何だかヤケに清々しい気分だった。

“「やるしかない」”

そう覚悟を決めてたから。

途中でみんなにメールしてみた。

“おはようございます。目覚めはどうですか？ いよいよだね。ここまで来たらやるしかないよね。いつものワンワラしく、楽しくやろうね。みんな、ありがとう。ワンワーに入ってホントに良かったです。ヒヨ”

こんな早い時間、いつもならみんな寝てる時間。

だけどテツちゃんからもメールが来た。

“みんなへ。

おはよう。ちゃんと寝れたか？ マジで寝不足はブツ飛ばすからな。いよいよ本番だけど、コレが全てじゃないから気負うことなく、肩の力抜いて、頑張ろうな！！ オレは正直、wonderful☆w間を信じて。関も合わせて6人でワンワーだ。byテツ”

ちょっとアツくなっちゃった。

“自分を、仲間を信じて”

ってトコが特に。

しかも関の名前まで…。

続けて来たのはまあクン。

“オッス。あんまり早く寝たモンだから夢見ちゃったよ。全員でステージに立ってて、目の前にはたくさんの人がメチャクチャ盛り上がってて。気分良かったあ。だからさ、みんなも想像しろよ。オレ

だけ1人こんなに気分いいの、イヤだから。ステージ上にテツもヒヨもセンもナオもいて、目の前には満員の観客でみんな盛り上がってる。ステージの袖には関もいる。気分いいだろ？今日は絶対大丈夫だ！行くぞ、優勝一直線だああ！！”

歩きながら泣き笑いしちゃうよ。

何かホントにみんなサイコーだよ。

2人のメール、保存。

みんな関にも送ってるのかなあ。

それにしても、まあクンからのメールが来た今で、まだ5時半だよ？

確かに今日の集合は7時だからいつもよりは早く起きなきゃいけないケド。

ナオくとセンちゃんはまだ寝てんのかな？

メールを読み終えて、ジーンとしながらも再び走り出して、家に向かった。

ん？ケータイが光ってる。

どっちな。

センちゃんだ！。

“ あんだよオマエら、目覚めてびっくりしたよ。ヒヨ、大丈夫か？
寝れたか？ wonderful☆worldはヒヨで持ってるよう
なモンだからさ。テツの冷静な判断も、ナオの音楽に対する誰にも
負けないアツい想いも、まあの明るくてみんなを想う気持ちも、関
の絶妙なサポートも、それがあって wonderful☆world
だから。オマエらでホントに良かった。もうこの先これ以上の出
逢いは無いと思うから、今日は思う存分暴れような。”

ダメだ、泣けちゃうよ。

何なの、この展開。

センちゃんのメールを読んでる途中、ナオくんからも来た。

それだけでさらに泣ける。

“ オマエらずりいぞ！人が寝てる間に！！オレが言うコト無くなる
じゃねえかよ。今まで何度もバンドを辞めて来て、正直初めはワン
ワーもそんな気持ちだった。だけどすぐにその不安は消えた。セン
の言うコトはもちろんだけど、ワンワの音楽の源はセンの抜群の
ドラムセンスだ。センだけじゃなく、誰1人として欠けたらワンワ
ーじゃない。もし誰かが何らかの理由で辞めたとしても、新たにメ
ンバーを加えたらきつとそれはワンワーじゃないと思う。オマエら
全員まとめて最強だよ。この世のモノとは思えねえ。サイコーだ！”

いつの間にか声を出して泣いていた。

ホントにみんな、グレートだよ。

こんな時に泣かせないでよ！！。

そして最後に関からも。

“ヒヨの付き合いで行ったのがきっかけで、オレまでこんなグレイトな想いを味わえて、本当にオレは幸せモンです！オレはステージには立てないケド、気持ちはステージにいさせて下さい。ヒヨの隣で歌ってるつもりで応援してます。そして、勝手に居座ってるオレに何も文句も言わないどころか、こんなに受け入れてくれて、感謝のしようありません。本当にみんな大好きです。ありがとうございます。5人なら大丈夫です。こんな最強なバンド、見たコトないです。オレは宇宙一の幸せモンです。”

関の分際でなかなかやるじゃないの。

アタシも関に話してなかったらこんな風にはならなかったと思うし。

そもそもアタシのメールが発端でこんな展開になるとは思いもしなかったよ…。

また思い付いたコトをこの前の詞のページに続けた。

アタシの詞ノートに。

今日が終わったら、きっとまた新たに書きたいコト増えるだろうから、みんなに見せるのはまだにしよう。

さっ、そろそろ準備するか。

とにかく楽しむぞつつ。

グレイトロック

集合場所にいたみんなの表情は、とても晴れやかだった。誰1人として寝不足は感じられなくて。

「おはようヒヨ。ありがとな。」

自信に満ちたテツちゃんの表情が、ヤケに輝いて見えた。

カメラが来ていた。

「今日1日、担当します。よろしくお願いします。」

いよいよなんだなって、実感…。

“ いざ出陣!! ”

みんなの顔には気合がみなぎっていた。

移動中はみんなで他愛もない話。

みんな集中して無言になるかと思ったけど、全く逆だった。

リラックスしてステージに立つ為だ。

まだ繋がっている他の大会の予選のコトや、ホントにどうしようもなく他愛もない話や。

会場までの時間はあつという間だった。

会場近くになるとオンエアで見た顔が続々現れて、否応なしに緊張し始めてきた。

けど、緊張を解したのはあるバンドの人のほんの一言だった。

「wonderful☆worldさんですね。」

その後も同じ様なコトを色んな人に言われたけど、一番始めに言われたその一言で気付けた。

“ウチらもオンエアされてるんだ”

って。

今まで自分の目でオンエアを見たり、地元で声掛けられたりはしてたけど、イマイチ実感なかった。

だけど自分がテレビで見てた人に声を掛けられると、つくづく思う。

リハーサル後にくじ引きで演奏順が決まった。

ウチらはなんと最後。

みんな絶句。

1人余裕だったのはやっぱりココでもテッちゃんで、

「イイじゃん練習出来るんだもん。」

て、抜群の笑顔で言った。

そのコトバに、みんな呆れが交ざった吹き出し笑い。

「テツらしいな。」

とか、

「全くだ。」

って。

そのコトバの通り、ウチらは会場の外に出て練習するコトにした。

コレが吉と出たのか、ウチらの演奏は、今までに無いくらいの出来で、みんなかなりリラックスしていて、まあクンの夢みたいにならなくても客席のみんなもメチャクチャ盛り上がって、

アタシはアタシで今までのどんなライブよりもテンションが行くところまでいっちゃって、

サイコーに気分良かった。

今までにないくらい暴れて、飛んで、煽って。

自分が一番不思議だった。

だけど改めて分かったコトがある。

“ウチらが楽しくなきゃ、見てる方だって楽しくない”って。

アタマでは分かっているつもりでいたケド、つくづく感じたよ。

ウチらの演奏終了後に行われた結果発表待ちのゲストライブを見ても痛感した。

「オマエ、いつの間にあんなステージング身に付けたんだよ。」

終了後、袖に引っ込むなり関に羽交い締めにされた。

続いてみんなに囲まれて。

『自分が一番驚いてるよ。自分でも不思議だった。ナチュラルハイってこのコトなんだね。』

ちょっと夢見心地で。

『みんなのお陰だよ。』

とびきりの笑顔だった。

カメラが回ってたケド、アタシは照れるコトなく、素直にみんなに向かって言えた。

みんなは何も言わず拳を突き出したり、ただ頷いたりして応えてくれた。

ちょっぴり泣いちゃった。

まさに完全燃焼。

ゲストライブの間は、みんなそれぞれに客席の後ろで盛り上がった、他の出場バンドの人達と交流したりと様々だった。

アタシは客席の後ろで、演奏されているバラードを聴きながら今までのコトを振り返っていた。

楽器店の掲示板で“メンバー募集”の貼り紙を見つけて、そのままみんなに合流して。

イッパツで意気投合して加入が即決定して。

あまりのレベルの高さに焦って関に相談してキーボード始めて。

本人が納得する前にしっかり予選で御披露目するハメになって。

みんなの意見のぶつかり合いの数々や、アタシがキレたコト。

たくさんの方の予選のコト。

そして今朝のメール。

いろんなコトが溢れ出す程に甦ってきて潤んでいた。

「ヒヨ？」

隣の関に声を掛けられたけど、

頷いて答えた。

関の手が後ろからアタシのアタマに来て、そのままアタシは関によって関に寄り掛かっていた。

心の中ではメチャクチャ動揺してたけど、なんとなくそうしてたくて、何だか心地がよくて、アタシはそのまま寄り掛かっていた。

多分関も特別な意味は無いと思うし。

お互い何を言うワケでもなく、バラードの間はずっとそのままだった。

そして……

「いよいよ結果発表です。まずは10位から4位までをイツキに発表致します。」

不思議と緊張は無かった。

充実感しか無かったから。

演奏終了後のインタビュも、心の底からの笑顔で“「悔いはありません！」”って言い切ったし。

それはみんなも同じだった。

客席の一番後ろで見守る関以外は。

だけど、事態は思わぬ方向へ向かって行った。

10位から4位までに呼ばれた。

つまり3位以上は確定だ。

“まさか……”

さつきまで全く感じなかった緊張がイツキに走る。

10位から4位までの人達の表彰の間、アタシはずっとドキドキしっぱなしで。

“順位なんか関係ない”

って思っている、3位以上だって確定したら、そりゃ否応なしに緊張するよね…。

後ろのまあくん・センちゃん・ナオくんはコーフンし始めている。

前のテツちゃんは、当然のように悠然と構えている。

「お待たせ致しました!!! いよいよ3位の発表です。」

ドキ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ! ! ! ! ! ! ! !

顔が硬直しちゃう。

手の汗が尋常じゃない…。

心臓、破裂しそう。

カラダ全体で鼓動を打っているみたい。

3位の人達の名前が呼ばれた瞬間、前にいるテツちゃんの拳が強く握りしめられたのが見えた。

後ろからも「っしゅ!!」って聞こえて。

アタシはもう気絶寸前だった。

残るは2位か優勝。

全国大会は出場アーティストが全部表彰されるから。

今アタシ、物凄く顔がひきつってると思う。

どっちにしても凄いコトだよな。

グレイトロックの優勝か2位かなんだよ？

アタシは顔を上げられなかった。

「それでは2位の発表です。」

その後の記憶は、見事に無かった。

後は何が何だかさっぱり覚えてなくて。

みんなが言うには、アタシがみんなにもみくちやにされたり、

号泣しながら「ありがとうございます」って言ったり、

ボー然としたままで商品を受け取ったり、記念撮影や囲み取材を受けた……

らしい。

その様子は関がしっかりカメラに収めていて、バッチリ証拠として残ってしまっているのだが、

確かなコトは、今アタシの目の前に優勝のプレートがあると言うコト。

何だか信じられない。

狂喜乱舞するみんなの横で、関のカメラでその瞬間を確認した。

“「本年度、グレイトロックフェスティバルアマチュア枠日本代表は、wonderful☆worldの皆さんです。」”

鳥肌が物凄い勢いで全身を駆け巡った。

アタシ動けてない。

その場で力強く拳を握るテツちゃんの後ろで、確かにアタシはまあクンとセンちゃんとナオくんにもみくちゃんにされてた。

ぼかんとした顔のまままでみんなに押されてステージの中央に行くアタシ。

プレートを受け取った瞬間号泣して、その後のインタビューに確かに答えてる。

恥ずかしいいいいいい…。

顔から火を噴きそう。

取材の後のミーティングで、ようやく現実を把握したのだけれど。

グレイトロック当日までの予定が書かれた資料をよこされて。

グレイトロックが行われるのは夏休み中。

それまでの間とはにかく練習とライブをこなさなくちゃいけない。

またハードな日々が続くのか…。

なんて思っていた次の瞬間、もっと現実的な話になっていた。

「彩沢さんは学校どうしますか？あと1年だから今のまま卒業したいですよね…。」

言われた瞬間は、全く理解出来なかった。

“学校どうしますか？って何！？”

って、ハテナ飛びまくってた。

「その方がイイと思います。3年なんで、夏休み明けは何とでもなるんで。」

代わりにテツちゃんが答えてくれてても、まだ意味が分からなかった。

「じゃ引っ越しは年明けで宜しいですね。」

・・・ひっ、、こ、しい???

「はい。全員年明けでお願いします。」

またテツちゃんが返事。

引っ越し????????

アタマの中ぐちゃぐちゃだよ？アタシ。

「では未成年のメンバーは、親御さんにこの書類を書いて頂いて返送して下さい。ご不明な点がありましたら、お電話なり直接我々がご自宅にお伺い致しますので。」

よこされた書類、

それは契約書だった。

事務所とレベルとの専属契約書。

ここでやっと把握出来た。

“デビューしちゃうんだ”

って。。。。

何故だかグレイトロック出場だけしかアタマに無くて、イコールプロデビューって全然理解出来なかった。

プロデビュー?????????

ダメだ、またトリップしちやいそう…。

クラクラする。

「1つ相談なんですけど…。」

クラクラするアタシの隣のテツちゃんが突然言い出した。

全員テツちゃんに注目。

「1人メンバー増やしてもいいですか？進化したいんで。」

スタッフさん、啞然。

ウチらも啞然。

まさか？

「まさか…」

まあクンだ。

「ツインボーカルにしたいんです。ヒヨは兼キーボードですが、新しいボーカルにはサックスを兼務してもらいたいと考えてます。」

何この展開。

だけど、誰も反論しなかった。

予想はついた。

「出来るよな、関。」

また鳥肌。

心臓が飛び出すよ。

関、ボー然。

よりによってサックスって…。

「その辺はお任せします。全く新たにイチから探すのならまだしも、関クンなら問題ないでしょう。ただ、グレイトロックには、間に合ってもあくまでもサポートで出てもらいますが構いませんか？」

Oh my God!

ほんの一瞬だけ考えて笑顔で返事してくれたのは、グレイトロック
フェスティバルのボス、引地サン。

番組プロデューサーの春田サンも笑顔で頷いている。

関はさっきのアタシ状態。

完全にフリーズしている。

反応出来ない関。

「もちろんです。ご理解頂いただけで十分です。ありがとうございます。」

「ありがとうございます」

エッ？

他のみんなもアタマを下げてる。

何！？

打ち合わせしたの？？？

ついついつられてアタシもペコリ。

良く分かんないけど。

ミーティングを終えて帰路に向かう途中も、関はボー然としていた。

魂が完全にいなくなっていた。

「関！関ってば！！」

何度呼んでも返事無し。

関の手にも契約書がある。

カメラ回ってるのに…。

「つたく、ウチのリーダーにはほんとと呆れるよ。」

笑顔のナオくん。

「全くだ。」

センちゃんも笑顔でテツちゃんを見る。

「お前は何でいつもいつもいつも1人で勝手に決めんだよ！」

1人キレてるのはまあくんだ。

テツちゃんは微動だにしない。

「でもオレも考えてた。」

なっつつつつ！！！！！！

センちゃんもナオくんもアタシもハツとした。

まあくんとテツちゃんの意見が合った時は、必ずと言ってイイ程に正しい方向に進むからだ。

「だろ？」

含み笑いで返すテツちゃんに、まあくんは苦笑いで応えていた。。。
その間も、関はフリーズしたままだった。

地元に着いてすぐに、カメラマンさんに言われた。

「じゃ、今回も行きますか、ヒヨリさん。」

へっ？

「バイト先に報告。」

笑顔のカメラマンさん。

・・・辞めますって言わなきゃいけない現実が突き刺さる。

今度こそ…。

とりあえずアタシ1人で入った。

先に言うコト言いたかったから。

裏口から店に入ると、ちょうど事務所に店長がいた。

マイクだけ着けさせられて。

「おう彩沢!! お帰りい。」

メチャクチャハイテンションで迎えてくれた。

『あのですねえ…、』

コトバに詰まる。

前に言った時より込み上げるモノがあつて。

「どうした?」

『申し訳ありませんが、辞めさせて頂きたいです。』

涙がにじんでいた。

「優勝したのか???」

店長の声が上ずっている。

アタマを下げたまま頷く。

「やったなあー!!」

店長が抱き着いてくれた。

顔を上げるとカメラマンさんがいた。

手で顔を隠す。

その後、そのまま退職の手続きを取った。

休職中だったから返すモノはすぐに返せて、退職届を書くだけで終わった。

店長に話を聞いたスタッフのみんなが次々に事務所にやってきてくれて、みんな祝福してくれた。

みんな次々にケータイにツーショットを収めて。

ひとしきり終わって店内に行くと、メンバーも関もカメラマンさんも、みんな食事していた。

カメラマンさんと関以外、ビール飲んでるし。

『何してんのよ!』

アタシが叫ぶと店長が来て、

「彩沢も好きなモン食ってけ! 店からの優勝祝いだ。」

って言うてくれて。

また泣いちゃったよ。

帰り際にはいつの間に用意したのか、花束もらっちゃって。

もちろん号泣。

もちろんカメラは回ってて。

家に着いたのは10時を過ぎていた。

リビングに行くと何故か全員待っていて。

花束と紙袋（プレートが入ってる。）を見て分かったのか、妹の沙^サ依^{ヨリ}が叫んだ。

「やっちゃったの!？」

ママもパパもおばあちゃんも顔がほころぶ。

アタシは泣きそうなくしゃくしゃの笑顔で契約書の入った封筒を渡して一言言った。

『お願いします。』

って。

「ひーちゃん凄なおおい!!」

サヨリまで抱き着いて来た。

アタシ、今日何人に抱き着かれたんだ？

「じゃ明日はお祝いね。」

喜ぶママとは正反対に、パパがマジメな顔で言った。

「学校はどうすんだ？」

急に現実に引き戻すパ。パ。

『このまま卒業させてくれるって。引越しは年明けでイイって。』

「そうか。おめでとう。とりあえず就職内定ってコトだな。」

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

: : :

アタマに物凄い何かが落ちてきた気がした。

“就職內定”

心臓バクバクしてきた。

ホントにデビューしちゃうんだって。

デビューするって実感出来た直後に、関の加入のコトがあつてすっかりデビューの事実が消えていた。

さつき店長に辞めますって言った時も、あくまでも“グレイトロックに出場”ってコトしかアタマに無かったから。

今渡した契約書だって、専属契約書だって意識も無くて。

その日はなかなか眠れなかった。

サヨリが春休み中なのを良いコトに、一晩中アタシの部屋にいたから。

アタシはコーフンするサヨリを尻目に、関にメールした。

“大丈夫？”

って。

すると関から電話がかかってきた。

「オレ、無理。」

関の声が震えていた。

『何言ってるのよ、らしくない。“ワンワーに入りたかった”って、夢が叶ったじゃない。』

アタシは精一杯の笑顔で言った。

「今から入るって…。しかもサックス演ったコトねえし。」

関の声が荒い。

『まずはサポートなんだから。』

正直アタシだってビックリだよ。

まさかこんな展開になるなんて。

「関っちがどうかしたの？」

隣のサヨリが突っ込んでくる。

『ワンワー、ツインボーカルになるの。アタシと関で。』

「マジで？」

サヨリの超音波が耳に突き刺さる。

うるさいよ。

「関っちも今からおいでよ。」

サヨリがアタシのケータイに向かって叫ぶ。

『何勝手なコト言ってるのよ！今何時だと思ってるのよ。補導されるわよ。』

もう日付が変わろうとしていた。

関の家からウチまではかなりある。

アイツは原チャリを持ってるケド、さすがに…。

「行くよ。行ってもいいか？どうせ寝れねえし。」

はあ??????????

開いた口が塞がらなかった。

待つコト約30分。

関はやって来た。

ウチの親も関の親も容認みたいだ。

関の親もさぞかし驚いているだろう。

ただ付いていったハズの息子が、契約書を持って帰宅したんだから。

「親は高校を卒業するならいいって。そのあとは好きにしろって。」

関がヤケに小さく見えた。

『じゃあテツちゃんに断わる?』

わざと言ってみた。

何も反論しない関。

「大丈夫だよ、関なら。アタシは関がいたからワンワーに入れたんだから。」

今まで言えなかったコトバが、今さらだけど、どさくさに紛れて言えた。

「ヒヨ…。」

今にも泣きそうな関の目。

『アタシが隣にいるんだから。大丈夫だよ。』

いつもとは逆で、今日はアタシが関をなだめてあげてみた。

アタマをグイッと引き寄せてアタマを撫でてあげた。

「よしよし。」

サヨリまで乗っかる。

そのあと何故かちゃっかりカメラを持って来ていた関のせいで、サヨリと関はアタシの醜態で朝まで盛り上がったのだった――――

wonderful life

“ヒヨのボーカルに何の不満も無いよ。進化する為に男声も欲しいんだ。”

テツちゃんがそう言ってくれたけど、

正直フクザツだった。

昨夜は関にあんなコト言えたのに。

一晩経ったら考えが変わっちゃってた。

今までずっと1人でwonderful☆worldのメインを張ってきた。

ステージパフォーマンスも1人で頑張ってた。

確かにオンナのアタシじゃ出来ないコトもあるよ？

だからこそ“オンナだから”って言われないように色々頑張ってたよ？

メロコアだってパンクだってラップだってチャレンジし続けて来た。

“何かが違う”って言われないように…。

だけどやっぱりダメだったんだね…。

「ひーちゃんどーしたの？暗あゝい顔しちゃって。」

部屋にいきなりサヨリが入ってきた。

まあ良くあるコトだけど。

ベッドの上で天井を見つめてボケゝツとしていたところにサヨリは来た。

『男子の中に女子1人で頑張って来ただけだね。』

天井を見つめたままでボヤいちゃった。

サヨリ相手に。

「ひーちゃんもしかして妬いてんの！？」

ドアを開けたままで放つサヨリの超音波は一段と響いた。

『ドア閉めてよ。』

姉、ドン引き。

「面白くなるでしょ。だってオトコとオンナのツインボーカルだよ？演れない曲は無いんだよ？ワンワン無敵じゃん！ワクワクするよ。」

コイツ、ホントに心の底からワクワクしてんな。

顔見れば分かるワ。

“ワンワー無敵”

か・・・。

「しかもさあ、関っちだよ？全然知らない人ならまだしも。親友の関っちなんだから最強コンビ誕生じゃん。ワンワーどんだけ無敵になれば気が済むのよ。」

珍しくサヨリのコトバが胸に響く。

“最強コンビ誕生じゃん。ワンワーどんだけ無敵になれば気が済むのよ。”

『そんなに無敵！？』

自信の無い、弱気全開のアタシ。

「無敵どころの騒ぎじゃないよ。」

サヨリの目も声も嬉々としていた。

『じゃ、いつか…。』

またアタシはぼんやり天井を見つめた。

ワンワーの為ならアタシのこんなボヤき、くだらなすぎるモンね。

戯れ言に過ぎないよね…。

関だってまだ物凄く葛藤してるだろうし。

こんな時くらいサヨリのコトバを信じるか。

“最強コンビ誕生じゃん。ワンワードンだけ無敵になれば氣い済むのよ。”

何度も何度もサヨリのコトバがアタマの中で繰り返されていた。

練習漬けの毎日で、気が付けば春休みはあっつつつと言う間に終わってしまっていた。

春休み中の猛特訓で、関の唇は腫れていた。

オンエアで関の加入が知られたからか、関はイツキに女子からモテだした。

何でもファンクラブが各学年に出来てるらしい。

ウチらはもう3年。

当然進路指導が本格化するのだが：

「彩沢サンは決まっていますから、後は必要単位と必要出席日数をクリアだけすれば問題ないですね。」

って、三者面談でソッコー言われた。

そりゃこのご時世、進路が決まってるヤツに構ってる程学校もヒマじゃないってワケだ。

関も同じだったらしい。

同じクラスだから担任が同じだから当然なのだけど。

そう、今年も一緒。

唯一の3年間同じクラス。

改めてお互い挨拶しちゃったよ。

クラス発表の掲示板の前で頭下げて。

その後顔見合わせて、照れ笑いし合ったケドね。

ここまで来たら親友をも通り越してるよ。

“悪友”？

まさかこんなに深い付き合いになるなんて、出逢った時は夢にも思ってたよ。

それは関も同じだろうけどね…。

最近、週に何回かのペースで関と路上ライブをしてるんだ。

テツちゃんがバイトしてる楽器店の店頭で。

テツちゃんからの進言で。

ムチャ振りマニアのウチのリーダーは、今度は全英語詞曲を出してきた。

「現役高校生なんだから大丈夫でしょ？」

って、またいつものあの笑顔で言ってくれちゃって。

その練習が、この路上ライブの最大の目的。

今度のライブには演るってお達しが出てて。

関はサックスも演んなきゃいけなくて大変そうだよ。

何て言ってるアタシも、どんどんピアノアレンジが増えて大変なんだけどね…。

wonderful☆worldのミュージックメーカーは主にはテツちゃん。

みんなそれぞれに作るケド、最後はたいていテツちゃんだ。

ピアノアレンジもテツちゃん。

全英語詞の作者もテツちゃん…。

アタシも関も、2人とも必死です…。

そんなコトもあってか、3年になってからと言うモノ、校内でも関というコトが多くなった。

関的には、声を掛けられるようになったからアタシといった方が面倒くさくないそう。

アタシもその方がラクに感じてきて。

どうしても、学校にいてもアタマの中はグレイトロックのコトしかないから。

毎日毎日練習やら路上ライブやら、週末は東京やらでかなりハードな毎日。

“関という”

と言っても、休み時間は寝てるコトが多いかな。

とにかくツライ。

とは言っても、“ツライ”と感じるヒマがナイ程に忙しいのが現状なんだけ。

夏休みに入るとすぐに東京で合宿が行われた。

5月の連休にも合宿があつてその時は主にレッスンだったけど、今回はリハーサル中心で、いよいよだって言う現実味が否応なしに感じられて。

昼間はリハーサル、夜はいろんなライブハウスで武者修行。

あつという間にグレイトロック前日を迎えてしまったのである。

今日はリハーサルをした後移動。

その後全出場アーティスト参加のパーティーがあるらしい。

今回の夏合宿中、合間を見ては事務所の先輩になるアーティストや、グレイトロックに出場するアーティストにご挨拶に言ったりして、ほんのわずかではあるけど面識がある人は出来てきた。

だけどやっぱり緊張するよ…。

大物だらけなんだもん。

天下のグレイトロックだから当たり前なんだけど…。

関やセンちゃんはミーハー心爆裂で、コーフンしまくり。

ソレを見てドン引きしながら緊張してるのはアタシとまあくん。

テッちゃんとナオくんは冷静にご挨拶回り。

“「グランプリおめでとう。頑張っ
てね。」”

って、今までテレビでしか見てなかつた人達に次々声を掛けられて、アタシはひきつりまくりで。

“「ブログにアップしたいから一緒に撮ってもらってもいい？」”

なんてコトバまで掛けて頂いちゃって。

取材のカメラにもひきつり笑顔になっちゃうし。

まるで別世界にいるみたいな感覚。

冷静な2人の後ろをドキドキしている2人が付いていき、さらにその後ろをミーハー丸出しの2人が付いていき・・・

不思議な光景がココにあった。

「ちょっといい？」

挨拶回りを一通り終えて食事を楽しんでいると、visual系のトップの“vivien”リュウジ龍神サンが声を掛けてきてくれた。

さっきの挨拶回りの時もメチャクチャ愛想良く握手を求めて来てくれた。

アタシがバンドを始めるきっかけになった、まさに張本人。

挨拶回りの中で、誰よりも、どんな大物よりも緊張した人だ。

その人が今まさに目の前にいる。

しかも呼ばれている!!

『ハイ。』

上ずる声で、気が遠くなりそうな思いを必死で堪えて必死にアタシは付いていった。

vivienのメンバーに囲まれ、アタシは地に足が着かず、心臓もはち切れんばかりに大きく動いていて。

けどこんなチャンスそうそうあるもんじゃないからって、自分で自分に必死で言い聞かせてる。

「オンエア見たよ。オレがバンド演るきっかけになったって聴いて、ずっと気になってたんだ。ありがとう。」

びゃ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

OH 神よ!! コレがどうか夢じゃないコトを祈ります。

クラクラしてる。

倒れそう…。

「宜しく!」

きやあああああああああ．．．．．

笑顔が眩しすぎる…。

金縛りにあってる。

助けて…。

こんな幸せ、贅沢過ぎるよおお。

アタシの人生の幸運、今ココで全て使い果たしたよきつと…。

アタシは完全に夢の中だった。

部屋に戻ってもアタシは夢の中だった。

こんな幸せあってイイの？

そりゃ龍神サンにしてみたら、自分に感動してバンドを始めたヤツがデビューしたなんて、親近感湧かないワケ無いだろうけどさあ。

イイのか？

この先不幸しか訪れないんじゃないだろうか…。

ん？メールだ。

え え え え え え え え え え え え え え え ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

目を疑わずにはいられなかった。

ディスプレイに出た文字が、

“龍神”

だったから……。

何で!?

何でアタシのケータイに龍神サンのアドレスが登録されてんのよ！

いつの間に? ? ? ? ?

“確かにオレのアドレスもヒヨリちゃんに届いたね。もちろん、お互いに内緒にしようね。明日、頑張つてね！！応援行くから。オレ達のももちろん宜しくね！”

ちゅど ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ! ! ! ! ! ! ! !

アタシ、崩壊・・・。

手が尋常じゃナイ程に震えながらアタシは返信した。

“先程はありがとうございました。余りにも夢の中過ぎて全く覚えていないのですが、いつの間にアドレス交換したんですか？尋常じゃナイ程にビックリしてます。明日はもちろん観させて頂きます。ありがとうございます。”

手はブルブル、足もブルブル、心臓バクバク。

送信ボタンを押した瞬間、一瞬気を失った。

龍神サンのアドレスがアタシのケータイに・・・。

シークレットにしなきゃ！！！！！！

おう？

ケータイを操作してたら部屋のドアがノックされた。

「ヒヨ…。」

関だっつっ！！！！！！

慌ててシークレット機能の操作を終わらす。

深呼吸してドアを開けた。

「イイ？」

何だコイツ…。

すっごく沈んだ顔してる。

前にも見たコトあるぞ？

夜中にウチに来た時と同じ顔してる。

さっきまでのハイテンションがまるで嘘みたいに暗い顔してる。

血の気も覇気も全く感じられない。

『何てカオしてんのよ。さっきまでのバカ騒ぎはドコ行ったのよ。』

アタシは努めて明るく振る舞った。

2人でベッドの上に座った。

うつ向いたままの関。

『どうしたの？』

関の顔を覗き込む。

「緊張してきた。」

『はあああああ?????』

呆れるしかなかった。

「緊張を紛らそうと思ってミーハー丸出ししてたんだけど、1人になって緊張し始めてきた。だからチューして。」

・・・・・・・・・・

意味分かんない。

呆れすら通り越してる。

『そんな冗談言う為にわざわざ来たの？ バツカじゃないの？』

冷たく言い放つ。

こっちはイイ気分だったのに！！

かなりご立腹。

カオにも表して。

「んなワケねえだろ。」

えっ??????

“シリアス関”になっている。

真剣な眼差し。

ジッとアタシを見据えて。

関にこんな目力があつたなんて知らなかったよ。

凄く引き込まれる。

「今までヒヨが1人で築き上げてきたワンワーに入るんだぞ？しかもグレイトロックだぞ？プレッシャーに押し潰され無いワケ無いだろ。」

だからあんなバカ騒ぎしてたっての？

『だからって何でチューなのよ。』

ふざけてるとしか思えないよ。

冗談じゃないワ、バカバカし過ぎる。。。。

「いくら何でも直接なんて言わねえよ。ほっぺたでもおでこでもイイ。緊張を紛らすおまじない。頼む！！」

関は完全に本気だった。

アタシは瞬間的に、グレイトロックのゲストライヴの時のコトを思い出してしまった。

アタシはあの時確かに関に寄り掛かった。

何とも言い様のない安心感だった。

関もそれと同じなのだろうか…。

『前に夜中にウチに来た時と同じコトで今さら悩まないの！オトコでしょ。そもそも何でアタシなのよ。アタシでイイの？』

関は黙って頷いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ふう。

ため息をついて、

『いくら直接じゃなくたって大事なチューは安売りしたくないんだからねっ！』

そう言ってホンの一瞬、ホントにわずかにほっぺたに軽く触れた。

恥ずかしいいいいいい…。

「っしやあああああ！！サanky！」

パーティーでのテンションに戻った関は、ガッツポーズで部屋を出ていった。

アタシは内心ドキドキしていた。

さっきの関の強い目力、

ほっぺたに触れた感触、

関の、喜ぶ無邪気な姿…。

ドキドキしてる。

あんな風に関を見たコトなかったから。

あゝビックリした。

ったく関のヤツ…、

人のイイ気分をぶち壊しやがって、タダじゃ済ませないから!!!

ん？ケータイが光ってるぞ？？

龍神サンからのメールだっつっ!!!!!!

関に構ってて気付かなかったケド、龍神サン、返信してくれてたんだ。

怒りは急速に鎮静化した。

アタシって単純…。

“そのうちドライブにでも行こうね。”

*#○※@☆#∞×∴

思考回路、完全停止・・・。

幾千の出逢いと一の奇跡

“ウチのバンドっておかしいんじゃないだろうか…”

グレイトロックの当日、ふとそんなコトを考えた。

誰1人として緊張してないんだもん。

フツー緊張するだろ。

グレイトロックだぞ？

初の野外だぞ？

客席、だだっ広いんだぞ？

国際的な音楽の祭典だぞ！？

少しは怯めよ！！！！！！

って、オマエもな！

って言われそうだけど…。

確かにアタシも緊張していない。

むしろワクワクしている。

リハの時も開演直前の今も…。

もしかして緊張し過ぎて逆にナチュラルハイってヤツか!?

・・・そうかも。

人間、感情が強すぎると一週してしまうのかも知れない。

確かに昨夜、キャンディバーのメンバーとお話できて、メンバー全員テンションが上がってるってのはあるよ?

全員がリスペクトするバンドだからね。

あのテツちゃんが感情をあらわにしたくらいなんだから。

リハの時も演奏中も、ずっと龍神サンがソデから見てくれてたって言う緊張はあったけど…。

そのお陰もあつたかもな。

客席には見たコトがある顔がたくさんいて、そういう緊張は全く無かったし。

いつものライブみたいで。

もちろん話題性から、初めて観てくれている人の顔もたくさんあったけど、知ってる顔のお陰で自然に出来たし。

全国大会の時の方がよっぽど緊張したワ。

まあ、まだアマチュアのウチらは、もちろん一番下っ端の扱いだから、演奏も一番最初だから余計にラフな気持ちで出来たってのはかなり大きいと思うけどね。

終わった後は思う存分グレイトロックを楽しんだよ。

みんなバラバラになって自分の観たいライブを観に行って。

と言ってもキャンディバーの時は当然全員集合したけど、その後はアタシはもちろんvivienのトコロにも行って。

観てくれていた御礼も兼ねてね。

控室でメンバーを見送った後、アタシは大急ぎで客席に行った。

ウチのメンバーが全員揃っていた。

「ウチのカオがリスペクトするバンドだ。観とかないとな。」

ナオくんが言った。

『そんな…。』

“ウチのカオ”って・・・

テレますなあ…。

そうじゃなくても、メンバーは“日本を代表するバンド”としても、vivienには敬意を表している。

「別にヒヨのプライベートにまでとやかく言うつもりはナイけど、相手が超大物だってコトは忘れないようにな。」

テツちゃんのコトバの意味が分からなかった。

けど、

『…うん…』

戸惑いながら答えた。

ハテナを飛ばしながら。

「だあいじょうぶッスよテツさん!!!!!!」

ん？

アタシのハテナが吹き飛ぶくらいの碎けた関のコトバと高笑いが響いた。

吹っ飛んだハズのアタシのハテナがまた現れた。

何のコト？

「あの天下のvivienの龍神がこんな相手にするワケないッスよ！」

関、笑いすぎ…。

んんん？ “相手” ？？

演奏が始まってるのに、会話が気になる。

「だからこそ余計気を付けないとな。」

はい
いい
いい
いい
いい?
??
??
??
??

何言ってんだよこの2人は…。

気にせずライブに集中しようっと。

だけど……

“ドライブ行こうね”

を思い出してしまい、アタマから離れなかった。

んなワケないよね。

バカバカしい。

アタシは17歳、龍神サンは37歳なのよ？

どう頑張ったってただのガキにしか見えないでしょ。

ましてや相手は超大物、神の域に達するくらいの人よ？

んなワケないじゃない！！！！！！！！

8曲を終え、アンコールの音が響いている中、アタシのケータイが

鳴つた。

「ヒヨ、ケータイ。」

気付いてくれたのは隣の関だった。

龍神サンだ！

心臓が突き抜けるくらいの衝撃。

ライブ直後のタイミングで電話なんて…。

関がテツちゃんに伝えたのか、みんなの視線がアタシに集まる。

アタシはその場を離れて少し離れたところで出た。

『もしもし』

努めて冷静に。

電話の向こうは賑やかだ。

「アンコール、一緒に歌ってくれないかなあ。」

『え え え え え え え え え え え え ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?』

力の限り叫んでしまった。

叫びすぎてノドが…。

ケータイを離さずに大騒ぎしたにも関わらず、冷静な龍神サン。

「blue moon 歌えるよね？」

しかもblue moon!!!!!!

アタシが一番好きな曲…。

金縛りかってくらいに固まる。

「ひよりちゃん？」

龍神サンの問いかけにも答えられない。

彩沢陽依、硬直中…。

今日一番の緊張を今、全身で感じている。

時間が止まる。

「待ってるからね。」

電話が切れた。

「ヒヨ？」

関にカラダを揺すられ、やっと現実に戻された。

「何だって？」

と、その時、イッキに歓声が沸き起こった。

足がすくむ。

龍神サンの登場に、気を失いそうになるくらいに動揺する。

今のアタシの心拍数、計測不能だワきつと。

苦しさすら感じ始めてる。

スタッフらしき人がこっちに向かってくる。

近付くに連れ、スタッフのネームが見えてきた。

“v i v i e n ' s t a f f”

メチャクチャキレイな女性。

「この度、オレにもやつと…」

龍神サンがマイクを通して話し始めた。

客席はざわついている。

「v i v i e n のマネージャーの海崎です。」

キレイな女性はテツちゃんに挨拶してる。

「プロデューサーには許可を頂きました。彩沢さんにステージに上がって頂いても宜しいですか？」

あゝあ。

プロデューサー許可のマネージャー経由じゃアウトだな。

「もちろんです。光栄ですし彩沢の勉強にもなりますから是非！宜しくお願い致します。」

テツちゃんは海崎サンにアタマを下げた。

「この世界で妹と呼べる存在が出来たんだ。」

ドキ↓↓↓↓↓ン！！！！！

何かに撃たれた・・・

どよめく観客。

vivienはこのステージの大トリ。

当然満員御礼。

「年離れ過ぎだろ。」

ギターの雷神サンが笑う。
ライジ

「それもそーだな。彼女じゃねーよ。ビックリした?？」

客席はどよめいているケド、アタシは全く表情を変えなかった。

ウチのメンバーの視線がモーレツに痛い…。

ぴiiiiiiiiiiiiii↓↓↓↓（脳の中の何かが壊れた…。）

「ありがとうございます。お預かり致します。」

海崎さんの手がアタシの前に…。

「お願いします。」

な…なんて眩し過ぎる笑顔なんだ!？

この笑顔すら神の域だぞ。

アタシは海崎サンに手を引かれるまま、ステージに向かった。

「彼女は、友達と行ったオレらの武道館がきっかけでバンドを始めたらしい。」

移動中のアタシに気付いた観客がざわつきだす。

心臓、動いてるかどうかすら判断出来ない程に大暴れしてるよ。

「そのコがこうやって今、同じ舞台にいれると言うコトは、オレに

とってこの上無い光栄なワケだ。」

拍手と歓声があがる。

「紹介します。」

龍神サンがステージの一番前に来てアタシに手を差し出してくれた。

悲鳴、文句、歓声、拍手、声援全てが耳に入る。

「今年のグレイトロック、日本代表、wonderful☆worldのボーカル、彩沢陽依さん！」

もはや何が何だか分からなかった。

思考回路は完全に停止していた。

満員の客席。

経験したコトのない数の人達の視線がアタシに集まっている。

気力と本能だけがアタシを動かしていた。

「お邪魔します。初めまして、wonderful☆worldボーカルの彩沢陽依と申します。宜しくお願いします。」

マイクを向けられ、アタシが口から出たコトバ。

自分でも不思議だった。

こんなに未知の世界とも言えるオーディエンスの前でこんなに堂々としていられるなんて…。

しかも完全アウェイとも言える状態で。

何せ思考回路が完全停止してるモンで、こんなコト言えるのが自分でもビックリで。

一応拍手が起きた。

もちろん良く思わない人だっているだろう。

そんな人の為にも、アタシは全身全霊を掛けて精一杯歌った。

“「ココにいる全員、オマエのファンにしてこい！！オマエなら出来る！」”

そう言って送り出してくれた関や、みんなの笑顔が遠くに見える。

コレは夢か？

隣に龍神サンがいて、同じステージに立っていて、vivienのメンバーがいて、アタシが一番好きな曲を2人で歌っていて。

こんな夢、贅沢過ぎるよ。

でもあつという間に終わるあたり、やっぱり夢だったのかな。

「wonderful☆worldのひよりちゃんでした！」

終わっちゃったああ…。

歌う前よりは歓声が大きくなっていたのにはちよつと安心した。

たくさんの拍手の中、みんなの元に戻ると、みんなはサイコーに温かい笑顔で迎えてくれた。

いつものようにもみくちゃんにされて。

「オマエすげえよ！こんなに大勢の中で堂々としてたよ。アップレだ。」

珍しくテツちゃんが昂っている。

みんなもメチャクチャ笑顔で。

こっちは死にそうだったケドね…。

やっぱり普段から歌ってる曲だったし、みんながいてくれたし。

『みんなのお陰だよ。』

もみくちゃんにされながらも言った。

「まさかヒヨを客席から見ると思わなかったよ。何か遠くにヒヨがいた。」

『センちゃん、ヤメてよ恥ずかしい!!』

ホンキで照れちゃうよっ。

「確かに初めてヒヨを客観的に見たワ。オレらにとってもイイ経験だったな。」

ナオくんまで…。

関は無言だった。

しかも不機嫌そうに。

「関も何か言ってやれよ! ヒヨが頑張ったんだぞ?」

まあクンに促された関が放ったのは、たった一言、

「お疲れ」

と、実に気のないコトバだった。

目も合わさずに。

何だ? コイツ…。

ヘンなヤツ。

夜、ホテルの部屋に戻ってもアタシはまだ夢見心地だった。

たくさんの人達の前で、龍神サンと、一番大好きな曲を歌えた。

そう簡単には余韻が消えるワケがないよ。

地に足がついてない。

あゝつつつ！！！！！

ヤバつつつつ。

こんな場合じゃないよ、龍神サンにメールしなきゃ！！

“今日は大変貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。”

送信！つと…。

ふう…。

ひゃあああ。

また余韻に浸る。

おっ!?

ケータイが光ってるよ?

メールだ。

龍神さんだ!!!!!!

返事かな。

“こちらこそありがとう。今ご丁寧にテツくんが挨拶に来てくれたよ。とっても良いバンドだね。羨ましいよ。あつ、ブログ見てね。おやすみ。”

えつつつつ? テツちゃん!?

急いでテツちゃんに電話した。

「おうヒヨ、どうした?」

もう部屋かな? 周りが静かだ。

『龍神サンのトコに挨拶に言ってくれたんだね、ありがとう。』

「ヒヨにとって貴重な体験させてもらったんだ、リーダーとして御礼をしただけだよ。相手は天下のvivienだしね。」

やっぱり淡々としている。

“天下の”かあ…。

そりゃそうだよな。

ウチらは今はまだアマチュア。

かたや相手はデビュー15年の大御所。

今や海外ツアーもやっちゃう程の。

当然粗相は出来ないよね。

あゝつつつブログ！

いつもチェックしてるのに今日は余韻に浸ってばかりだったよ。

龍神サンのブログ。

えゝえええ？

テツちゃんと龍神サンのツーショットが…。

しかも、2人の手にはビール…。

何、意気投合してんだよ！！

“wonderful☆worldはみんな良いヤツだ。「ウチのひよりに大変貴重な経験をさせて頂きありがとうございました」って、ビール片手にリーダーでギターのテツがご丁寧に挨拶に来てくれた。しかもオレより遥かに年下なのにさすがグレイトロックの日

本代表になるバンドを引っ張ってるだけあって、考えがハンパなくしっかりしている。「オレ達にとっても、自分達のボーカルを客観的に観れるイイ機会でした」なんて言われて、オレ鳥肌立っちゃまったよ。テツもメチャクチャ気に入った。”

テツちゃん！！！！！！

スゴいね、あの龍神サンにここまで言わせて。

アタシはやっぱり、どう考えてもスゴいバンドにいるんだね。

そしてありがとう…。

あたしゃホントに周りに恵まれてるな。

と、人との出逢いに感謝しつつ…。

空を眺めると、無数の星が空一面に散りばめられていた。

人との出逢いも、この星空みたいに無数にあるのに、その中でこんなに奇跡みたいな出逢いもあるんだね。

星空を眺めながら考えた。

もしもあの時、関に連れてかれたのがあの楽器店じゃなかったら…。

連れてってもらったのが関じゃなかったら…。

メンバー募集してたのがワンワじゃなかったら…。

アタシがボーカルとして採用されてなかったら…。

ワンワ一のメンバーが、このメンバーじゃなかったら…。

そう考えたら、途方もない程の確率の出逢いなんだよね。

うおっつっつっ！！！！！

また歌詞が浮かんできたっ！！

すかさずメモしよう。

今夜はイイ夢見れそうだね、おやすみなさい……………

君がいたから

翌日からはデビューに向けてのレコーディングが始まった。

デビュー曲は、もちろんグレイトロック全国大会グランプリ受賞曲の“@”と“ROCK!!”の両A面。

もちろん6人バージョン。

今回は珍しく、事前にテツちゃんから確認してきた。

“「・・・でいい？」”

って。

みんなコレにはビックリ。

“でいい?”

なトコロがテツちゃんらしいと言えばらしいケドね。

でも、みんな口々に言ってた。

“「オマエが前もって言うてくるなんて珍しいな。」”

とか、

“「テツ、どーした？」”

とか…。

“ 「大事な大事なデビュー曲くらい相談しないと」 ”

つてのがテツちゃんの言い分。

「で、次のシングルなんだけど…。」

もう次!?

これにもみんなビックリ。

「早過ぎだろ!」

さすがに反論。

「時期が時期だけに、卒業ソングにしたいなと思うんだけど、どう?」

うおっつっつ!! また“相談”だっ。

「意義なし。」

「オレも。」

「オレも。」

返事してないのはアタシと関だけだった。

何故なら、アタシと関以外の4人の視線がアタシと関にあったから…。

『まさか？』

スタッフさんの視線までウチらに向けられてる。

「そりゃそーだろ。当事者がいんのに当事者が作らないでどうすんだよ。」

センちゃんが言った。

アタシはあるコトを思い出した。

『ハイっ！！』

小学1年生みたいに、元気良く真っ直ぐ真上に手を上げた。

「ハイひよりサン。」

ノって、先生みたいに答えてくれたのはナオくん。

『グレイトロックの全国大会の日の朝、アタシが発端になってみんながそれぞれにメールを一括送信したでしょ？あの時ね、アタシ、この気持ちを詞にして、いつか全員で共作出来たらイイなって思ったの。』

みんな頷く。

『だから、あの時の気持ちをみんなそれぞれに単語でもイイから綴って欲しいんだ。イイよね、関。』

向かいの関に問う。

「ああ。」

また素っ気なく。

最近、関、素っ気ないんだよね…。

ヘンなの！

『逃げじゃないよ？いつか言おうと思って機会を伺ってたの。あの時の気持ちも卒業ってテーマに重ねられるでしょ。最終的にはウチらでまとめるから。』

みんな即答でOKしてくれた。

早速、レコーディングの合間を見て、まずは作曲に取り掛かった。

「メロディは変えずにアップテンポとバラードの2バージョン作って、アップテンポはオレが歌う。で、バラードはオマエが歌え。」

『それいいね！そうしよう！！さすが関、センスいいね。』

素直に褒めてんのにやっぱり素っ気ない。

まあ、ほっとくケドね。

でも、2人で作るって難しいねえ。

なかなか進まない。

進まないって言うより、始められない。

『詞を先に作ろっか。その方がイメージしやすいよね。』

「ああ。」

ちよいちよい気になるな、この態度。

まあ会話は成り立ってるからイッか。

「オマエが書け。」

突然関が言い出した。

『何言い出すのよ。2人ででしょ。』

構わず続ける。

「いくら2人でとは言えオレ、まだ入ったばかりだからさ。詞は書くケド曲はオマエが書け。」

どうしたんだ？ 一体。

表情もおかしいし。

ダメだ、ほっとけないワ。

『最近おかしくない？』

言ってみた。

「あんでもねえよ。気にすんな。」

やっぱり無愛想。

プロデビュ―を目の前にしてプレッシャーが復活でもしたか？

「分かった。」

テツちゃんに報告したところ、テツちゃんの返事は呆気なかった。

一言だけ。

テツちゃん、もしかして知ってんのかなあ、関の不機嫌なワケ。

「イヤ、聞いてはいないけど、プレッシャーが復活したのかなとは思うけど？」

やっぱりそうか。

そうとは思えないよね。

結局アタシ1人で作曲するコトに。

作詞wonderful☆world
作曲ヒヨ

ってコトになった。

アタシだって作詞はちょいちょいあるけど作曲は1〜2曲しかない

のに…。

しかもシングル曲だよ？

プレッシャーだわあ…。

でも頑張ろっ！

全国の卒業生代表として、感動の名曲作ってやる！！

グレイトロック後、ウチらの“@”のダウンロード数が急上昇したらしい。

だから、レコーディングの@（デビュー曲）は、かなり進化した@になった。

やっぱりプロの機材ってスゴいね！って、つくづく実感…。

今日のレコーディングは関の番。

昨日とおとといで、アタシのピアノの録りを終えた。

今日は関のサックス。

みんなが注目する中、関がブースに入った。

アタシは気にしながらも別室で作曲。

モニターで見れるようにはなってるから。

関の様子は依然全く変わらず。

みんながみんな、プレッシャーだろうって思ってるらしく、誰も何も言わない。

自分で乗り越えるしかないってコトだよね。

頑張れ関！！

声に出して応援。

モニター越しに応援。

アレ？

モニターの音出してないから分かんないけど、関が退室したよ？

気になってレコーディングルームに急いだ。

『どうしたの？』

ドアが開くか開かないかのウチに叫んだ。

関はみんなに囲まれていた。

「バカじゃねえの？」

キレてるのはまあクンだ。

「もう1回演って見ろよ。別に何とも無かったぞ？」

なだめるのはセンちゃん。

テツちゃんはいつもと変わらず冷静沈着。

何だか異様な雰囲気…。

「出来ないって。」

ナオくんが耳元で教えてくれた。

はい??????

呆れ↓愕然↓怒りの順で一瞬にして爆発した。

自分で思うよりもかなり冷静だった。

『じゃヤメれば？アンタに構ってるヒマないから。』

低い声で淡々と、フツーに喋ってた。

怒鳴りも叫びもせず。

誰も何も言わなかった。

冷静に静観していた。

何も反応出来ない関。

『アタシ入ります。歌録りお願いします。』

ほっとけこんなヤツ。

手に負えないよ。

何度同じカベにぶつかれば気が済むのよ。

アタシはブースのドアノブに手を掛けた。

「演る。」

関の低い声がした。

アタシは手を止めて、関に目を合わせずにレコーディングルームを出た。

まったく何なのよアイツは！！！！！！

ピリピリさせないでよ。

あんなに小さなヤツじゃ無かったよねえ！？

2年しか一緒にいないけど、あんなヤツだとは思わなかったよ。

作曲に集中しなきゃねっ！

落ち着けアタシ。

こんな時はケータイだ！！

ケータイを開けて待受画面を見る。

待受はもちろん龍神サン。

ステージの上で歌ってる龍神サン。

一番好きな状態の龍神サンを見れば、否応なしに心が落ち着くネ。

…ヨシっ！！作曲開始！！！！

やっぱりアタシって単純…。

――その日のワンワ―HPのメンバーブローガー――

“《ウチのリーダー》は、言わずと知れた、ムチャ振りオタクのテツである。だがしかし！！！！実は裏のリーダーがワンワ―には存在する。まあどこにでもいるんだろうけど、ウチの裏リーダーはとんでもない度胸の持ち主だ。バンドの危機は、いつも裏リーダーのお陰で切り抜けている。恐らく本人は全く意識していないと思うが、

ホントにヤツにはアタマが上がらない。恐らく全員そうだと思う。
ホントにアツパレなヤツだ。　b yまあ”

アタシがこのブログを知ったのは後日だった。

しかも、ファンメールで知った。

“アレってひーちゃんのコト?”

とか、

“裏リーダーって誰!?”

ってメールが殺到しちゃって…。

もうビツクリしたよ!!!

しまいにはサヨリにまで言われちゃって…。

“「裏リーダーって誰??? ひーちゃん!?”」

って。

サヨリまでブログをチェックしてるなんて、恥ずかしさ爆裂だよ。

だけど、“本人は全く意識していない”のは確かだ。

そんなつもりは毛頭ナイ。

むしろ、こんな小娘の暴走、見過ごしてるメンバーやスタッフに感

謝したいくらいだよ。

関の時も、良く誰も何も言わなかったなと思う。今思えば、メンバー間の信頼関係がスタッフさんをも巻き込んだのかなと思えるけど、あの時は何も考えずにコトバだけが出てしまっていたカンジだったからな…。

みんなに支えられてるよ、ホントに。

んんん??????

何コレ…。

関のブログ…。

タイトル《ヒヨヘ。》

って???

イツキに心臓ドキドキしてるよ。

何よこんな、しかもよりによってブログでなんて。。。

恐る恐る内容を見てみた。

“ヒヨヘ。この前、vivienのステージに上がってあんなに堂々と歌ってるオマエを見た時、正直ショックだった。”

ええええ??????

だからどうしてブログに掲載するのよ!!!

直接言うなりメールすればいいじゃない!!

“いつも一緒にいるハズのヒヨが、とんでもなく遠くに感じた。だからオレは自分が小さく見えてしまった。“ホントにオレがボーカル演っていいのか? ヒヨ1人で十分だろ”って。だから曲作りもレコーディングも全然出来なかった。”

バカじゃナイの?

深いため息をつく。

“だけどオマエにビシツと言われて、メチャクチャ腹立ったケド、その後すぐに年も違うししかもハイレベルな男子の中でオマエが1人で悩んできたのを見てきたオレが、何情けないコト言ってるだつて俄然やる気が湧いてきた。やっぱりオマエは大したヤツだよ。2年しか一緒にいないけど、出逢った時から大したヤツだと思ってたケド。到底同じ年とは思えないよ。これからもよろしくな、“姉さん”! b y 関”

かあああああああああああああああああああ…。

血圧上昇!!!!!!

急速赤面!!!!!!!!!!

関のバカあああああ!!

恥ずかしいったりやありやしないよ。

何でブログなのよ!!!!!!!!!!

誰でも見れちゃうじゃないの!

お陰でヘンな汗かいてるしいい。

でもあえてほっとう...

だからアイツもブログにしたんだろうし。

あつつっ!!アタシもブログで返せばイイのか。

イヤ、ブログが私物化してしまう...

・・・たまにはイツか、こーゆーのも。

“《関へ》もしもあの時関に「バンドやりたい」って言ってなかったら。もしもあの時関がああ楽器店に連れてってくれてなかったら。間違いなく今のワンワのヒヨは無かったと思う。どんな時も関がそばにいてくれたから、アタシはハイレベルなメンバーの中に小娘1人でも頑張ってた。だからこれからもよろしくね!もしも次に弱音吐いたら今度はクビだからなっ!!!!!!!!!!
byヒヨ”

ちょっと潤んじやったよ。

関のメッセージもうるうるしちゃったし。

情けない...

コメントがソツコーでやって来た。

“泣かせるねえ。”

“ひーちゃんと関っちに目に見えない、男女を越えた絆を見ました。”

えっ!?

“男女を越えた”???

ちよつと動揺。

“チクシヨー関のヤロー、羨ましいぞコノヤロー!!”

んんん???

動揺しまくり。

“関ちゃんとヒヨが羨ましいです。恋人以上の関係なんですね。”

あん?????

アタシの脳内、ハテナで埋め尽くされている。

今まで関をそう言う風に意識したコト、一度も無かった。

初めて逢った時から今でも、“音楽友達”としてしか見てなかったから…。

だから真夜中に家に来たり、キスセがまれた時はビックリしたけど、関が何てコトなくしてるからアタシも気にしないようにしてた。

校内で言われるコトも無かったし。

だから今、みんなからのコメントを見て改めてと言うか、今更ながらに動揺してる。

“男女を越えた絆”か…。

5人の時は、そんなコト言われたコトもなければ、考えたコトも無かった。

だからこそ今、モーレッツに動揺してる…。

考えてみれば、ホンのわずかにだけど、メンバーよりは関との時間の方が長いんだよね。

うおおおおお!!!!!!!!!!

また歌詞が浮かんできたぞおおお。

待ってろよ不朽の名曲!!!!!!!!!!!!!!!!!!

関のプチボイコットを見事切り抜け、何とかレコーディングを夏休み中に終えるコトが出来た。

今日は事務所からのご褒美で、1日OFF。

とは言ってもみんな爆睡で、昼過ぎまで寝てたみたいで（もちろんアタシも）、慌てて行動し出したのはもう3時を過ぎていた。

起きない関とナオくんはほっというて、残りの4人でとりあえず出掛けた。

「この4人ってのも新鮮だな。」

まあくんが言った。

確かに。

まあくんとテツちゃんってのが何より新鮮だワ。

テツちゃんって、誰かとツルんでるイメージないもんな。

まあくんもしかり。

センちゃんとナオくんは、よくツルんでるケド。

「アイツらいつまで寝てんだ？」

ケータイで時間をチェックしてるのはまあクン。

何だかこの珍しい光景、アタシは微笑ましく眺めていた。

写メ撮ろっと。

もちろんブログ用に。

それにしてもいつまで寝てんだ？あの2人。

もう6時だよ？

いくら何でも寝過ぎだろ。

お腹空かないのかなあ…。

関に電話してみよう。

・・・出ない。

ダメだ…。

ナオくんもセンちゃんからの電話に出ないみたいだ。

ある意味羨ましいよ、2人が。。。

“「他のメンバーは？」”

とか、

“「関クンは？」”

とか声を掛けられても、さすがに“『寝てます』”なんて言えないから、仕方無く“「別行動です」”と答えてるんだケド…。

ある意味“別行動”には間違いないよね。

“爆睡組”と、“行動組”

しかしグレイトロック効果は絶大だな。

デビュー前だったのに、かなりの人から声を掛けられる。

今日だけで何回、人様のケータイに向かって笑顔になっただろうか。

デビュー前だったのに@のダウンロード数が急上昇って言われてもイマイチピンと来ないから。

やっぱり生の声が一番だよな。

もちろん、聞こえるようにイヤミじみたコト言ってくる人もいるよ。

でもその辺は校内で慣れてるから。

校内の方がよっぽど強烈だよ。

“早々に内定取ってる”って言う、最大の妬み材料のお陰で。

「妬みや皮肉を言ってくるだけまだいいんだ。このネット社会、モノ言わぬネット攻撃の方がよっぽどタチ悪いから。」

まあクンの言うコトは最もだ。

「面と向かって言えねえちっちゃえ。ヤツは気にすんな。」

コレはセンちゃん。

確かに。

でも、見えないからこそ発言が強烈なのがネット攻撃でもある。

ウチらは見ない様にしてても、否応なしに周りから情報が入ってきてしまう。

「イチイチ気にしてたらキリないから。」

やっぱりテツちゃんはいつでも冷静。

どうしたらこんなに落ち着けるんだろうか。

アタシも見習いたいよ。

結局8時を過ぎた頃によく爆睡組2人から連絡が来て、みんなで食事に行って貴重な休みはあつという間に終わってしまったのだ

つ
た。
・
・
・
・

桜の樹の下で

初野外ライブに初レコーディングに初取材に初収録。

初物祭りで高校生活最後の夏休みは終わった。

冬休みには引っ越しか…。

コレもまたあつという間なんだろうな。

でもとりあえずは“高校生モード”に戻らないと。

とは言え、まだ卒業ソングが出来上がってない…。

ムチャ振りオタクのテッちゃんには、とびきりの笑顔で

“「9月半ばには完成させてね！」”

って言われてしまい、ムチャクチャ焦ってる。

あの一件があつて、関も作曲に復活してくれたから何とか曲は大筋で出来たし、詞もみんなの想いもアタシの想いも全部込めて、ほぼ完成なんだけど…。

どうも最後の最後がキマらない…。

みんなには、

“「名曲って、意外とパパッと作った曲だったりするんだよな。」”

とか、

“「悩み始めたら悩むだけ悩み続けて抜け出せないぞ？」”

って言われてるんだけどさ…。

とりあえず一旦離れよう。

“高校生モード”に戻ろう！！

学祭もあるしな。

「彩沢！関！！」

ある日の昼休み。

昼食を済ませ、ボケーっとしていたところに学祭委員長の水戸クンがやって来た。

水戸クンはウチらのところに来るなり唐突にこう言った。

「ステージ、もちろんワンワ―出てくれんだろ？」

ウチらは全く予想してなかった展開に、つい目をまん丸くしてしまった。

「えっ!?!」『えっ!?!』

2人声を合わせて。

「何だよソレ!! ツレねえなあお前ら。」

ウチらの反応は想定外らしい。

学祭のステージをワンワーで???

2人とも啞然。

「売れっ子だからムリなんじゃない?」

「ギャラ払えんのか? 水戸!!」

「学祭出れんの?」

イヤミが容赦ない。

でもウチらはそれどころじゃなかった。

アタシはケータイを持ってベランダに出た。

事務所のモトさん（本宮達基サン、37歳、2児の父）に掛けてみる。

まだマネージャーと言うまででは無いケド、ウチらの管理を今のところしてくれてる。

「アレヒヨちゃん、どうしたのこんな時間に。」

高校生がこんな時間に電話しちゃ、そりゃ驚きもしますわな。

「やっぱり来たかあ。」

へッ？

アタシ、フリーズ。

“ やっぱり来たか” ？？？

予想してたんかい！！！！！

だったら対策教えとけや！！

「実は事前に学校側には話してあるんだ。あえてそうなった時に話すって事になってた。」

うおおおおおい！！！！！！

だからだったら言っとけやあああああ。

と心の中で絶叫。

「色々、安全面や近隣の学校の関係とかも熟慮した上で、学校側からは基本的に校外の人間のステージは認めてないからワンワーでのステージは禁止。だけどヒヨちゃんとかんと関クンは生徒だから、2人が出るのはイイよって。」

イマイチ飲み込めてなかったけど、とりあえず水戸クンにはそのまま伝えた。

「そつかあ…。学校が禁止じゃ仕方無いな。」

がっかりして水戸クンは帰っていった。

「やっぱりグレイトロック上がりは違うわね。」

またイヤミ。

うるさいよ…。

アタシと関で？

路上ライブじゃん！！

「じゃオレら4人ダケの状態の音源があればいいんだな。」

さすがテツちゃん！！

あったまイイ♪！！！！！！

その日の放課後、練習だったからテツちゃんに言ってみた。

『関の友達にお願いしようかとも思ったんだけど。』

あの後に関と話したんだ。

“「学祭のステージに校外の人間が立っちゃいけないなら校内の人間でワンワ―演りやいいんじゃないかね？」”

って関が言い出して。

でも、

“「自分の曲を練習しなきゃなのに、それの他に1ヶ月そこいらでワンワー何曲もなんて出来るわけねえだろ！」”

と言うお叱りを受けてしまい、その考えは敢えなく却下するしかなかった。

「イイんじゃない？2人ワンワー。面白そう。」

まあクンがかなり乗り気。

「またオレらが客観的に自分らのフロントマンを観る機会が出来たしな。」

とセンちゃん。

「何演るか決めたら教えろよ。」

ナオくんも賛成してくれて、2人ワンワーのステージが決定した。

「ソレも面白いな！分かった、ステージプログラムに入れとくよ。」
意外に好感触。

“「ああああん？」”

って思いっきり嫌がられるかと思ったのに。

翌朝早速水戸クンに報告。

早速、関と休み時間を利用して選曲を始めた。

「もちろん@は演るよな？」

同じクラスの男子が入ってきた。

「そりゃもちろん。みんなが知ってる曲は演るよ。」

関が答える。

関とだってそんなに仲イイってワケじゃないコだからちよつとビツクリ。

「いっちょ新曲演りますか姉さん！」

!!!!!!!!!!!!

ビツクリして何かを詰まらせちゃった。

アタシ咳き込む。

「学祭の頃には出来上がってるだろ？ウチの学祭限定で初披露って言ったら盛り上がるぞ？」

スゴいワクワクした顔してるよコイツ…。

「新曲！？いいねえ。メンバーが来ないならそのくらい蔵出ししろよ。」

今度は別の男子が入ってきた。

結構みんな聞いてんのね。

結局@とROCK！！と新曲を含む5曲に決定した。

最後がキマらないまま期限が来てしまったので、仕方無くそのまま提出するしか無かった。

「ご苦労様。“桜の樹の下で”か。タイトルからしていいね。」

テツちゃんは笑顔で受け取ってくれた。

とりあえずはひと安心…。

していいのかなあ…。

後は、どんな仕上がりになるかに期待するしかないか！！

プロの技術に乞うご期待！…だな。

そしていいよ…。

「おはよう。」

今日は学祭。

ウチらのステージを撮る為に、モトさんを含めた事務所スタッフ数人がやって来た。

カメラクルーまで。

「他のメンバーから預かって来たよ。録りたてホヤホヤのオケ。」

「あざっす。」

関が受け取った。

現在他のメンバーは、レコーディングで泊まり込んでいる。

もちろん2ndの“桜の樹の下で”と全英語詞の“tomorrow”。

その傍らで今日用のオケを録ってくれたのだ。

「みんなからしつかり2人ワンワーを撮って来いってお達しがあったからね。」

モトさんはカメラを指して苦笑い。

「挨拶してくるよ。」

そう言ってモトさんは校舎に入っていた。

さっ、練習するか!!!

今日の練習場所は屋上。

じゃないと集中出来ないからって。

「天気良くて良かったな。」

見事な青空を眺めながら関が呟いた。

確かに雨でも降ろうモノなら屋上で練習出来なかったからね。

屋上なら入口のドアに鍵かければ済むだけだからって、学校が許可してくれたの。

そりゃ学校だって、下手にトラブルとか起きて欲しくないだろうからね。

「全国大会の前も、こうやって2人でココで練習やトレーニングしたな。」

何だか1人でふけてないか？コイツ…。

「まさかあの時はオレがメンバーとして加入するなんて予想もなかったけどな。」

仰向けになって空を眺めてる関が、何だか微笑ましく見えてしまった。

『そうだね。』

関につられてアタシも仰向けになってみた。

“練習しろ！！！！！！”

って声が聞こえそうだけど…。

『気持ちいいね。』

たまらず言っちゃった。

思えばこんなにのんびりした時間、最近さっぱり無かったから。

もちろん空を仰ぐなんてのも無かったな。

気い抜いたら寝ちゃいそうだよ。

ダメダメ！練習しなきゃ。

気が付くと関のケータイが鳴っている。

「はい。おうわりい！うす。」

会話はたったそれだけだった。

「行くぞ。」

呼び出しだったようだ。

アタシは関の前で立ち止まり、腰の前辺りに手を出した。

「えっ？」

戸惑う関。

『2人でもワンワ―はワンワ―でしょ？今日は2人でやろ。』

アタシの提案に関はすっかり面喰らってる。

無理もないよね。

2人でなんて、円陣になってないのに。

「まだ早えだろ…。」

照れてる関。

確かにね。

でも…

『2人ワンワーなんだから2人でやんなきゃ。体育館行ったらモトさん達とかみんながいるでしょ。』

アタシのコトバに渋々関は照れながら手を前に出してきた。

やっと把握した。

笑顔で手を出してくれた。

「学祭ステージ、2人ワンワー、」

『思いつきり大暴れしてやるううう』

一瞬止まり、2人でアイコンタクトして笑い合っちゃった。

2人で改めて深呼吸して…

『ぞいつつっ！！！！！』 「ぜいいいい。」

突き上げた手の遥か先の青空に叫んだ。

『行くぞおおおお。』

つられて関も。

「しゃああああ！！！！」

『ヘンなの。』

くすつと笑いながら屋上を出た。

「オレが言うのもなんだけど“青春してる”ってカンジがするな。」
歩きながら関が言った。

『えっ？』

聞き返さずにはいられなかった。

『関、今日おかしいよ。』

さつきから浸ってばかり。

「青春だろ？今しか出来ねえんだから。しかも制服でライブなんて。」
「

何だかいつもの関じゃないみたいだよ。

ドアを開けるとモトさん達が待っていてくれた。

みんなにハイタッチで迎えられる。

ライブ前と後にいつもみんなでやりあうんだ。

テンション上がって来たよおおおお→→→

ライブステージが始まると、イッキに体育館は盛り上がりを見せた。

合間を見て模擬店で腹ごしらえしつつ。

恥ずかしながらウチらは大トリ。

まだまだ先だけど、ステージは見たいからって下りてきたの。

“青春したい”からねっ。

とりあえずみんなと一緒に盛り上がる。

何か関のコトバの意味が分かってきたよ。

“青春してる”の意味が。

別に、今のこの瞬間に限らず、他にも“青春してる”瞬間は当然あったんだと思うけど、まさかその時は意識なんてしてないからね。

ウチらの前のバンドが終わった。

自然と関と目が合う。

2人でお互いをジッと見据えて大きく頷いた。

お互いの拳を突き合わせて。

ん????

次の瞬間、ウチらの顔がイツキに変顔に変わった。

“つつじが原高校のみなさん、こんにちわ。wonderful☆

worldです”

「ええええええ！?!?!?!?!」

大音量で関が叫ぶ。

何コレ!!!!!!!!!!

館内がイッキにざわめく。

バッチリウチらの様子はカメラに収まっていた。

視線がイッキにウチらに集まる。

“今日はオレらはあいにくそちらには行けません、我がワンワ一のフロントマン2人でステージなんてねえ、”

“貴重ですよ？恐らく二度とないでしょう”

ナオクンに続いてセンちゃんが話す。

ウチらは物凄い視線の中、ステージに移動した。

“来月、いよいよCDデビューします”

テツちゃんはやっぱり淡々としている。

それでもフロアみんなは盛り上がってくれてる。

“今日の音源は、もちろん今日の為の録り下ろしです。しかも未発

表の、ヒヨと関の作った全くの新曲も演っちゃいますよおお！”

テンションを上げるセンちゃん。

一段とフロアみんなが盛り上がってくれる。

“「自分の高校、自分達の街からプロのミュージシャンが出た」と皆さんが胸張って言えるよう、我々頑張りますので…”

まあクンの声だ。

“来月発売のデビュー曲共々、ワンワ―を”

“よろしくお願いしまゝす！”

テツちゃんに続いて、みんなが声を合わせて言った。

「じゃ、改めて…。モトさん達も！！」

関が言い出した。

やっぱり把握してないモトさん達の肩に触れて円陣を促す。

“では、2人ワンワ―の最初で最後のステージ、スタートです！！”

まあクンのコメントに、フロアの歓声がイッキに沸き起こった。

みんなからのコメントに続いて、ウチらのライブでのオープニングSEが流れ始めた。

否応なしにテンションが上がる。

苦笑いのアタシと関。

ここまでやるかい。

最近逢ってないみんなの顔が過る。

“ありがとう。”

もう一度みんなに感謝して、アタシからモトさんに言った。

『モトさん、お願いします。』

「え、つつつ??オレ!?’」

当然、戸惑うモトさん。

“ヒヨリいいいい!!”

“関いいいい!!!”

フロアからは多くのコールが聴こえる。

関も笑顔で待つ。

カメラを向けられ、あからさまに動揺しているモトさん。

咳払いして口を開いた。

「学祭スペシャルライブ、オレは見てるだけだけど…」

みんな吹き出す。

「全身全霊をかけて、大暴れしちゃううううう…」

『ぞおおおおい→→→』

「ぜいつつつつ→→→」

モトさん達スタッフにハイタッチで見送られ深呼吸しながらステージに出た。

歓声が大きくなる。

手を上げて応える関。

同じステージに立つ関も含めて、観客の大半が同じ服って異様だなあ…。

しかも制服でのライブってのも何だか異様。（しかも体育館シューズ…）

カーキ色のブレザーに、黒のプリーツスカート。

学年別のリボンで、ウチらは緑に白のブラウス。

新鮮と言えば新鮮なんだけどな…。

「ひーちやああああん!!!!!!!!!!」

「純ちやああああん!!!!!!!!!!」

純ちゃん??

ああ、関って純ちゃん（関純也）なのか。

忘れてたよ。

「純ちゃんて言うな!!」

照れ隠しにマイクを通さずに叫ぶ関。

『ご声援ありがとうございますっす! ひーちゃんと純ちゃんですっす♪』

必要以上にテンションを上げる。

みんなも必要以上に盛り上がってくれてる。

「純ちゃんて言うな!!」

今度はマイクを通して。

「じゃ、早速最初で最後のステージ、行くぜええええ!!」

恥ずかしさをごまかすためか、関がさっさと曲に進めた。

ちなみにMCの打ち合わせは一切ナシ。

今日は自分らの学祭のライブなんだから自然体で行こうって、2人で決めて。この格好じゃ気取るもへったくれも無いんだよね…。

一曲目は“ROCK!!”。

フロアとの一体感を出すにはコレでしようと言うコトで。

この曲は途中で関のサックスが入る。

グレイトロックでも演った曲。

一曲目でほぼ一体になったところで、2曲目と3曲目を立て続けに演る。

ソコでMC。

「次の曲は、ひーちゃん渾身の新曲です。」

歓声が上がる。

簡単にいきさつを説明。

『“卒業ソングを作りたいから当事者のお前らが作れ”と言うお達しが出て、みんなの協力を得てアタシがまとめました。曲は純ちゃんで作りました。』

大拍手。

『ありがとうございます』

軽くアタマを下げる。関がプチボイコットしたコトは言わないでおこうね。

「つい先日に来上がったばかりなので、ウチらもどんな仕上がりになったか分かりません。なので、凄い楽しみです。」

今回演るのはアップテンポバージョン。

と言うコトで、アタシはコーラス（サビ）とラップ（間奏）とピアノ。

歌うのは関。

アタシが体育館のピアノに座る。

「ひーちゃああん!!」

軽く会釈。

そつと深呼吸してピアノに手を添える。

この曲はアタシのピアノから始まる。

イントロを弾き終えた後、ステージ中央に移動する。

とりあえずはみんな、ノリで盛り上がってくれてる。

「お元気ですか？」

関が歌い出す。

歌い出し、一番悩んだよ。

悩んだ末の、“お元気ですか？”ですけど!!。

アレレ？

みんな固まってる。

もしかして引いてる？

うわぁ…やっちゃった??

やっぱり“お元気ですか？”は無かったかなぁ…。

不朽の名曲の予定がぁ…。

“お元気ですか？”じゃダメかぁ…。

落ち込んでも、顔や声には出せないから。

つい関の顔を見てしまう。

「世界中ドコを搜したってこんな出逢いは二度とないから」

はぁ??

歌いながら、関はアタシを見てガッツポーズしてる。

何でよ!!!!!!

とりあえずコーラスに入って前を向く。

「もしもあの時…」

……うゝえゝえゝえゝう?????

泣、い、て、る?????????

良く見えないけど、泣いてる人、チラホラいないか?

このみんなの涙はなんだろう…。

感動??

それとも落胆?????

どっちだ?

気になるよ。

気になるアタシと、喜び満面の関。

歌い終わると、割れんばかりの拍手喝采が沸き起こった。

アタシ、当然号泣。

座り込みたいのを我慢。

男子の声援が余計に響く。

関がアタシの肩に手を回してきた。

ヤメろバカ ああああ！！！！！！！

余計に止まなくなるだろうがああああ！！！！！！

「ラストおおおお！！！！」

力の限り関が叫ぶ。

関の目にもうつすら涙が見える。

『みんなありがとうとおおおお！ラストナンバー@！！』

涙声爆裂で叫んだ。

よっぽど思い余って、こんなコトまで叫んじゃった。

『青春しようぜええええい！！！！！！』

って。

盛り上がりは最高潮を迎え、思わぬアンコールもあり、サイコーの盛り上がりの中、スペシャルステージは終了した。

「気持ち良かったああ」

『ねっ。』

その後は片付けに参加出来ないほどたくさんの人達に囲まれて、2人でゆっくり話も出来なかったから、夜、明日からの秋休みを利用したレコーディング合流の為に東京への移動中、2人で遅ればせながら余韻に浸ってた。

「頑張った甲斐があったな、良かったな。おめでとう。」

関が笑顔で握手を求めてきた。

『ありがとう。』

こうして、不朽の名曲は出来上がってしまうのだった。。。

ミラクルマシン

あっという間にデビュー日がやって来た。

日付が変わってすぐに、龍神サンからメールが来ていた。

“デビューおめでとう！！”

ってメチャクチャ派手なメールで。

もちろん即保存。

家宝だよ。

今日はいつものライブハウスを貸し切って、最初で最後のワンマンライブ。

メンバーそれぞれが、“自分の来て欲しい人”に感謝の気持ちを込めて直接手渡しでチケットを渡した、フリーライブ。

オーナーも快く“好きに使え”って、タダで貸してくれた。

みんなへのthanksライブ。

自分達の身内を含めて、お世話になった人ばかりをご招待してるから、告知は一切ナシの、ある意味シークレットライブ。

常連のファンの皆さんも御招待させて頂いて。

誰が言い出すワケでもなく、なぜか自然と決まったんだ。

最初は完全にウチらが払うつもりでいたよ？

だからタダで貸してくれるって聞いた時は、メチャクチャ遠慮しちゃったよ…。

最終的には、オーナーに何か御返しはしようってコトで決定したけど。

あまり学校みんなは、もうデビュー曲が配信されてるしウチらがメディアにも出てるから、今日がデビューだって意識がないみたいで、いつもと変わらない状態。

通常のデビューライブは、今週末に行われる。

会場を聞いた時、みんなビックリしちゃってたよ。

“「Zeppねっ」”

って、溢れんばかりの笑顔で言われた時は一瞬ぼかんとしちゃったけど、次の瞬間、みんなで絶叫した。

「Zeppうううう？？？？」

全員の声が見事に合ったところで、センちゃんが続けた。

「デビューライブするトコじゃないでしょおおお！！！！！！」

みんな激しく頷く。

「CCレモンホールとか青年館とか言う意見もあったんだけど、とりあえずZeppで決定した。」

恐ろしいコトをあっけらかんと言う人だねえ、この人は。。

開いた口が塞がらなかった。

「CCレモンホールうううう???」

「青年館????」

みんな驚きすぎて声がおかしい。

「別に驚くコト無いよ。グレイトロック上がりはみんなそのクラスでデビューライブ演ってるんだから。」

憎らしいほど爽やかに言ってるのけるモトさんに、半ば苛立ちすら感じた。

だけど、即日完売してしまったらしい…。

グレイトロック効果は想像以上に凄まじかった。

急遽翌日に追加公演を入れたらしい。

それももう完売。

「龍神&ヒヨ効果だな。」

あろうことかテツちゃんが言い出した。

この上ない程に驚くアタシ。

みんなはテツちゃんの意見に同意なのか、やたらと頷いている。

ちなみに龍神サン達vivienの皆さんには、事務所を通して御招待してる。

もちろんキャンディバーの皆さんも。

「失敗は許されないね。」

超真剣な眼差しで言ったテツちゃんの意見に、誰一人反論出来なかった。

まあ、する必要もないけどね。

・・・と言う、どプレッシャーを抱えたデビューライブを控えての、今日のthanksライブ。

『おはようございます!』

一旦家に帰ってからライブハウスに入った。

いつもは対バンの皆さんがいて賑やかなのに、今日は静か。

「あっ、ひーちゃん!」

オーナーに呼び止められた。

「荷物届いてるよ。」

渡されたのは小包だった。

“ 向坂龍二 ”

誰だ？

さきさかりゆうじ？

ん？？？？？りゆうじ？？？？？

『まさか龍神サン？？？？？』

アタシは叫びながら大慌てで包みを開けた。

慌てるあまり、手がつれて上手く開けられない。

手も震えちゃって。

「開けてやるよ。」

たまたま現れたテツちゃんが冷静に開けてくれた。

『ありがとう。』

中にはメッセージカードと、超一流ブランドの箱が入っていた。

メッセージカードに飛び付く。

“Dearヒヨリちゃん。デビューおめでとう。プロとしての誕生日だね。大事な妹へ、オレからのささやかなプレゼントです。誕生日おめでとう。 龍神”

気を失いそう…。

全身の穴と言う穴から何かが出そう。

アドレナリン、大分泌show!!!!!!って具合。

龍神サンの本名、知っちゃったああああ。

はっっっっっ!!!!!!

お礼しなきゃ→→→→

「せっかくだから着けて写メ送ったら？」

おっっっっ!!!!!! niceな考え。

テッちゃんの言う通り、箱を開けて中を取り出してみた。

ひゃ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

「“dian-blood”じゃん!!!!さすが天下のvivien。」

持つ手が震え、目眩さえ感じる。

ただでさえ超一流ブランドってだけで畏縮しちゃうのに、そのブランドのなかでもランクが上とされるデザインのペンダントだった。

ラインストーンが散りばめられた、ティアラをモチーフにしたシルバーのペンダント。

「ハイ笑って！」

いつの間にかテツちゃんがアタシのケータイを持っていた。

笑えるかぁ！！！！！！

超ひきつつてるよ。

「そんなんじゃ送れないよ。笑って！」

そんなコト言われてもお。

何度も何度も撮り直して、やっと8回目でムチャ振りオタクは納得した。

しまいには3回目辺りで関が現れて、なぜかテツちゃんとのツーショットで撮り出した。

テツちゃんはアタマを下げて。

まだ未成年なのにこんなモノ貰ってイイのか？

撮り終える頃にはみんなが集まっていた。

「すげえなひい。コレ、ン万すんぞ？」

下世話なナオくん。

「お前、とんでもない人物を味方に付けたんじゃないやねえの!？」

滅相もないコト言い出すのはセンちゃんだ。

「だから言ったでしょ？」

ん？

得意気なテツちゃん。

「オレ達のグランプリは必然だったんだよ。“いけそうな気がする”って言ったでしょ？」

全員絶句。

己のリーダーに恐怖すら感じた。

「vivienファンに知られたらどうなんだろうな。」

関が血の気が引くようなコトを言い出した。

「いや、龍神サンは恐らく公言すると思うよ。今日辺りブログに載せんじゃない？今の写真。」

テツちゃんがサラリと言い放った。

背筋が凍るよ。

「いや、龍神サンのやり方はある意味正しいと思う。自分で言ってしまった方が防御出来るでしょ？ “攻撃は最大の防御” って言うし。意味違うけど。」

「確かに。」

みんな納得してるし…。

「いやあ、アレは警戒心を煽るだけっすよ。」

と関。

「確かにそうかも知れない。でもソレはあくまでも対ファンだろ？ 対マスコミには絶好の対策になると思うぞ？」

どっちでもいいよアタシヤ。

恐怖で背中が丸くなってる。

「ヒヨもブログに載せちゃえばいいんだよ。何なら龍神サンより早い方がいいよ。今とりあえず送んな？」

テツちゃんに言われるがまま、アタシはブログに投稿した。

“happy birthday! ワンワー♪”

ってタイトルで。

“龍神サンからプロとしてのbirth dayだってコトで、プレゼント貰っちゃいました!! 皆さんごめんなさい> (| ;) < この幸せは、デビューライブでみんなにお裾分けしますから!! 龍神サン、ありがとうございました。”

送信つと。

アタシもこの写メ添付して。

「さすが名フロントマン。アドリブ巧いね。」

「とっさに“この幸せはデビューライブでみんなにお裾分けします”なんて言えねえよ。」

しっかり見てたみんなが口々に褒める。

みんなの言い方はいかにもわざとらしさ爆裂だけど、ステージングもそうだけど、意外と追い込まれた時に火事場のクソ力的な力が出るもんなんだよね。

ナチュラルハイに近いかもね。

もちろんペンダントを着けたままステージに上がったよ!!

ペンダントは、必要以上に重かったケドね・・・。

でも、重さの分、何だか護られてる気がした。

おこがましいのは分かってるケド。

お陰でいつも以上にハイテンションになっちゃったっ！！

・・・その日の龍神サンのブログには、見事にペンダントのコトが出ていた。

今日はデビューライブ。

昨夜移動してきて、今日は朝からリハーサル。

全員、珍しく緊張してるんだ。

そりゃそーだ。

Zeppが即日完売なんて…。

ワンマンでさえ、この前のt h a n k sライブが初だったのに…。

緊張を解そうと、関がしきりにブログ用に写メを撮ってる

久し振りにピリピリした空気が流れている。

「もう1回!」

自分のイントロに納得いかないまあクンが叫び、

「ストップ!!!!!!」

センちゃんのドラムが遅れ気味で、テツちゃんが吼える。

しかも、伝染して上手く行っても今度は関がトチる。

いつものコトだから今日はほっとこ。

…とか言うアタシも緊張で指が震える。。。

『休憩!』

勝手にアタシが叫んだ。

コレしかテはないなと思って。

「じゃ10分休憩。」

モトさんが続けて言ってくれた。

アタシは通路のクーラーボックスに走った。

缶コーヒーを全員分持ってフロアに戻る。

みんな各自楽器から離れてなかった。

テツちゃんがこんな状態なのも珍しい。

いつもは1人でも冷静なのに。

ここまで全員緊張してると、“アタシがしっかりしなきゃ”って意識が恐れながらも、起きる。

『一息ついて！ハイ。』

1人1人に微笑んでコーヒーを渡す。

「ひーちゃん！！」

客席のモトさんがアタシを呼んでる。

モトさんは結局そのままウチらのマネージャーになったんだ。

『はあああああいい！！』

ステージの上から、みんなにコーヒーを渡しながら叫ぶ。

「裏口に急いで！！可能ならテツも。」

胸の鼓動が高鳴った。

龍神サンだ！

直感だった。

『よろしく!!!』

アタシは残りのコーヒーをまとめて関に渡して、裏口に猛ダッシュした。

ペンダントを強く握りしめながら。

「おはようございます!」

『おはようございます!!!』

テツちゃんと少しズレて挨拶。

目の前には眩しく輝く（アタシビジョンで） vivienご一行様が、燦然と立っていた。

ひれ伏したくなる程の神々しさ。

『コレ、ありがとうございました。』

まごつきながら。

「すげえ似合ってるよ!」

vivienの凱^{トキ}サン。

『ありがとうございます。こんな高価なモノ戴いちゃって、なんてお礼したらイイか。』

赤面で、あたふたして…。

お礼を言うのが精一杯だよ。

「コイツの気持ちだから気にしないでイイよ。」

同じく、メンバーの風雅さん。

「似合ってるからそれがお返しだよ。」

まっ・・・、まぶひ・・・ういいいいい！！！！！！！！！！

目を被いたくなる程に眩しい龍神サンだった。

「御花まで頂きまして、ありがとうございます。」

モトさんが龍神サン達にアタマを下げた。

えっ！？そーなの？？

と思いながらもアタシもアタマを下げる。

テツちゃんも。

「ちょうど今休憩に入ったところだったんで、とりあえず楽屋でどーぞ。」

さすがテツちゃん！そつないねえ。

ボー然気味のアタシに代わって、すかさず楽屋に案内出来るなんて。

「いや、構わなければ客席でイイよ。コレ、差し入れ持ってきたし。」

Vivienの風雅サンが紙袋を差し出してきてくれた。

「ありがとうございます!!!」

『ありがとうございます!!!!!!』

2人で歓喜の声を上げた。

「さしずめこの時間に休憩ってコトはピリピリし始めて来たんだろ。少し腹ごしらえしな? 腹が減っては戦は出来ないぞ。」

これまた眩しい笑顔で龍神サンが言ってくれた。

ダメだ、眩しすぎてクラクラする。

立ってられないよ。

とりあえずステージに戻った。

「おはようございます!」

「あざっす!!!」

「おはようございます!!!」

「おはようございます!!!」

Vivienの登場に、ステージや客席にいたウチのメンバーが全員直立した。

こんな機敏なメンバー見たコトないって程に機敏で、見てるウチらが驚いたよ。

ちよつと笑っちゃった。

差し入れのパンをみんなで頂き、何とか雰囲気に戻して再びリハを開始した。

「じゃ、また夜来るよ。」

仕事の為、そう言ってvivien一行は帰っていった。

早速ブログ更新！

タイトルは、“ごちそうさまでした！”

“初のワンマンで、メンバー全員ピリピリしたムードのリハの中、たまらずアタシが休憩を叫んで間もなく、神々しさ爆裂のvivienご一行が来て下さいました！しかもパンの差し入れ付きで！！とっても美味しかったです！ごちそうさまでした♪ ヒヨ”

何とかリハを納得行く状態で終わらせ、準備に入ろうとしたら、今度はキャンディバーの皆さんが来てくれた。

さっきよりもメンバー全員緊張。

呼んだのはこっちだけど、v i v i e nにキャンディバーに、豪華すぎだろ…。

どっちももう、ドームやアリーナツアー演っちゃうくらいのレベルの人達だよ？

ウチらにとっちゃ天上人だよ！！

ホントに神々しさがハンパじゃないワ。

良くも厚かましくこんな天上人を招待したモンだよ。

「招待してくれてありがとう。」

ボーカルの巧サン。

「こちらこそ、お忙しい中わざわざお越し頂きましてありがとうございます。」

6人の中でも一番リスpektしているナオくんのテンションは大変なコトになっていた。

挨拶の声が、異常な程に上ずっている。

もちろん全員、写メ取りまくり。

この時ばかりは数時間後にはデビューライブを演るって言うプロのミュージシャンのカケラはどこにも無かった。

“ただの素人”

だった。

「いつまでやってんだよ関！セン！！開演だぞ！！？」

開演5分前。

いつも準備が遅いのはこの2人。

オシナのアタシよりも遅い。

まあクンがそんな2人にイライラしてる。

「デビューライブから押すなんて何様なんだよ。」

テツちゃんも容赦なく突っ込む。

全くだ。

「デビューライブだから手え抜きたく無いの！！」

と反論するセンちゃん。

「おめえらはいつもだろ。早くしろ！！」

余裕のナオくんのツツコミも容赦無い。

「ヒヨ、頼む。」

結局いつも仕上げはアタシがやることになる…。

まだスタイリストさんがいないもので。。。

この2人は髪質的になかなか立ちにくいのに他のメンバーよりも良く動くから、ガッツリ立たせたいらしく、なかなか決まらないのである。

「すみませんモトさん、SEスタートして下さい！」

テツちゃんがモトさんに叫んだ。

「あいよっ！」

モトさんも呆れ気味。

「最初っからひーにやってもええよ。」

どっぴり呆れてるメンバーを代表して突っ込んだのは、まあクン。

SEが流れ始めた。

今回用に新しく作った曲。

「行くぞ。」

テツちゃんの一言に、座っていたメンバーがスッと立つ。

みんなの表情が変わった。

客席は満席。

今までにない音量の歓声が聴こえてくる。

この時点ですでに込み上げてくるモノが・・・。

ステージに繋がるドアの前で全員立ち止まる。

全員自然と深呼吸。

円陣になる。

“ ひーちゃあーん！”

“ 関うちいいいい！！！”

“ テツちゃあああん！”

“ ナオおおおお！！！！”

“ セン~~~~！！！！！！”

“ まあク↓↓↓↓ン！！！！”

ひっきりなりに聴こえてくるコールに、アタシはすでにうるうるしていた。

「今日はテツだろ。」

まあクンのコトバに、全員頷いた。

自分にフラれる前に言っただとも言っけどネ。

「今日は全員で行こうよ。全員で一言ずつ言った後に、“気合い入れてく”で。押してるけど、コレだけはやりたいんだ。イイ？」

・・・アタシ、ヤバし…。

涙が流れてきたよ。

テツちゃんの声も目も表情もみんな優しくて。

「今日は後にも先にも無いスタートの日なんで、思う存分暴れましょう！！」

切り出したのはまあクン。

自然と時計回りに流れた。

まあクンのコトバに、アタシはヒクヒク言い出してきた。

「お前ら全員愛してるぜい！！」

センちゃんのコトバに感情爆発。

嗚咽に変わってきた。

「足手まといにならないよう、頑張ります！！」

超笑顔の関。

「あつという間だったけど、演るしか無いから、悔いだけは残さないように頑張りましょう。」

ナオくんのコトバも効くわあ。

アタシだよ…。

ヒクヒクが直らないまま、途切れ途切れに言う。

『ホントにありがとう。』

泣いてるから、コレが精一杯。

隣のテツちゃんの手がアタシのアタマに触れる。

「じゃ、覚悟はいいね。失敗とか後悔したら、ブツ飛ばすからね。それでは…」

テツちゃんの手が円陣の中央に伸びた。

みんなの手が次々に重なる。

いつもの光景なのに、ヤケに泣ける。

“ヒヨおおおおお！！！！”

客席からのコールも涙の原因だ。

「泣いてたら歌えないぞ！！」

関に突つ込まれる。

ただ頷いた。

「せいの、」

テツちゃんの掛け声で、初の全員コールが切られた。

約1名、ズビズビの涙声込みで。

ドアを開けるとスタッフさん達がハイタッチで迎えてくれた。

もう顔が上げれなかった。

汗拭き用のタオルが、涙拭き用になっていた。

幸いアタシは一番最後に出るから、少し落ち着かせてから行こう。

メンバーの登場に、客席の歓声がさらに大きくなる。

↓
ヤメてえええええ！！！！！涙が収まらなくなるでしょおお↓

あれ？

1曲目のイントロが始まった？

1曲目はアタシがメインボーカルの曲なのに……。

ステージのナオくんが“待て”って言うてる。

背中を叩かれ、振り向くとスタッフのリョウさんが冷え冷えのミネラルウォーターを持ってきてくれた。

だからこーゆーのが泣きの原因になるっての！！

でも、すかさずまずは目に当てた。

『ありがとう！』

リョウさんと、ステージのナオくんに泣き顔で出来る限りの笑顔を見せた。

チラッと関の顔も見える。

アタシのメインボーカルのハズの曲なのに、アタシが出てこないどよめきが聴こえてくる。

絶妙のタイミングでアタシのマイクがスタッフから渡された。

アタシは歌いながらステージに向かった。

アタシの声に、歓声がさらに大きくなる。

ダメだってばあああああ。

涙声なの、バレてるよな。

泣き笑顔で登場。

頑張れアタシ!!

胸元のペンダントを強く握り締めた。

“龍神サン、力を下さい”

そう念じて。

隣の関がガンガン煽る。

何とか涙声のまま歌いきり、2曲目に突入した。

龍神サン、ありがとうございました。

2曲目が終わったところでMC。

『wonderful☆worldでええええっす!!』

涙声をごまかすように叫んだ。

返ってくる歓声がハンパない。

またウルツとしちゃうよ。

『今日は、デビューライブによろこそ!! みんなありがとうございます!!』

深々とアタマを下げた。

涙が床にこぼれ落ちた。

すかさず後ろに水を取りに向かった。

気付いてかそうじゃないのか、関が話し始める。

「我がwonderful☆worldは、この度めでたくデビュー致しました！！と言うコトで、メンバー紹介します！」

関、頼んだよ。

後ろを向いたままで心の中で関にお願い。

「大丈夫？」

テツちゃんが寄ってくれる。

ただ頷いた。

関とセンちゃんの掛け合いの間に何とか収まったよ。

その後は関も特にアタシの涙のコトは触れないでくれて、泣かずに済み、何とか本編を終えた。

ソデに引っ込むと、ソコには龍神サン達がいた！！！！

しかもハイタッチで迎えてくれて。

「良かったよ！」

テンションMAXのアタシは、限界を振り切って理性が皆無になったように、あろうことか恐れ多くも龍神サンに抱きついてた！！！！

物凄く自然な行動だった。

周りもテンションMAXを振り切っているからか、誰も止めずに。

ほんの一瞬だったけど、龍神サンもごく普通に応じてくれた。

アタシはとんでもないコトをしている感覚が、まるで無かった・・・

恋せよ乙女!!

『お疲れ様でしたああああ!!』

「したああああ!!」

改めて事務所に戻って打ち上げ。

ライブに来てくれた人みんな招待して。

アタシと関はもちろんドリンクで乾杯。

『ハナッから泣いちゃいましたけど、とっても最高でした。』

1人1人コメントを言わされて。

「龍神サンに何のためらいもなく抱きつけるくらいだもんな。」

関のとんでもない発言に、アタシの顔は急速的に火を噴いた。

今更ながら、自分の行動に後悔せずにはいられなかった。

『ホントにすいませんでした!!!』

勢い良くカラダを直角に曲げて。

「オレすげえ嬉しかったから。」

有り得ないほどの笑顔で言ってくれる龍神サンに、益々アタシは照

れるしか無かった。

「龍神に影響されたって言っても龍神よりもはるかにスゴいボーカルだよ、ひーちゃんは。」

凱サンのコトバに、またしても顔から火を噴くアタシ。

全身で否定。

みんなが頷いてくれても、アタシは全身で全力で、否定。

あまりの否定っぷりに、コトバも出ない。

なんて碎けた雰囲気で、打ち上げはあっという間に終わってしまっ
た…。

関やまあクン、センちゃん、ナオクンなんかはキャンディバーの皆
さんと話がかかなり盛り上がってて。

あんな関の輝いたカオ、もしかしたら初めて見たかも知れない。

アタシとテツちゃんはほとんどvivienの皆さんとお話させて
頂いていて。

途中、3組が入り交じって音楽談義に華が満開になっちゃって、凄
く楽しかったよ。

「今度みんなイベント演りたいな。」

なんてトコまで盛り上がっちゃって。

凄くみんなに感謝しちゃうよ。

“人との出逢いに感謝!!”

だよ。

「じゃ、ドライブ行こっか。」

帰り際、いきなり龍神サンからのとんでもないお誘いを受けた。

アタシは当然固まった。

脳が非常事態を表すかのような警告音が聴こえそう。

もちろん反応出来ない。

「デビューのお祝いについて約束しただろ？」

龍神サンの声は脳に入ってくるケド、理解する余裕が全くない。

「モトさん、テツ、イイ？」

固まるアタシをよそに、龍神サンは周りから固めようとしている。

「海崎もイイ？」

モトさんとの話に盛り上がっていた海崎サンにも許可を取る龍神サン。

倒れそう、アタシ。

ってか、倒れてんじゃないだろうか。。。

アタシはどこまで運を使えば済むの???

これ以上の幸せってあるの？

感情がマヒして涙も出ないよ。

「アタシも同行する？」

固まり続けるアタシに、女神のような微笑みの海崎サン。

「何ならオレかテツもついてくか？」

モトさんまで…。

マネージャー同伴てのはいくらなんでもどうかと思うので、テツちゃんに付いてきてもらうことになったのだけど…

“vivien龍神・wonderful☆world彩沢陽依超
年の差保護者同伴ドライブデート”

数日後、芸能ニュースでこんな報じられ方をしてしまった。

事務所公認と言うコトで、お互いの事務所が上手くやってくれて、
全然大事にはならなかったのだけど、、

通学が大変だった。

視線が痛い何のって…。

こんなにめっちゃくちや肩身の狭い想いをしたのなんて初めてで。

家まで関が迎えに来てくれたのには正直驚いた。

関がボディーガードを買って出してくれて。

思わず泣いちゃったよ。

お互いの事務所は、

“2人のドライブは承認済です。龍神本人から直接申し出があり、
お互いのマネージャーが即OKを出しました。”

と対応してくれて、

龍神サンは直接コメントを出してくれて。

それにもまた泣いちゃって…。

“ 以前から公言している通り、自分に影響を受けたと公言してくれている彩沢さんにデビューのお祝いと御礼を兼ねて、以前から自分が彩沢さんに約束していたコトです。自分的には妹だと思ってます”

って。

しまいには

“ まだ学生で、しかもデビューしたばかりで学業と仕事を頑張って両立させているので彩沢さんに取材等のご遠慮下さい。”

なんてハンパない御配慮まで頂いて。

まあ結局その日の放課後にモトさんから連絡があって、アタシからもコメントを出すコトにはなったんだけどね。

“ アタシにとって龍神サンは偉大すぎる程の存在です。アタシが音楽を始めたきっかけの方です。グレイトロックの時に一緒に一緒に頂いた程の、リスペクトする大先輩です。お騒がせ致しましたコトをワンワーンはもちろん、龍神サンのファンの皆様を始め、関係者の皆様にお詫び申し上げます。”

って。

アタシの気持ちをもとサンがまとめてくれたダケなんだけど。

もちろんブログでも報告。

寄せられたコメントはほとんどが応援メッセージだった。

もちろん嫌がらせのコメントもあったけど、龍神サンファンの方からの応援メッセージがあったのには号泣したね。

“「ひーちゃんを信じてるよ。」”

って、ある意味プレッシャーと言うか予防線を張られてる感じがしないでもなかったけど、とにかく嬉しかった。

まあお互いに常々ブログで逐一報告してるだけに、掲載されたのは1紙のみ、取り上げるメディアも1社しかなく、あっという間にいつも通りの日常に戻った。

・・・
かのように見えた。

冬休みが始まり、年明けの引越に向けた準備が着々と進むなか、今日は年末の音楽特番の収録。

まだまだ物凄く緊張しちゃうよ。

グレイトロックでの龍神サンとの共演や、“あの”スキャンダル（？）のお陰なのか、@の時よりも前評判が高くなっちゃって、

アタシの渾身の“桜の樹の下で”は発売前からかなりの話題になってくれているらしい。

学祭でのエピソードも話題の理由の1つらしく。。。

作った本人、一番プレッシャー……………

そんな中……

『おはようございまあす』

かなりのバックテンションでの朝の挨拶。

今はまだホテル泊まり。

クリスマスや年末の特番や、イベントが落ち着いた年明けに引っ越すから。

全員ホテル泊まりだから全員まとめて集合。

メンバーイチのバックテンションのアタシ。

自信満々のメンバー達。

「テツ、モトさんから連絡来たか？」

キラキラしているセンちゃん。

他のみんなも笑顔…。

「今から会うの分かってるからわざわざ連絡来ないでしょ。」

テツちゃんも、嘘みたいに笑顔。

心臓が熱く焼けそう…。

「10位以内には入ってるだろ。」

なっつつっ!!

ナオくんの超爆弾発言に、アタシは気絶寸前。

・・・今日は、“桜の樹の下で”の初動売上と、ダウンロード配信数が出る日。

だから、アタシが尋常じゃないプレッシャーを抱えているのだ。

心臓が、

痛い。

とっても…………

来たっっっ!!!!

「おはよう!!」

いつもと変わらないテンションのモトさんが…。

「あざあっす!」

「ッス!!」

「おはようございます。」

「あざいまあっす」

「あっす」

高めのテンションのメンバー達。

『…おはようございますううう。』

背中を丸め、小声で、伏し目がちに挨拶するのはもちろんアタシ。

モトさんはもちろん、みんなの顔が見れない。

「さっ!行きますか、大型新人の皆さん。」

あああ→ん??:?

顔がひきつる。

「もしかして!?!」

「おうっ?」

「まさか??」

「やっちゃった???」

「当然でしょ。」

最後の“当然でしょ。”は、テツちゃん。

かなり自信満々に。。。

外に出てすぐ発したモトサンのコトバ、

どうして勿体ぶるかのようになに出てから言ったのか…、

そりゃ外に出てからじゃないと言えないよ、

みんな絶叫しちゃうもん。

アタシは完全にトリップ。

「桜の樹の下で」、デイリーランキング1位・着うたデイリーランキング1位おめでとうございます!!」

完全にトリップしていた。

グレイトロックで優勝した時よりも。

みんなの声が歪んで聴こえる。

「すげえ!!」

「やあつつたあああ!」

「マジかよ…。」

口々に発するメンバーの中、1人関は絶句していたらしい。

テツちゃんは、ただただ笑顔だったらしい。

アタシの記憶が戻ったのは、移動中に掛かってきた一本の電話だった。

「ひー、ケータイ鳴ってんぞ。」

隣のまあクンに激しくカラダを揺すられて、引き戻された。

ケータイに目をやると、ディスプレイに出た文字が一気に緊張感を高めた。

“ 龍神サン”

ちよつと待ってよ・・・

今はちよつとおおお。

『テツちゃん！テツちゃん！！』

どうしていいか分からず、声にならない声でテツちゃんに渡した。

何喰わぬ顔でテツちゃんは出てくれた。

「お疲れ様っス！テツヤデス。」

「ありがとうございます！！今本人は放心状態です。」

チラツとテツちゃんがかつちを見る。

アタシのケータイを持ったテツちゃんの手が、アタシに近づく。

いやめてえええええ！！！！！！！！！！

心臓が宇宙の彼方に
いいいいいい・
・
・
・
・

アタシの放心状態は移動中はおろか、会場に着いても収まらなかった。

“「おめでとう！」”

つて龍神サンに言われても、

どんなにすぐ側でメンバーがコーフンしてても、

会場入りして、すれ違う人各々にコトバを掛けられても、

アタマを下げるのが精一杯で。○○○

どんなにメンバーに

“「ひよ！」”

とか、

“「戻ってこおおい」”

って言われても、言われてるのは解ってるんだけど……

誰にあっても、何をしてても、話題はそのコトにしかなくて。

やっと戻れたのは、リハーサルに入り、演奏が始まった瞬間だった。

やっぱり曲が流れると否応なしに戻っちゃうよね。

グレイトロックの予選から全国大会までのステージや、グレイトロックの当日の自分達のステージや龍神サン達とセッションしたステージも、

演奏が始まった瞬間にすうっと素に戻れた。

つくづく感じるよ、

“歌の力”

を————

いろんな意味での“話題の新人”だけあって、初対面のミュージシ

ヤンの方でも向こうから何気無く声を掛けてきてもらっちゃって、年末特番ダケに出演者もハンパなく豪華で、何だか恐縮しっぱなしのまま、収録は終わった。

『お疲れ様でした!!』

楽屋を出てすぐ、P i n k y d o l l ってバンドの皆さんとすれ違った。

ボーカルの真壁サンがすごく気さくな方で、

“オレヒヨリちゃんのファンなんだ。”

って、溢れ出る笑顔で握手を求めてきてくれて、アドレスまで交換しちゃって。

真壁サン、ドラマとかでも活躍されてるし、抜群のスタイルだからモデルとしても活躍されてて物凄く人気ある方だから、恐縮しまくっちゃうよ。

メチャクチャかっこいいしね。

「お疲れ様。」

笑顔で返してくれた。

このさりげなさがまたイイね。

P i n k y d o l l は良くTVや有線やラジオで流れるから買っ

たりダウンロードしてまで聴いたコトは無かったケド、詳しく聴いてみようっかな。

何てったって今年の賞レース独占って言われてる程の実力者だからね。

『お疲れ様でしたあ。』

ホテルの部屋に着いてふとケータイを見ると、早速真壁サンからメールが来ていた。

そこに書かれていたコトバは、アタシの息の根を瞬間的に止めた。

“ 良かったら付き合ってくれないかな。 ”

アタシの思考回路は完全にフリーズした。。。。

スキヤンダル女!?

コレは夢?

アタシ、悪い夢でも見てんの???

疲れてんだ、きつと。

そんなワケないじゃない!!

“あの”真壁静哉が小娘のこのアタシにコトもあろうに“付き合っ
てくれないかな”なんて。

月と太陽が無くなったって、そんなコトあるワケないじゃない。

バカバカし過ぎるよ。

あり得ない！！！！！！

でも、メールには確かにそう書いてある。

しかも相手は、どう見てもどう読んでも“真壁サン”で。

アタシは龍神サンとの騒動の時のコトが過ってしまった。

「ひー？」

ケータイを持って、画面を見たままフリーズしていたアタシの顔を
関が覗き込んできた。

アタシはたまらず声を上げた。

『うゝあゝああつつつ』

表現し難いアタシの声は、周り全員にアタシの動揺を露呈させてしまった。

良かったあ…、画面戻しという。

ケータイを見られかねないからね。

「すげえ顔…。見ちゃいけないモノ見たみたいな顔してんぞ？」

ドン引きの関。

みんなの視線も怖い。

アタシの心臓は最高潮に速く動いている。

『ごめん…。』

胸が苦しい。

ケータイを持つ手が尋常じゃない程の汗ばみよう…。

動揺してんのモロバレだよ、これじゃあ。

「どうかした？」

いつも以上に優しく響くテツちゃんの声。

アタシはただ首を振るしか出来なかった。

歩き方まで動揺が出て。

心臓がばつくばくなモンだから、ロボット歩きみたいになっちゃって。

アタシのアタマの中のスポーツ新聞は、勝手に一面記事が出来上が

つていた。

“大物好きの新人、今度のお相手は真壁静哉”

“デビューと同時に恋多き女っぷりもデビューか？”

うあああああ！！！！！！！！！！

ココロの中でアタマを振り乱す。

ダメだっ
っっっ
！！！！！！

P i n k y d o l l フ ァ ン に 殺 さ れ る 。

龍神サンファンにはかなり護られるかも知れないけど…。

ダメだっ
っっ！！！！！！

ダメダメダメ
えええええ。

ビク ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
ン → → →

再び真壁サンからメールが…。

“イマドコ？迎えに行ってもイイ？”

嫌 ああ ああ ああ ああ ああ ああ
→ → → → →

アタシは余りの動揺に全身が震えていた。

「ヒヨ？」

隣の関がうろたえている。

どどどどどどどどどど

どうしよう!!!!!!!!!!

どうしたらいいの？

テツちゃんに相談？？

それともモトさん？

「大丈夫か？顔色悪いぞ？」

車を路肩に停めてくれた。

『大丈夫。大丈夫。』

多分コレは自分に言い聞かせてるんだと思う。

泣きそうな声で精一杯答えた。。。

万が一のコトを考え、モトさんには言った方がイイのかなあ。

スキャンダル女になりたくないもん。

「そんなに1位が嬉しいのか？そりゃそうだな。苦勞したもんな。」

勝手に納得してる関。

構ってられない。

ほっところ。

とりあえず返信して様子を見よう。

何かの間違いだろうから。

“何でアタシなんですか？”

ボタンを押す手が震える。

返信はすぐに帰ってきた。

“グレイトロックの番組見てて、ずっと気になってたんだ。言ったでしょ、ファンだって。”

.....、

そうだった・・・

確かに挨拶の時、そう言ってくれてたよね。

何だかクラクラしてきた。

“とにかく話がしたい。逢ってくれないかな。”

どうしよう…。

『モトさん、ちょっとイイ？』

アタシは意を決して切り出した。

そう言って車を降りた。

モトサンも車を降りてくれた。

「時間も時間だからホテルに来てもらうとイイよ。何かあってもすぐメンバーが出ていけるし。」

今までにないほどの温かさを感じた。

アタシが弱ってるからなダメなんだろうけど。

たまらず泣いちゃったよ。

「とりあえずは誰にも言わないでおくから、もし何かあったらまずオレに言って。」

頷くしか出来なかった。

“もうすぐホテルに着くんでホテルのロビーでイイですか？未成年なんで。”

そう送信して車に戻った。

泣きながら戻ったアタシに、心なしかみんな温かった。

“大丈夫か？”

とか、

“どうした？”

とかは敢えて聞かないでくれて。

ただ、

“おかえり”

って、笑顔で言ってくれるだけだった。

それがたまらなく嬉しかった。

そして、辛かった。

もしかしたらまた迷惑掛けちゃうかも知れないから。

そう思ったらまたどうしようもなく泣けてきちゃって、アタシは1人うずくまって泣いた。

助手席だったのが幸いで。

みんなに迷惑掛けるくらいなら、今みんなに言ってしまった方がイイんじゃないか。

そんなコトも考えたけど、

まだ付き合うってコトになったワケじゃないから言わないでおこう。

ただ、見つかる可能性もあるから…、

『今から真壁サンとロビーで逢うね。』

ってダケ、精一杯の笑顔で言おうとして振り向いた瞬間、

関が一言

「デイリーで1位だったくらいでビビってんじゃねえよ！せめて週間で1位になってからにしろ！！」

って、照れ臭そうにケータイをいじりながら言った。

センちゃんやナオくんは驚いた顔をしてたけど。

確かにいつもならキレたかも知れないけど、何だかそれが逆に嬉しかった。

きっと関はそんなつもりでは言ってないだろうけど。（間違いないなく
…）

隣のモトさんは失笑していた。

ホテルに着いて、ロビーでみんなと別れ、アタシは1人、ロビーで待っていた。

途方もない緊張の中で…。

“あれ？ひー、どした？”

センちゃんに声を掛けられちゃったから、思わず言い掛けたけど、
またしても関が遮った。

「ほっときましょう。」

そう言ってセンちゃんを促した。

関、気付いてんのかなあ…………。

、、んなワケないよねえ…。

でも、ありがとう！

気持ちを落ち着かせるためにケイタイの待受画面をずっと見つめていた。

龍神サンとの2ショット。

アタシの精神安定剤。

ヘッドフォンから流れるのはv i v i e n。

龍神サン…。

龍神サンに相談したら何て答えてくれるかなあ。

アタシの中で、龍神サンの存在はかなり大きい。

今も、今から逢う真壁サンじゃなく、龍神サンのコトがアタマを埋め尽くしている。

アタシにとって龍神サンは、ココロのカレシでありお兄ちゃんであり先輩であり尊敬する偉大な人。

“好き” ってコトバだけでは済まない程。

“好き” ……

ワンワに夢中で、異性に対する“好き”が、かなりご無沙汰してたな…。

心臓だって今にも破裂しそうだし…。

息苦しさすら感じる。

なぜだろう。。。。

さっき初めて逢った時は何とも無かったのに…。

カラダがガクガク震えてる・・・。

顔だってきつとひきつってるに違いない。

やっぱりあんなコト言われちゃあねえ・・・。

話してる真壁サンの声が何だか遠くに聴こえる。

こんなに目の前にいるのに…。

あわててケイタイをカバンにしまった。

「突然あんなメールしちゃってゴメンね。ビックリしたよね…。」

当たり前だよ!!

天下の真壁静哉に“付き合おう”なんて言われてビックリしないヤツなんかいないよ!!!

心の中で即突っ込む。

だけど口では

『はい…。』

超か細い声で。

またしても“妄想見出し”が頭を駆け巡る。

“深夜の密会”

“共演直後の真夜中のデート”

どうしてこんな時に想像力が豊かになれんだろ、アタシ…。

何だかイマイチ良く憶えてないけど、

毎日静哉サンからメールが来る。

1日に何回も。

“おはよう”

とか

“ 今からドラマの収録 ”

なんて。

で、どうなったんだっけ？

付き合うの？

いや、違うよねえ？

“ 「まだデビューしたばかりだし、この前龍神サンとのコトがあったばかりなんで今はまだ…。」 ”

って言ったよね？

そしたら思いっきり笑顔で

“ 「そっか。そうだよね。ごめんね、オレも勝手なコト言って。」 ”

って言うってくれたんだよね！？

ホテルのフロントの人に写メ撮ってもらって、

その場でブログ更新して帰ってったよね？

ブログには

“オレの大好きなワンワのひーちゃんと♪”

って、フロントの人に撮ってもらった画像があって。

“大好きなひーちゃんとたくさんいろんな話がしたくってひーちゃんのホテルに押し掛けちゃいました！！遅い時間にも関わらず快く待ってくれてありがとう！！！”

って堂々と。

これもまた龍神サン作戦と同じか？？

“先手必勝”ってヤツ？

数日後、見事にメンバーや龍神サン達にも知られるところとなるのだが…、

1日に何回もメールが来てるコトは言っていない…。

言えない・・・。

あんなに堂々と公言してくれてるんだから、言っても大丈夫そんなモンなんだけどさ。

言えない・・・。

何でだろう。

特に龍神サンには死んでも言えない。

一番頼れる存在のハズなのに…。

龍神サンから真壁サンネタをフラれると、モーレッツに胸が痛い。。。

“お兄ちゃん” なんじゃないの???

“尊敬する先輩” なんじゃないの??????

じゃあどうして胸が苦しいの!?

誰か教えてええええ…。

年末の賞レース、

いくつか最優秀新人賞を戴いて、

完全観客で行ったハズの大晦日のvivienのカウントダウンラ
イヴにまんまと飛び入り参加させられ、

嵐のような1年は幕を閉じた。

正月を実家で過ごし、いよいよ引越。

アタシと関は、ちよつとの間の週末、行ったり来たりを繰り返すけ
ど、

いよいよ上京。

久し振りに帰ってきた地元は、

何だか物凄く懐かしく感じた。

この見慣れた景色はちつとも変わらないのに、

アタシ自身の身边が激しく変わった…。

今まで何事もなく歩けた通学路が、

今では誰かしらに声を掛けられる。

関と2人で歩いてようが、1人であるいてようがだ。

今までみたいに関とゆっくり話せなくなった。

教室でも、興味津々なみんなが次々話し掛けてきて。

景色は全く変わってないのに・・・。

まるで別世界にいるみたいだよ。。。

アタシも関も違和感炸裂。

お陰で、最近屋上にいるコトが多くなってきた気がする。

『学祭の事を思い出すね。』

あの時みたいに仰向けになって、空を見上げながら。

無言の関。

真っ青な空の下、穏やかな空気が流れる。

「オマエさあ、真壁静哉と何かあった？」

突然口を開いたかと思ったら関はとんでもないコトを言い出した。

驚きの余り、咳き込むアタシ。

またしても沈黙が流れる。

アタシが何も答えられないまま、始業前の音楽が流れた。

お互い無言のまま教室に戻る。

アタシは、ずっと関のコトバに動揺しまくっていた。

そりゃ予感はしてたよ？関が気づいてるかも知れないって。

そんな気はしてたけど…。

今までアタシが勇気を絞り出して言おうとしてたのを遮ってたのは
アンタでしょうが！！

アタシの本音。

声を大にして言いたいけど・・・、

言わない。

帰りに話そう。

もう限界だ。

アタマの中ぐちゃぐちゃで、何が何だか解んなくなってるから…。

『あのさあ…』

心臓爆発寸前。

うかつに歩きながら言えないから超小声。

しかもうつ向いてるから関には聞こえてないっぽい。

関の手を引っ張って呼び止める。

うつ向いたまま。

「あん？」

いつも通りのの、かったるそうな関の返事。

いつもならイラッとするのに、今だけなぜだか癒される。

関の顔を見れないまま、黙ってケータイを渡した。

受信メールの画面にして。

画面に表示されてる名前はは、見ても見てもほとんどが“真壁サン”。

上目で関を見る。

何も言わないままケータイを見続けている。

沈黙が続く。

信号待ちで立ち止まった。

無言で、こっちを見ずにケータイを返してきた。

その後、アタシと関の間に会話は無かった。

くるくる

その夜、超単純なアタシは、久しぶりに掛かってきた龍神サンからの電話に、さっきまでのモヤモヤがまるで嘘のように、

ウルトラスーパーハイテンションに変わった…。

単純・・・。

“ 「新人賞祝いしなきゃな。カウントダウンの時、何も出来なかったから。」 ”

いつもながら、身に余る光栄な御言葉に恐縮しきりのアタシ。

『 どんでもないです！！この前ダイブ頂いたばかりなのに…。 』

声が上がずる。

アタシの緊張が伝わっちゃったのか、笑う龍神サン。

「ホントに気にすんなって。何にもやましい気持ちとかプレゼントしたからってどうこうしようなんてワケじゃないから。」

高らかに笑う龍神サンにアタシはモーレッツに恥ずかしくなった。

『 …ですよねえ。。。親子ほどの年の差の小娘ですからねえええ。 』

超恐縮。

「ソレもないな。」

へっっっっっ!?!?!?!?!?!?!?

なっ、何が????

あぜんとする。

結構マジメに反論されたから…。

「確かに妹として見てるけど、“親子ほどの小娘”なんて見方はしてないよ。」

ドドドドドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓ン→→→→→

どうしてそう言うコトをサラッと言っちゃうかなあ…、この人は。。。

無言になっちゃうよ。

「何か欲しいものある?」

動揺を隠せないこんな状態で何も考えられないよ…。

1っしか思い付かない…。

でも、コレはまた何かとトラブルがあ…。

“ドライブ”。。。。

しかも今回はお食事付で…。

んなコトしたら今度こそ、確実にスッパ抜かれるだろ…。

アタシ得意の暴走妄想モードに、瞬間的に脳が移動する。

ダメだめ駄目ええええええ！！

「解った！！！！任せといて！！！」

えつつつつ？？？

何？この龍神サンの無邪気な声…。

解ったって、何だろう…。

週末になり、再び上京したアタシに、龍神サンの“解った”の意味の答えが待っていた。

「龍神サンから。」

笑顔のモトサンがアタシの指定席の、移動車の助手席にある紙袋を見て言った。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ダイブラ再び…。

今度は大きめの紙袋だった。

「バッグだな。」

センちゃんが茶化す。

急激に顔が紅くなる。

だけど、恐らく当たりだろう。

座って、ゆっくり、慎重に袋を開けた。

やっぱりバッグだった。

しかもリュック！。

アタシがリュック派なコト、気付いてた？

小さいけど、大きめのポケットがついていて、ポケット部分にダイブラのロゴがデザインされていて、ロゴのチャームがファスナーのトコロについていて。

色、形、デザインどれを取っても、一発で気に入るモノだった。

かなり早い鼓動を抑えきれないまま、アタシはソッコーで龍神サンに電話した。

出たっ！！

「海崎にアドバイスもらったんだ。」

かなり勝ち誇った感の龍神サン。

ちよっとほくそ笑んじゃうよ。。。

“解った”って、そう言う意味だったのね。

『ホントにホントにありがとうございます。アタシ何も出来ないのに…。』

「いらねえよ、妹なんだから。」

照れる龍神サン。

“妹なんだから。”

か……。。

『海崎サンにもよろしくお伝え下さい。』

海崎サンの顔が浮かんだ。

透き通るような白い肌で、正真正銘の“クールビューティー”

もちろん申し分ないスタイルで、

イチスタッフなのが勿体無いくらい。

上品な雰囲気です。

アタシは電話を切った後、ソッコーでバッグの入れ替えを始めた。
もちろんブログにアップしたよ。

「ひーちゃん、そのうちダイブラからオファークンじゃねえの？」
センちゃんの茶化し再び。

「来るワケないじゃん!!」

バカ笑いして否定するのは関。

『そーだよ来るなら龍神サンにだよ。』

アタシも加わる。

「海崎さんかもよ？」

モトサン悪のり…。

アタシはお構いなしに、

リュックを眺めては、

ニヤニヤしていた。。。

周りが気味悪がっているのも気にせずに…。

その2日後だった――――

天地を揺るがす(?)大事件が起きたのは……

ここ2日、(リュックのコトをブログに載せてから)、真壁サンからのメールがぱったり無くなった。

アタシのニヤニヤより、こっちの方がよっぽど気味悪いよ…。

気味悪いと言えば、関も。

“何だコイツ…”って、ある意味気味悪い行動に出られたんだよね…。

昨日の帰り道、いきなり

“「龍神サンのコト好きなのか？」”

って、エラく真面目な顔しちゃって。

だから言ってやったよ。

“『好きは好きだよ！！大好きだよ。』”

って。

アイツはただ、

“「そっか」”

ってだけで、その話は終わったけど。

まるで、真壁サンのコト話した時みたいに。

ちよいちよい気になるな、関の態度。

付き合いが長いから余計気になるよ。

まあ今回は、その後に無言状態が続いてるわけじゃ無いからイイけど。

今日は、真壁サン達pinky dollがうちの地元でライブで、アタシと関は招待されているのだが…。

「今日どーすんだ？」

と関。

『この2日、メール来てないんだよね。今日も一切来てない。』

ケータイを確認しながら。

「えっ!？」

大声で。

「リュックが効いたか？」

真顔の関。

アタシは思わず吹き出しちゃった。

何だかおかしくって。

『かもね。』

なんて、笑い飛ばしてたその時…。

ケータイが鳴った。

真壁サンからだ。

ついつい関の顔を見てしまう。

『真壁サンだ…。』

直接着信つてのが気になるから手が震えてる。。。

心拍数も上昇。

とりあえず出た。

『もしもし。』

ドキドキしてるから声が震え気味。

「おはよっ!! 学校終わった? もちろん今日来るよねっ!!」

何ら変わらない、いつもの真壁サンのテンションだ。

周りの音がかなり大きい。

リハ中か何かだろう。

来たか催促・・・。

油断してたアタシがバカだった…。

関に困った顔をしてみる。

「もし何だったら、開演前だけでもイイよ。」

はあ・・・。。

真壁サンに聞こえないようにため息。

『解りました。』

仕方ない、行くか。

「わざとらしくこのままで行くか。そしたらあまり無駄な抵抗は出来ねえだろ。」

覚悟を決めたかのような表情の関。

何だよ、“無駄な抵抗” って…。

また笑っちゃったよ。

「サヨリ、イイのか？」

あゝつつつつっ！！！！！！！！！！

関のコトバに、サヨリのコトバを思い出した。

“「ひーちゃん真壁静哉の楽屋行くんでしょ！？アタシも行きたい！！」”

って、大暴れしてるサヨリの姿と共に。

今朝も催促されたっけ…。

“『行くかわかんないよ？』”

って、バックテンション気味に言ったらメチャクチャ残念がってたケド。

「ええええええ！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

つて懇願されてたつけ…。

しょうがない、連絡するか…。

途中、手土産を買い、超ハイテンションなサヨリと合流し、アタシ1人ダケ重い足取りで向かった。

サヨリはもちろんハイテンション。

pinky dollのライヴって、初めてなんだよね。

ファンのコ達の反応が怖いよ…。

なるべく裏に裏に向かって行く。

時間的に裏口にファンのコはいなかった。

最初の関門クリア…。

大きなため息。

「おはようございます。」

『おはようございます。』

関が最初に入ってくれた。

何も持っていないサヨリは、アタシにピッタリくっついて。

pinky dollのスタッフさんは、マネージャーさんしか知らないけど、ウチらのコトを知ってくれてるのか、笑顔で通してくれた。

ハタから見たら制服の3人組なんて、いくらpass見せたって、フツー通してもらえないよね。

中に入るとすぐ、マネージャーサンがウチらに気付き、駆け寄ってきてくれた。

『おはようございます!!』

「おはようヒヨリちゃん。ごめんね、忙しいところ静哉のワガママで…。」

困り顔のマネージャーさんに、“ハイ”なんてとても言えなかった。

「ご招待頂きありがとうございます。」

反応に困っていると、すかさず関が挨拶してくれた。

アタシもすかさず乗っかって手土産を渡す。

『コレ、みなさんどうぞ。』

駅前のケーキ屋サンの、ミニシュークリーム。

地元ではかなり有名。

「ありがとう。申し訳無いね…。御花まで頂いちゃって。」

あつ、そう言えばモトサンに確認されたっけ。

“「真壁サンに花贈っとくぞ？」”

って。

何の気なしに返事しちゃってたけど、地方にまで贈ってたんだね…。

まだメンバーはリハ中のようで、ウチらは周辺にいるスタッフさん達や、関係者の方々に挨拶して回った。

地方公演だから、とりわけ仲のいい芸能界の方達はいなかったけど、事務所関係とか、地元のメディアの方々に。

別に年少組2人で営業気取りじゃないよ。

何と無く自然に。

当然、サヨリは挙動不審気味でずっとアタシの背後に張り付いていた。

合間合間に“まだ？”ってしつこくて…。

挨拶を一通り終わらした後、一気にテンションが戻った状態でフロアに行った。

関がドアを開けた瞬間、見えた制服で解ったのか、真壁サンのマイク越しに叫ぶ声が聞こえた。

「ひーちやああん！！！！！！関クンも待ってたよ。」

いつものハイテンションな真壁サンがソコにはいた。

背後のサヨリのアタシをつかむ力が急激に強くなったのが判った。

痛いくらいだ。

さぞかしコーフンしまくりだろう。

チラッと後ろを見る。

ひきつってるのか強張ってるのか、実は一応笑顔なのか、全く理解不能な顔になってるよ。

まあ当然だよな。

アタシだって初めは、ココロの中ではこんな状態だったもん。

リハが終わり、みんなで楽屋に行った。

サヨリはいつの間にか関にピッタリくっついて部屋の隅にいた。

この2日間は何だったのかって程に、それまでの真壁さんと何ら変わらないテンションで色々話し掛けてきた。

この2日、音信不通だったコトは一切触れず…。

「ハイ、ひーちゃん。来てくれたお礼。」

準備の途中、突然自分のバッグを開けたと思ったら、真壁サンはアタシに紙袋を差し出した。

「新人賞のお祝い。」

えつつつつっ!?!…

思わず固まってしまった。

龍神サンにもらった3日後に“新人賞祝い”????

しかもこの2日、全く音信不通だったのに?!

アタシの妄想暴走モードに火が着いた。

同時に関のコトバを思い出した。

“「リュックが効いたか?」”

まさかりユック効果はこっちに流れた？

…に、してもなんだろう。

って……

パルミナじゃん→→→→

良く見ると、確かに紙袋シヨップバッグからして高級感爆裂だワ…。

パルミナは世界的に超有名な、超超超一流ブランドで、超超超超超セレブなジュエリーブランド。

良く、世界的に有名な人やセレブな人が持っていたりイメージキヤラクターしたり、ブライダルジュエリーにしたりするようなブランドなんだよ！?!?!?

おそらく世界一なハイブランドなんじゃないだろうか。。。

何にしても10代で持つなんて恐れ多すぎて、アタシからしたら神をも超越した、まさに天上がかった存在だよ。

アタシ、また妄想暴走モード突入！

ダイブラよりも高級ブランドだよ？

まさか狙った？

手が震えて中を開けない…。

「気にしないでっ！んなイイもんじゃないから。」

屈託のない笑顔で真壁サンは言うけど、

「パルミナのどこが『イイもんじやない』ってのよ……!!」

袋を持ったまま固まる。

「気に入ってくれと嬉しいな。」

アタシが固まっている間に、真壁サンは準備を終えていた。

「じゃ、そろそろ。」

関が呼びに来てくれた。

「来てくれてありがとねっ。時間あるなら少し見てってねっ。」

眩しいばかりの笑顔でステージの歓声の渦の中に消えていった。

“どうしよう…”

アタシは完全に混乱しきっていた。

帰り道も、ずっと頭の中をぐるぐるいろんなコトがうごめいていて。
泣きたいのを我慢して、そのせいで吐きそうになってそれも我慢して…。

今、最高潮にグッダグダ。

「ひーちゃん？」

さっきからしきりにサヨリがアタシを呼んでいるのは解るんだけど、

“ 「ふうえ？」 ”

って、力ない返事が精一杯で。

吐き気を我慢してるから。

「ほっとけ。」

一生懸命関がそらしてくれてるのも解った。

「何かあったの??」

関に何度も問い詰めるサヨリ。

「さあ。」

軽く交わす関。

そんな関の友情に、余計泣きたくなる。

いつもいつも、アタシの気持ちが解ってるかのような絶妙のフォローを入れてくれる。

ホントにかけがえのないヤツだよ。

コイツ、好きなコいないのかなあ。

2年の時、ちょっとだけ付き合ってたコはいたけど。

それ以来、見たコトも聞いたコトもないな。

絶対彼女のコト幸せにしてあげれそうだけだな…。

実際、今だってメチャクチャモテて、女の子には困らなそうなのにな…。

関の背中を見つめながらふと考える。

家に着き、サヨリがお風呂の間にアタシは誰にも見られないように自分の部屋に鍵を掛けて、

今まさに突き抜けそうな心臓で、真壁サンからもらった袋を開けられないまま凝視状態が続いていた。

どうしよう・・・。

考えたダケで泣きそうだ。

と、同時に吐きそうだ、考えすぎて・・・。

懲りずに、またしてもいろんなコトがアタマを過る。

関に言っちゃおうかな…。

こんなコトなら関に開けてもらえば良かった。

ってか、アイツはきつと気付いてる。

だからこそ、あのタイミングだったと思う。

アタシは関を呼び出した。

関は至ってフツーだった。

“「ああ分かった、今行くワ。待ってろ。」”

って、いとも簡単に。

まるで、アタシが呼び出すのが想定内だったかのように。

龍神サンだっつつつつ。

何で??????

ドラマみたいなタイミングだよ。

『もしもし。』

声が震える。

ケータイを持ってる手も震えてる。

こんなじゃ龍神サンに何て言ってるか聞き取ってもらえないよねえ。

「テツヤからメールもらったんだけど、大丈夫？」

テツちゃん?!?!?!?!?!?

『エッ?』

か細い声のアタシ。

「関がオレに連絡してくれって言ってきたって。」

え、っつつつつっ！！！！！！！！！！！

関が??????

アタシは全身に電気が走ったような衝撃にかられた。

何で……??????

しばらくコトバが出なかった。

と同時に涙が止まらなかった。

「ヒヨ!?!」

電話の向こうの龍神サンが驚いているのがわかる。

ありがとう、関……。

『ずいばぜん……。』

アタシ、グッタグタな涙声だよ。

ってか、爆裂鼻声。

すぐ隣にいるハズの関の顔が見れない。

だけど、

アタシは思わず、自分でも不思議な程に無意識に、

関の手を握り、関の肩に寄り掛かっていた…。

関は何も言わず、ずっと黙って隣でアタシの話を聞いてくれた。

まさかの失恋???

『ありがとう。』

電話を切った後、アタシはうつむいたままに言った。

「何が？」

相変わらずのぶっきらぼうな返事。

照れ隠しだろうけど、いつものコトながらイラつく。

だからアタシはいつも、ソコで話を終える。

「せっかく大好きな人がそばにいるんだから、どうせだったら好きの人に聞いてもらった方がイイだろ。オレ、そーいえば龍神サンのアドレス知らねえやと思ってさ、テツさんに頼んだ。ごめんな。」

なっ!!!!!!!!!!

『何で謝るのよ!!!』

とっさに手を放し、関の目を見て言った。

「勝手なコトしたから。」

はぁ!?!?!?!?!?

開いた口が塞がらなかった、ココロの中のアタシも。

らしくない極まりないよ。

何なのコイツ…。

出来るコトなら開けないで返したかったけど、

龍神サンに、とりあえず中を見てみてからにしろって言われたから。

「イイのか？」

いつになく真剣な関。

思わず吹き出しちゃった。

『お願いします。』

小さくアタマを下げて。

関のお陰で、ドキドキは無かった。

完全に無いワケではなかったが、かなり緩んだ。

ところが、

中を開けて、

アタシも関も、

時間が止まった・・・。

しばらく、2人ともコトバが出なかった。

なぜなら、

中身は、

指輪だったから・・・。

我に返った関が取った行動、

「あゝあゝあつ！！」

27.

まるで時限爆弾でも手にしてるかのようなカンジで箱を離さずに自分から遠ざけた。

アタシまでつられて

[illegible]

って、
 ついついカラダを反らしちゃって。

お互い顔を見合せて、吹き出し笑いしあつた。

笑いが引き、少しの沈黙が流れ、次の瞬間、2人同時にため息をついた。

「どーすんだ？」

アタシも関も、箱の中の指輪を直視。

アタシ、反応出来ず。

とりあえずアタシが取つた行動、

箱を閉めて箱を袋に戻してみた。

恐らくプラチナの、センターでねじりの入った指輪。

石とかは特に無く。

「プラチナでパルミナでって、いくらすんだコレ!! 売っちゃえば?」

おいっ!!!!!!

『何て下世話なコト言うの? アンタは!!』

素で怒った。

「返すよりはいんじゃねの?」

・・・まあ、静哉サンの的には返されるよりはそうかも知れないけど、

アタシがヤダよ!!!!!!

龍神サンに写メを送った。

高校生がパルミナのしかもプラチナなんて…。

「コレさあ…、」

メールの送信ボタンを押してため息をついていたアタシに、関がボソツと言い出した。

関の顔を見る。

「もしかしてからかわれてんじゃね?」

はいいいい??????

『からかう!?!?』

言うに事欠いて何言っちゃってくれちゃってんのコイツってば!!!
→→→

声裏返っちゃってるよ、アタシ。。。

どんかゴージャスなからかい方なんだよ。

コトバが出ない。

「だって考えてみるよ。高校生がパルミナのしかもプラチナなんて、しかもコレがマスコミに見つかったら間違いなく取り上げられるに決まってるし。」

.....そりゃね。。。

そりゃそうだ。

「だいたいこのタイミングでしかもパルミナなんて、龍神サンにケンカ売ってるとしか思えねえし。」

ドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓→→→→→→→→→→

オマエそれ言うなよ…。

今の一番のウィークポイントなのに…。

「そもそも指輪なんてサイズ合うのか？」

確かに……。

アタシ指のサイズ聞かれてないし。

「誰か他の人にあげようと思って突っ返されたとかじゃねえの？」

投げやりな関。

ソレは無いだろ…。

『真壁サンをフる人なんているの!？』

「わっかんねえよお!？」

思いつきり力が入る関。

だってもしコレでぴったりだったら?…

おどける関をヨソに、アタシはとてつもなく恐ろしい妄想が浮かんで来てしまった…。

もしぴったりだったらコワイよねえええ…。

関の言う通り誰かにあげようとしたモノだったとしたって、

サイズを知らずにカンで買ったとしたって、

どっちにしたってぴったりだったらコワイよ・・・。

また1人で固まっていたら、メールが鳴った。

龍神サンだっつっ!!!!

両極端な2つのドキドキを感じながら、逸る気持ちを丸出しでケータイを見た。

“サイズは?”

やっぱり龍神サンもそう来たか…。

男子(真壁サン)のコトは男子(龍神サン・関)の方が解るだろうからね。

はあああ・・・。

深くいため息をつく。

ん?またメールだ。

真壁サンだ・・・・・・・・・・。

肩がズシンと重くなった気がした。

“気に入ってくれた!?”

どよおおおおおおおおおん←←←←←←←←

何も言わず関にケータイを見せる。

「オレに任せろ。」

えっ!?

何かを言いたそうな表情で関は何か打ち始めた。

『ちよっ…』

慌てて止めようとしたけど、

「イイから。サイズ確かめてみる。」

ケータイから目を離さずに、ちよっと迫力を感じさせる声だった。

戸惑いながら、アタシは言われるがまま指輪を指に入れてみた。

恐る恐る、

震えながら。。。

人指し指から順に入れてみる。

中指、、、

薬指……、、

間接をすんなり抜けて、スポツと付け根まで入ってしまった…。
つまり、

ピツタリ……………。

「マジか…。」

いつの間にか関が見ていた。

かなり落胆の声。

「アイツ、相当慣れてんな。神的なプレイボーイなんじゃね？」

えゝつつつつっ?!?!?!?!?!?

「指輪のサイズをカンでだろうが当てれるなんて並の能力じゃ無理だろ。」

ぐうの音も出なかった。

『やっぱり返す。』

指輪を外した。

「売ろうぜ。かなり売れんぞ？」

全く…。

また言ってるよ。

「アイツにはそうメールしといた。」

『え、つつつつ？？？？』

ケータイを奪い取った。

すかさず送信メールを見してみる。

“ 関です。高校生にパルミナは重すぎます。ましてや今こんな時に着けて人前に出たらマスコミの餌食になるのは目に見えてますので、コレはせつかくですが処分させて頂きます。それとも返却しますか？ ”

心臓が破裂するんじゃないかって程の動揺だった。

“ ソレはひーちゃんにあげたものだからひーちゃんに委せる。でもオレはホンキでひーちゃんのコトが好きなダケだから。 ”

ソレが真壁サンからの返事だった。

“ ホンキで好きなダケ ” って…。

受け入れるべきなんだろうか。

1人、部屋で考えていた。

関が家まで送ってきてくれた。

気を紛らすために、関はアタシが家に着くまでずっと、くだらない話をし続けてくれた。

表面上は、関に合わせて笑ったりフツーに話に乗ってたけど、

心中は、全然気が気じゃなかった。

“ホンキで好きなだけだから”

このコトバが離れなくて。

そんなコト、今まで言われたコト無かったから。

アタシ、“ホンキで好き”って言える人、いる????

龍神サンは・・・

好きだよ。

ホンキで好きだよ！。

だけど、言えないよ。

“好き”の意味が、

“男性として”よりも、

“先輩として”と、

あくまでも、“vivienの”龍神サンが好きって方が強いから。

決して、向坂龍二としてでは、

無いから。。。。

だったら、こんなにストレートに“好き”って言ってくれてる真壁サンの気持ちに応えるべきじゃないか…。

アタシは、真壁サンのブログを前のモノから何度も何度も読み返していた。

時間が経つのも忘れて…。

眠れなかった。

感情がぐちゃぐちゃ過ぎて…。

“ ひーちゃんと一緒に♪ ”

“ ひーちゃんのCD ”

“ 明日はワンワーと一緒にっ！楽しみ♪ ”

“ 新人賞おめでとう！！ ”

コトあるごとに出てくるアタシの名前。

“ グレイトロックのオンエアを見て一目惚れした ”

アタシに言ってくれたコトも堂々と載っていて。

気が付くと夜が明け始めていた。

依然として、ぐちゃぐちゃな感情は全く収まらず…。

昨夜のライブ終了後の真壁サンのブログもやっぱりアタシの名前が。

“今日はワンワーの地元でのライブでした！ひーちゃん姉妹と関くんが制服姿で来てくれたよ。制服姿のひーちゃん、かわいかったあ♪差し入れのシュークリーム、メチャクチャ美味しかったッス！！ごちそうさまっ”

“制服姿のひーちゃん、かわいかったあ♪”って…。

こんなにもストレートに感情を表現出来る真壁サンが、どこか羨ましくも思えてくるよ。

そのせいでアタシがこんなに苦しんでいるって言う点は否めないが…。

はあああ・・・。

深く大きいため息。

もう4時過ぎてるう。。。。

ヤバイ…、一睡もしてないよ。。。。

今日学校なのに…。

何か飲むか…。

コートを羽織り、自販機よりも近い、家のすぐそばのコンビニへ。

入った瞬間、アタシの眠さ爆裂の目にとんでもないモノが入った。

眠さのせいで一瞬見逃したケド、

次の瞬間、

アタシは思わず二度見してしまった。

そして、固まった。

その場から動けなかった。

なぜなら、

何気無く目を向けた新聞のラック。

某スポーツ新聞の見出し。

“ 真壁静哉 極秘入籍!! ”

何が何だか分からないまま、無意識のうちに新聞を勢いよくもぎ取り、レジ横のホットドリンクコーナーからミルクティーを取って会計をして一目散に家に帰って新聞に食いついた。

家まではホンの数分だけど、猛烈に長く感じた。

猛ダッシュで家に向かってるハズなのに。

アタマの中は真っ白で。

店員サンの前で必死に冷静を装ってた（つもり）けど。

家に着くなり部屋に駆け込んで、コートを放り投げてベッドの上に飛び込んだ。

真っ先に新聞に目を通す。

何で???

どうして???

どう言うコト??????

アタマが真っ白、

って言うか、完全思考停止。

“ピー” って音がいつまでも聴こえてそうに。

涙は出なかった。

その代わり、吐き気が止まらなかった。

実際吐かなかったけど。

ミルクティーをがぶ飲みして我慢して。

テレビをつけてみた。

芸能ニュースでやるかなと思って。

御相手の方は、都内在住の同い年の派遣社員の方で、妊娠してるらしい。

激しいめまいがする。

新聞にはパルミナのお店に2人でいるところの写真が載っていた。

パルミナ・・・。

“あの”箱に目を向ける。

ワケわかんない。

アタシは龍神サンに電話していた。

もはや5時前。

非常識極まりない時間なのは分かっていた。

だけど、“理性”より“本能”が先行していて。

もちろん出るワケが無かった。

“真壁の事務所は、事実関係はノーコメントとしている”

ワケわかんないよ…。

新聞に載っちゃうコト、真壁サン知らなかったの????

んなワケないよねえ。

“もしかしてからかわれてんじゃない?”

昨夜の関のあのセリフが過った。

また吐き気が込み上げてきた。

フツ、こういう時って吐き気じゃなくて涙だよねえ…。

“昨日の公演にも制服で来る程仲の良さをブログで散々アピールしていた wonderful ☆ world の彩沢陽依とはカモフラージュ？遊び？だったのか！？”

やっと涙が出てきた。

だけど、じんわりとだけ。

新聞記事で“遊ばれてたのか”なんて書かれてるにも関わらず、じんわりとダメなんて、

感情コントロール出来なさすぎじゃないの、アタシ。

何だろ、この感情…。

悔しい？

悲しい？？

怒り！？

ダメだ、何も思い付かない。

何をするわけでもなく無気力なまま窓の外を眺めるコト数時間。

ケータイが鳴った。

モトさんからだ。

「朝早くに悪い！テレビ見たか？」

電話の向こうのモトさんの声はかなり焦っているように感じた。

まだ6時前！？

かなり長い時間が過ぎた気がしたのに。

どうやらモトさんの声が起爆剤だったようだ。

アタシの中の涙のダムは、相当貯まっていたようで、モトさんの声
がきっかけで決壊し、尋常じゃない程の量の涙が出てきた。

コンビニで新聞を見つけて読んだことを泣きじゃくりながら話した。

昨日のコトも。

「分かった。今すぐこっち来れるか？学校には連絡するから。しばらくこっちにいる。色々面倒なコトになりそうだから。」

無気力プラス、思考停止中のアタシは、

モトさんに言われるがままケータイを親に渡し、モトサンが親に説明してくれている間に簡単に
出掛ける準備をして、

出勤ついでのパパに駅まで送ってもらい、1人東京に向かった。

1人で東京行くのって、初めてだ。

いつも隣に必ずいるハズの関がない。

無性に寂しくなって、それでまた泣けた。

家に置いとくのが何となくイヤだったから、かと言って持ってくるのもイヤだったけど、とりあえず持ってきた指輪はバッグの奥底に隠して。

駅までの移動中、関にはメールした。

モトさんが連絡しただろうけど、いつも一緒に登校するから。

新幹線の車内で、真壁サンから着信が来たけど、出なかった。

出れないよ。

何度も何度も掛かってきた。

それでもアタシは出なかった。

出たくないよ。

寝てないせいか、気が付くと寝ていたようだ。

目が覚めたのは東京に着く寸前だった。

ケータイを見ると、大量の着信とメールが来ていた。

関からも。

“「オレも後で向かう。待ってろ。」”

“待ってろ”のコトバに、思わず人目もはばからず涙を堪えたせいで、顔が歪んだ。

こんなに多くの人の前でさすがに泣けないからグツと堪えて。

“待ってろ”・・・

関 いいい…。

昨夜のコトが時系列に蘇る。

放課後2人で真壁サンのコト話しながらの帰り道、真壁サンから連絡が来て、

仕方無くサヨリを連れてライブに行つて。

真壁サン、凄く喜んでくれたのは何だったの!?

やっぱりからかわれてた!?

ほんのちよつと真壁サンに気持ちが悪く動き掛けてたのに…。

自分が馬鹿らしく思えてきた。

歩きながら、前が見えないくらいうつむいて泣いた。

コートのフードを深く被つて。

泣いてるトコロをマスコミに見つかったら、

“遊ばれていた彩沢陽依、失意の帰京”

とか書かれちゃうんだろうか…。

だけど今は、

そんなコトどうでも良かった。

改札口を確認する為にふと顔をあげたら、

迎えに来てくれてたモトサンが目に入った。

また涙が込み上げてきて、またフードを深く被った。

「彩沢サン！」

隙を突かれて、張っていたマスコミがスッ飛んで来た。

すかさずモトさんが前に入ってくれる。

さすがに顔は上げれないけど、声を聞く限りでは3人くらいだろうか。

カメラのフラッシュの光や音もして。

「真壁サンの御相手は実は彩沢サンなんじゃないですか？」

あゝああ??????

笑えないギャグ言うねえ。

「彩沢とは何もあります。全くの無関係です。」

モトサンが必死に弁明してくれる。

「入籍のコトは御存知でしたか？」

「真壁サンとはお付き合いしてたんですか？」

んなワケないでしょ!!

ココロの中では鋭く突っ込むけど、無言で首を横にだけ振った。

「今の心境は？」

次から次へと質問が容赦なく飛ぶ。

足早に駅を出る。

出るとすぐ、タクシーに乗り込んだ。

「事務所前にもいるだろうけど、とりあえず事務所に行くか。」

力なく頷く。

何でも良かったから。

ケータイを見ると、また大量の着信とメールが来ていた。

着信のほとんどが真壁サンだったけど、龍神サンからも来ていた。

電話に出ないからか、メールもくれていた。

“電話出れなくてゴメン。大丈夫か？”

たったそれだけだったけど、また泣けてきて。

“今東京です。とりあえず事務所にいます”

とだけメールした。

途中でいつもの移動車に乗り換え、案の定事務所前に張っていた十数人のマスコミを、目を見張るモトさんのカースタント並のドライブテクニックで何とかまいて、地下駐車場に入った。

ハリウッド映画さながらのカースタントに、アタシの心臓は超バクバクだった。

シートベルトしてても、思わずしがみついちやったもん。

『モトさん、芸能事務所じゃなくてカースタントやったら？もしかくは交通機動隊とか…。』

軽い息切れのアタシに、モトさんはただ笑ってごまかしていた。

(改) trouble

事務所のソファ―に座り、やっと一段落。

モトさんが入れてくれたココアを飲んで。

モトさんは離れたところで真壁サンのマネージャーさんと電話していた。

何となく聞こえてくる会話に、自分のマネージャーながらちよつと怯んでしまった。

口調はいつも通りなんだけど、どことなく物言わぬ殺気を感じたから…。

「記者会見、やって頂けますよね？」

「はい、当然ですよ。東京駅にもいましたよ。」

怖い…。

いつものモトさんじゃないよ…。

「平日なんで学校にも影響しちゃいますよ。今週は休ませます。ご家族にも迷惑が…」

“聴こえないフリ、聴こえないフリ…”

そう自分に言い聞かせて、モトさんの方に背中を向けて龍神サンに

電話してみよう。

「もしもしヒヨ???大丈夫か???今ドコ？」

龍神サ~~~~ン。

龍神サンはすぐに出てくれて、焦ったような口調だった。

そんな龍神サンの様子に、号泣まではいかないけどグズるアタシ。

『事務所です。モトさんと一緒です。』

今は、モトさんの声を聴いても龍神サンの声を聴いても、自然と涙が出てくる。

「とんだ災難だよなあ。オレに出来るコトあったら遠慮なく言えよ。」

『あゝりがどうございまゝずう。』

龍神サ~~~~ン。

嬉しくて号泣。

「関とかテツとか、他のメンバーは？」

『まだ会ってません。1人で来ました。』

とてつもなく優しく温かく、そして穏やかな龍神サンの声。

包み込まれるような声だ。

「寂しくないか？大丈夫か？」

ぴゃ↓↓↓↓→→→→

こうして龍神サンが話してくれてるんだから寂しいワケないじゃないのよ！！

『龍神サンのお陰で大丈夫です！』

「オレは何にもしてねえよ。真壁から連絡は？」

・・・・・・・・。。。

しばしフリーズ。

小さくため息をついて答えた。

『着信は何十回も来てますが、出たくないです。メールはありません。』

龍神サンパワーなのか、ちよっぴり強く出るアタシ。

「直接言いたってトコか。まあメールで済まそうとしないだけまだイイか。」

アタシ的にはメールだろうが直接話されようが、どっちもどっちだ。

「今すぐ駆けつけないけど、面倒なコトになりそうだから…。」

またアタシの暴走妄想モードが発動した。

“二股オンナは自身も二股を掛けていた！！”

“年の差恋愛はホンモノだった！！”

何でこんな時にまで妄想してんだよアタシ。

『お気持ちだけで十分です。ましてやこうして話し相手になって下さってるだけで満足です。』

涙を堪えて、出来る限りの笑顔で。

「ヒヨにはオレなんかよりはるかに心強い仲間が5人もいるからな。もし女子に困ったら海崎で良かったらいつでも言えよ。」

えっ！？…

“オレなんかよりはるかに心強い仲間が5人”？…。

龍神サンに勝てる人なんているわけじゃないのよ！！！！

『龍神サンより心強いなんて…。龍神サンの次です！！海崎サンの件は、確かに女子同士として助けてもらいたいコトは出てくると思いますのでその時は是非。』

ウチのスタッフ、女子率低くて…。

「いざという時頼りになるのは、やっぱり苦楽を共にした仲間だよ。いつもそばにいる仲間だよ。」

“苦楽を共にした仲間”・・・。

“いつもそばにいる仲間”・・・。

テツちゃん…、

まあクン…、

なおクン…、

センちゃん…、

そして、、、

関・・・。

「関は？一緒じゃなかったのか？」

うゝつつつ…。

龍神サンの“関”に、なぜか反応した。

『別です。何せ朝早かったんで。』

「1人でずっと寂しかったろうな。ゴメンな、電話気づかなくて。アイツらが来るまでオレで良かったら相手するからな。さしずめモトさんは対応に追われて大変だろうから。」

『あゝりがどうゝございゝまゝずうゝうゝ…』

仰る通り、モトさんは対応に追われっぱなし。

事務所の電話も鳴りっぱなしで。

いつの間にかテツちゃんが現れていた。

テツちゃんの登場に、また更にグズる。

口振りで“龍神サン”と伝える。

『ちょっと待って下さい。テツちゃんが来たんでテツちゃんに代わります。』

「おはようございます。こんな時間にすいません。」

いつも通りの冷静なテツちゃん。

笑顔や神妙な顔で龍神サンと話す。

手持ちぶさたのアタシはテレビをつけてみた。

時間的にこの話題をやりそうなのは1番組ダケ。

ガッツリ真壁サンネタで。

放心状態でテレビを眺めていた。

“「お相手の女性はもう妊娠6ヵ月で、入籍したのはだいたい妊娠が発覚したあたりのようですのでデキ婚と言うコトになりますね。」

”

ふうん。

アタシ、傍観視。

“「wonderful☆worldの彩沢サンとはやはりカモフ

ラージュだったんでしょか…。」

涙は出なかった。

もうそれすら超えていた。

今日は元々テツちゃん達在京組は仕事で事務所に集合だったようで、みんながちらほら事務所スタッフに交ざって出勤し始めてきた。

みんながみんな、“「大丈夫!?’」” って、心配そうに声を掛けてくれる。

それに対してアタシは“「ゴメンなさい」” って謝って。

入ってくるの、大変だったろうから…。

メンバーだって質問攻めにあっただろう。

スタッフさん達もきつとガンガン電話対応に追われるだろうし。

『おはよう。』

涙声のまま。

「大丈夫か?」

「真壁からは?」

「災難も災難だよな…。」

みんな口々に声を掛けてくれる。

「真壁、確実に龍神サンを敵に回したな。ギョーカイから干されんじゃね？」

恐ろしいコトを恐ろしい顔で言うのはセンちゃん。

・・・んっ？

もしかして???・・・

「パルミナなんて、高く売れんぞ？」

ちよっぴりニヤけ顔で言うのはまあクン。

「マスコミに指輪のコト言えよ。龍神サンの力がなくても確実に潰れんぞ!？」

とセンちゃん。

『何で知ってんの!? 関?』

声が裏返ってしまった…。

あのヤロー————!!!

「メチャクチャ怒ってたよ、アイツ。すげえ悔しそうだった。」

なおクンのコトバに、関の顔がアタマの中にふと浮かんだ。

『言わないよ。』

関の顔が浮かんだまま、テレビに向かって呟いた。

お相手の方が妊娠してんだし、

別にツブす気無いし、

アタシから言ったら益々面倒くさそうだし。

「じゃ、悪いけど行くワ。もう少しで関来るから、それまでちよつと1人になるけど待ってるな。」

みんな仕事にいつてしまった・・・。

関もまだだし…。

事務所のスタッフさん達しかいなくなっちゃった…。

アタシは1人、自分のブログやHPに來た大量のコメントをチェックし始めた。

もの凄い数だった。

みんなの優しい温かいコメントは、さすがに泣けた。

また真壁サンから着信だ。

もちろん出ない。

間もなくメールが来た。

“今から記者会見するから見て欲しい。”

記者会見・・・。

少ししたら、情報が入ったのか、一斉にマスコミが散っていった。

“「速報です。真壁サンが緊急記者会見を行うと言うコトです。後程会見の様子をお伝え致します。」”

テレビでも言ってるよ。

情報、早つつつ!!!

わずか数分だよ？

凄いな…。

「記者会見の前にコメント出すぞ。ヒヨ、ブログ書けるか？」

事務所の社長が言い出した。

突然の発言にメチャクチャ戸惑う。

“私彩沢陽依は、今回の報道は全く知りませんでした。私としても突然の報道に大変驚いているトコロです。心からお2人と産まれてくるお子様の末永いお幸せを願っております。”

とりあえず、マスコミ用に事務所のみんなで考えて。

“こんなもんでしょ”

ってコトで。

へタなコト言って騒がれるのも面倒だしね。

“たった今入った情報です。彩沢サンサイドからコメントが届きました。”

生放送って凄いな…。

情報早すぎだよ。

そうだっ！ケータイに来てるみんなからのメール、返信しなきゃ。

また新たにメールが来ている。

“何か買ってくか？”

関からだ。

そう言えば昨夜の夕飯からまだ何も食べてなかったな、アタシ…。

“ありがとうございます！お願いします。”

即レス。

こういう時の優しさって、結構くるよね。。。

メルチェックの後、みんなからのコメントを見てたら落ち着いてきたから、ブログにコメントを載せた。

“みんなからのたくさんさんの温かいコメント、泣きながら読んでます。”

コメントを打ってるそばから嬉し泣きしちゃう。

“今回のコトはホントに全く知らなかったコトで、昨日のライブにもご招待頂いて行ってきたトコロで、メチャクチャ驚いています。混乱を防ぐため、朝早くモトさんに呼ばれて東京に来ました。アタシにはこんな心配してくれるかけがえのないたくさん人達がいるコトを実感できて幸せだから、全然大丈夫です。心配しないで下さい。ホントにご心配ご迷惑をお掛けしました。多くのみんなに心の底から感謝します。ありがとうございました。陽依”

更新！っと。

“オマエ相変わらず巧いよな。さすがワンワのフロントマン。すらすらこんなに出て来ねえよ。”

関が、エラく感心してる。

反応早すぎだろ。

関もみんなからのコメント見てたのかなあ。

“素直な気持ちを表してるだけだよ。”

ちよっぴりテレながら即レス。

「おはようございまあゝす。」

怒りながら関が登場。

「しかしムカつくなあ!!」

まだ怒ってるよ…。

まあこの件でアタシがどんだけ悩んでたかを唯一知るのが誰だろう
関だからね。

「何が“ホンキだから”だよ!フザケんたっての!!」

こんなにガチで怒ってくれる関に、アタシはまた嬉し泣きました。

「ウチの大事なフロントマンをコケにして生きていられると思うな
よ。」

おいおい関クン???

『そんな大げさな。』

アタシ、苦笑い。

「少なくともウチの事務所とv i v i e nを敵に廻したんだから音楽業界は難しいだろうな。」

何なのコイツの様子。

どっかの街角ジャーナリストのオッサンみたいだよ？

腕組みなんかしちゃって。

「指輪のコトバレたらノックアウトだろうな。」

今度は悪代官みたいだよ。

ホントに何なんだ、コイツは。

ん？メールだ。

龍神サンだ。

“まだ事務所か？今から行くから。”

えゝええええ？？？？？マジスカあああああ！！！！！！！

一気にテンパる。

『ももももトさああああん！！！！！！』

フロア内に響き渡りそうなくらいの大声で叫んだ。

関がしかめっ面でアタシをにらむ。

「いねえだろ。」

冷たすぎる突っ込み。

そうだった。

『りゅ、りゅりゅ・・・』

ダメだ、テンパりすぎてカミまくってる。

大きく深呼吸して。

『今から龍神サンが来るってええええええ!!』

周りのスタッフさん達がざわつく。

手を止める人も。

そりゃ、そりゃ、そうだ。

「あいよっ。」

えつつっ? それだけ!?

何なの?? あたかも予想していたかのような、何ともあっさりしたお返事の社長。

慌てる様子もなく。

それどころか、誰かに電話してる。

モトさんかな。

龍神サン・・・。

超ドキドキしちゃう。

顔がゆるんじやう。

「オマエさあ…」

ニヤニヤしてるアタシに、ぼそっと関が切り出した。

「真壁にちゃんと気持ち言わなくていいのか？オマエ散々振り回されたんだぞ？あんなに悩んだり。」

何？メチャクチャ神妙な顔しちゃって。

もしかして当の本人より怒ってる？

『アタシのコトなのにそんなに怒ってくれてありがとう。大丈夫。言わないよ。何も言わない方がイイと思う。』

関の気持ちがホントに嬉しくて、とびきりの笑顔で答えた。

「こんなに迷惑掛けられてんだぞ？学校も休まなきゃいけないし！

！
」

食い下がらない関に驚きを隠せない。

『こうして怒ってくれる関やモトさんがいるからアタシは満足だから。』

黙ってしまった関。

『正直疲れた。』

アタシの笑顔に、関は何も言い返せないようだった。

『龍神サ〜ン！』

Vivienのメンバーが勢揃いでやって来た。

やっと収まった涙がまたうつすら出てきた。

「大丈夫か？ ったく、オレの大事な妹を泣かせた罪はデカイぞ！！」

龍神サンまで……。

「コイツ、メチャクチャ怒ってんの。」

と雷神サン。

「だいたいパルミナなんて、コイツにケンカ売ってる以外のナニモノでも無いもんな。」

え、つつつつ?!?!?!?!?!?

凱サンまで…。

龍神サン、みなさんに話したんだね…。

それだけご立腹だったんだね…。

みんなの気持ちに痛い程に感じる。

みんな“物凄く気の良い兄ちゃん”ってカンジがして、メチャクチャ落ち着く。

ステージの上とは、まるでイメージが違う。

正直、パルミナの意味は気になるな。

やっぱり公言した方がイイのかなあ…。

いや、言わない方がイイんだよね…。

関が買ってきてくれたパンやおにぎりや、龍神サン達が持ってきてくれた差し入れのケーキをみんなでワイワイ食べていたらテレビで記者会見が始まった。

みんな急に静かになる。

スタッフさん達もみんなテレビの前に集まって。

まるで街頭テレビみたい。

アタシは正直、見ていたくなかった。

だけど逃げちゃいけないって思えたから、覚悟を決めた。

力が入りすぎてグーになっていたアタシの手を、龍神さんの大きな手が包んでくれた。

心臓、超バクバク。

でも、、心地好かった。。。

龍神サン・・・。

ずっとこのまま離れたくなかった。

やっぱり龍神サンは偉大だよ。

“好き”とか、“愛してる”ってコトバでは表せないよ。

あまりにも大きすぎるよ。

まずは真壁サンの口から詳しく説明がされた。

入籍の事実、お相手のコト、妊娠の事実について。

アタシはただ聴いていた。

真壁サンの発言は、新聞に載っていた通りの内容だった。

ビックリだったのは、

お相手が局アナさんだってコト。

イッキに会場内がざわついた。

同じ年で局アナって…、

わずか2年目サンじゃないのよ!!

“「彩沢サンのコトにつきましたは…、」

来たっつっつっつ←←←←

思わず固唾をのむ。

しかも何故か息を止めてしまう。

“「wonderful☆worldのボーカルとしての彩沢陽依サンを、今までもこれからもずっと好きでいたい気持ちに変わりはありません。このコトについては、妻も理解しております。」”

「あゝあゝ!?!」

vivien全員、ガラの悪い兄ちゃんになってる。

眉もつり上げて。

「何調子イイコト言っちゃってくれちゃってんの!?!」

マジギレの流雅サン。

さすが元ヤン…。

迫力ありすぎて、ビビらずにはいられない。

vivienのメンバーは5人全員が、全員バリバリの元ヤンなコトで有名。

ボーカルの龍神サンとギターの雷神サンが同じ暴走族で、もう1人のギターの凱サンが1人別のグループで、ベースの風雅サンとドラムの流雅サンが一緒だったらしい。

ファンならずとも、かなり有名なハナシ。

だから、“やり直せない人生はナイってコトをオレらが身を持って証明してる”って、常々言ってるくらいで。

その名残なのか、今の5人はみんなオーラからしてすでに怖い…。

現役時代が予想出来そうな程に。

『でもこの女子アナさんて、music palaceのアナさんですよねぇ?』

アタシのセリフに、メンバー全員声を上げた。

「あゝっ!」

「ああゝ!」

「そうだ!!」

「はあゝ…」

「へえゝ。」

みんな腕組みしてる。

music palaceは、真壁サンとお相手の女子アナさんが司会をしてる、深夜の音楽情報番組。

ウチらもデビュー直後に出させていただいたコトがある。

“「ズバリ共演がきっかけですか?」”

当然の質問が飛ぶ。

“「はい。」”

はあ…

「やっちゃまったな、真壁先生。」

呆れ笑いの凱サン。

アタシにはイマイチ意味が解らなかったけど、

みんなハナで笑っていた。

“「彩沢サンに贈った指輪も奥様と同じモノですか？」”

えゝつつつつ?????

呼吸が一瞬止まった。

時も止まった。

ウチらの空間の空気が一瞬にして凍りついた。

“「違います。」”

うつむき気味に、聞き取りにくいくらいの小声で答えた。

“「彩沢サンにも指輪を贈ったんですか？」”

“「ただアーティストとして好きな方に指輪を贈ったんですか？」”

“ 「しかもパルミナですよねえ。」 ”

“ 「そのコトは奥様はご存知なんですか？」 ”

容赦ない質問攻めに、絶句する龍神サン達。

真壁サンも硬直。

顔が思いつきりひきつっている。

もちろんアタシも…。

何で???

どうしてマスコミが指輪のコトを知っているの?????

「オレじゃねえぞ？」

誰も何も言っていないのに関がメチャクチャうろたえている。

『アンタが犯人ならアタシはアンタを死んでも許さないよ。』

低い声で呆れてアタシが言った。

Vivienの皆さんも微笑みながら頷く。

「芸能記者の根性って、怖っっっっ！」

雷神サンのコトバに周りの全員が大きく頷いた。

確かに。

身内は自分から言うワケないもん。

「誰かリークしたか？」

流雅サンが一言。

「ひーちゃんと龍神のドライブだって、よく撮ったよな。」

風雅サンのコトバにも、みんな頷く。

「まあそこそこのカネになりそうなネタではあるよなあ、どっちも。」

雷神さんのコトバに、アタシはゾツとしてしまった。

テレビの向こうではずっと黙る真壁サンの姿が。

会場内がざわついている。

何も言えないでいる真壁サンに、次から次へと容赦なく質問が飛ぶ。

事務所の電話が再び騒がしく鳴り出す。

どうしよう・・・。

強く手を握りしめてしまっているアタシ。

ダメだっっっ!!!

見てられない!!!!!!

アタシは事務所を飛び出した。

「ひよ!?!」

驚くみんなの声にも耳を貸さず…。

少年よ大志を抱け!!

.....

飛び出したのはいいケド、、、

どうしよう.....

居ても立ってもいられなくて、指輪を持って飛び出したはいいモノの...。

どうすんだ？アタシ。

会見て、ドコでやってんだろうか。

アホだアタシ。

無計画にも程がある。

「何やってんだよ!!」

関が追いかけてきた。

思いつ切りバツの悪さ爆裂のアタシ…。

『真壁サンのトコ、行かなきゃ。』

アタシの一言に、関は思いつ切り眉をつり上げた。

「オマエ、バカだろ。」

容赦ない関のコトバ。

わかってる…。

わかってるよ!?

だけど、行かなきゃ。

『ケリつけなきゃ!!』

あれ?

あの車って…。

「行くぞ!!」

えっ? やっぱり??? ……

龍神サン達が、自分達の車で現れた。

「ここから真壁の事務所までは車ならすぐだ。関も乗れ!」

龍神サン……。

鳥肌が立ち、とたんに涙が込み上げてきた。

視界がぼやける。

『どうして・・・？』

泣き声で。

「早くしないと会见終わるぞ？」

凱サンに急かされ、関とvivien号に乗り込んだ。

高級国産ワゴン車vivien号、

初乗車！！！！！！

「いいんですか！？コイツのやろうとしているコトは火に油を注ぐようなモンなんですよ！？」

声を荒げる関に、vivienのメンバーはみんなただただ笑顔で交わす。

「そうは思わねえけど？」

風雅サンが含み笑いで言った。

「じゃなかったら援護しねえよ。」

流雅サンも。

『どうしてわかったんですか？』

まだうるうるしてる。

「妹だもん。」

何気ない龍神サンの一言に、アタシの理性は壊滅寸前だった。

「さすがに真っ先に気付いたのは龍神。すっげー嬉しそうに降りてきてたよ。」

雷神サンが教えてくれた。

関は仏頂面でアタシをにらんでいる。

「オマエ、バカだろ。」

関の目が怖い…。

「まあまあ関クン、怒るなよ。面白いコトになるから大丈夫だよ。」

何やらイヤらしさすら感じる凱サンに、関は困惑の様子。

テレビをつけると中継は終わっていて、スタジオトークに変わっていた。

「終わったんじゃないですか？帰りましょ。」

気が気じゃない関。

「中継が終わっただけだろ。まだやってるよ。」

運転席の、ローデীর半沢サンが言った。

『皆さんにご迷惑お掛けして申し訳ありません。半沢サンにまで…。
』

ホントに申し訳ないよお。

「みんな迷惑だなんてこれっぽっちも思っていないですから気にしないで下さいよ。ねえ！」

半沢サンのコトバに、vivienの皆さん全員が超笑顔で頷いてくれた。

またしても目頭が熱くなるよ…。

事務所の前の玄関にいた警備員が、ウチらの顔を見て啞然としていた。

「中に話通しといして下さいねえ。失礼しまゝっす。」

啞然とする警備員をヨソに、飄々としながら半沢サンは通過。

さすが大御所。

スタッフも堂々としている…。

事務所の前にベタ付けしてくれた。

みんなに背中を押され、大きく深呼吸して車を降りた。

早速受付に話が行ったらしく、受付のお姉さんが立って待ち構えていた。

「いらっしやいませ。」

かなり困惑気味の受付のお姉さん。

『おはようございます。wonderful☆worldの彩沢陽依です。会見の会場って、何階ですか？』

ドキドキはしていなかった。

むしろ穏やかだった。

お姉さんにも冷静に挨拶。

「に、…2階の会議室でございます。」

受付のお姉さん、あたふたしてる。

アタシが殴り込みに来たかとも思ってるんじゃないかなろうかってくらいに。

階段を昇っていると、真壁サンのマネージャーさんがモノ凄い勢い

で駆け寄ってきた。

「陽依ちゃん!!!!!!!!!!」

鬼気迫る声。

『おはようございます。ケリつけに来ました。』

満面の笑顔で。

自分のコトながら、若干恐ろしかった。

この、心臓に毛が生えてるんじゃないだろうかって程の度胸が…。

「ケリって…。これ以上もっと迷惑掛けるかも知れないよ?」

必死に止めようとするマネージャーさん。

でもヘンに冷静なアタシは思った。

“これ以上?…?”

って。

さっきの龍神サン達ばりに、眉毛を思い切りつり上げて。(ココロの中でネっ!)

これ以上なんてないだろ。

アタシが学校休んで、事務所にマスコミが押し寄せて、龍神サン達

にも迷惑かけて、

これ以上何があるってのよ！！！！！！！

ココロの中ではそう思いながら、アタシは構わず突き進んだ。

『まだ会って、やっていますか？』

背後のマネージャーさんに向かって。

「イイの？ホントに…。」

かなり弱気なマネージャーさん。

『大丈夫です。』

後ろを見ずに。

「まだやってるよ。なかなか静哉がはっきり言えなくて。」

ふう…。

情けないなあ。

天下の真壁静哉はそんなにへたれだったの！？

『じゃ、ちょうどイイですねっ。』

ドアに手を掛けたら、マネージャーさんが開けてくれた。

「ゴメンね…。」

弱々しく、一言そう呟いて。。。

アタシはドアが開く瞬間、大きく息を吸った。

やるしかない!!!!!!

ココロの中で拳を突き上げて。

アタシの登場に、会場全体がどよめいた。

「ひー・・・、ちゃん…」

顔面蒼白の真壁サン。

アタシも真壁サンも大量のフラッシュを浴びてる。

真壁サンの隣に座っていた真壁サンの事務所の社長さんが、慌てて席を空けてくれた。

さすがにほんの少しダメでも怯むワ…。

お礼(?)に軽くアタマを下げてみる。

アタシは硬直する真壁サンの横で立ち止まり、息つく間も無く指輪を突き出して言った。

『やっぱりアタシには受け取れません。まだ高校生ですし。せつかくですがお返しします。売ったトコロでマスコミの方にスクープさ

れるのも厄介なので直接お返しします。』

アタシの迫力（？）に圧倒されてるのか、会場の空気が凍り付いている。

ココで怯まないのが残念なアタシ。

さらに畳み掛ける。

『よってたかって大の大人が1人に集中攻撃はいかなモノでしょうか。言いたいコトも言えないんじゃないでしょうか。これ以上はイイ大人のするコトじゃないと思います。アタシは自分の意思でココにいます。今回のコトについてはフタマタだなんてちっとも思いません。真壁サンはまだ数少ない芸能界の親しくさせてもらっている方なだけですが。そもそも奥様はもう身重なんです。奥様に万が一のコトがあったら大人として責任取れますか？』

社長のトコロにあったマイクで言ってやった。

ざわつく会場内。

『失礼しました。』

そう言ってアタシはドアに向かった。

真壁サンのマネージャーサンがドアを開けて待っていてくれた。

「ありがとう…。」

眉を細めて。

アタシは笑顔で挨拶して会場を後にした。

「あっぱれ！」

ロビーでみんなが待っていてくれた。

アタシはたまらず龍神サンに駆け寄ってしまった。

「良くやった！あっぱれだよ！！」

龍神サンの顔は見れなかったけど、声は神憑りの温かく聴こえた。

安心感からか、全身の力が抜けて、ヘタリ込んでしまった。

「撮らないンスか？」

えっ！？

雷神サンが誰かに言った。

振り向くと、アタシの後ろに気まずそうな数人のマスコミがいた。

「撮ってイイッスよ？訴えないッスから。むしろ使っちゃって下さい。」

笑顔の凱サンにマスコミは怯んだようで、メチャクチャうろたえて逃げるように去って行った。

何ですと？

呆氣に取られるアタシを見て、何故か Vivien のメンバーがハ
イタッチで大喜びしている。

「社長も大喜びしてたよ。龍神サンに代われるか？」

ワケが分からない…。

言われるがまま龍神サンに渡した。

「お疲れ様です。」

モトさんと話しながら龍神サンはアタシの手を引っ張って、アタシ
を立ち上がらせてくれた。

『ありがとうございます』

アタシが立ち上がると同時に、みんなが歩き出した。

「今夜はハデに祝ってやりたいんですけど、イイですか？」

龍神サン、何か言ってる。

アタシはキョロキョロみんなの表情を確かめた。

みんな、どう見ても笑顔だ。

関以外は。

「オマエ、自分が何をしでかしたか解ってんのか？」

かなりお怒りの関。

「まあまあ関クン、そう怒るなって。」

流雅サンが関のアタマを軽く叩く。

「今頃ワンワ一のHPもヒヨのブログも事務所も大変なコトになってるから見とけ。」

したり顔で言う風雅サン。

アタシも関も全くついていけない…。

「クレームでじゃなくてですか？」

関の発言に小さく頷く。

「コレがこの世界の面白いところだよ。」

会話を終えた龍神サンがアタシにケータイを渡しながら言った。

「しかし、やっぱりスゲェよヒヨは。真壁や龍神じゃなくても惚れ惚れするワ。」

ビックリするコトを平気で言うのは雷神サン。

「だろ？さすがオレが認めたヤツだ。」

ドキ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓→→→→→→→→→

だからどうして龍神サンはこう言うコトをサラリと言っちゃうのよ！！

勘違いしちゃうよ…。

事務所に戻ると、騒然としているようだった。

「おうヒヨ！！お帰り！」

・・・どう見てもご機嫌な社長が迎えてくれた。

何だココは…。

アタシ、別の世界に来ちゃった????

アタシのしたコトは、マスコミにケンカを売ったんじゃないの???

ワンワ―自体に悪影響なんじゃないの?

「反響がハンパないぞ! インタビューのオファーやら何やらで、さつきから電話がなりっぱなしだ。」

ええええええ??? ??? ???

ぽっ・・・かぁ～～～ん。

アタマの中、真つつっ白。

「だから言っただろ? コレがこの世界の面白いトコだって。“桜の樹の下で”は益々とんでもないコトになるぞ。」

関が凱サンに羽交い締めに使われている。

「オレら、とりあえず行くワ。連絡する。」

そう言って龍神サン達は帰っていった。

『ありがとうございます!!』

アタシの声に、みんな振り向かず背中を向けたままで、ただ手を上げて消えていった。

カッコいい・・・

見とれて立ち尽くすアタシは、関の声で我に返った。

「ひー！！」

余韻、ぶち壊し…。

振り返ると関はパソコンに釘付けになっていた。

「見ろよ、コレ…。」

関が見ていたのはワンワ一のHPのBBSだった。

“ ひーちゃんブラボー！！ ”

“ 良く言った！！！！！！ ”

モノ凄い数のコメントが、

モノ凄い速度で送られてきている。

「こっちもスゴいわよ。」

隣のデスクでは、事務のスタッフさんが真壁サンのHPをチェックしている。

真壁サンのHPなのに、アタシの名前が濫立状態。

もちろん中には中傷的な意見もあるよ。

“調子に乗り過ぎ”

とか、

“出しゃばりオンナ”

とか、女子同士だから容赦ない。

でも、驚くコトに、絶賛の声もある。

“同じオンナとして、あの度胸に感服！”

とか、

“同じオンナとして見習わなきゃと思った。”

なんて。

恐れ多い限りです…。

「vivienサンのトコもスゴいよ!!」

別のスタッフさんがコーフン気味に。

龍神サン????

あゝつつつ!!!!!!

アタシはとっさにケータイをチェックした。

すごい数の着信と受信が。

関以外のメンバー、サヨリ、パパママ、学校の友達、バイト友達、とにかくすごい数。

自分のしたコトの重大さに、今更ながら驚く。

後悔はしてないんだけどお…。

メンバーからのメールは、みんな優しかった。

“お疲れさん”（なおクン）

“あっぱれ！！さすがはウチの看板娘！”（センちゃん）

“ばあゝつか！”（まあクン）

“ひよらしいよ。”（テツちゃん）

誰も怒ってない。

龍神サンのブログを見てみた。

“あっぱれ”

このタイトルはもしや…。

更新時間がちよつと前だし・・・。

“みんな見たか？我が妹、舎弟の勇姿を！！いやあ、我ながら鳥肌が立ったね。”

[illegible]

恥ずかしさMAX!!
→
→
→
→
→

“まあ、もちろんアレを悪く言うヤツはいるだろう。否定はしない。ただ間違ひなく言えるコトは、オレは完全に支持するってコト。手前味噌だつて言われたらそうかも知れないケド、批判するヤツに言つてやりたいね、”じゃあお前にはあんな度胸があんのか？”って。

龍神サン・・・○

涙がにじむ。

他のメンバーのブログも、みんな似たような感じだった。

“龍神が言い出すわけじゃなくて、誰も何も言わずに自然とワンワンの事務所に向かっていった。”

コレは雷神サン。

“アレ、ガチだからね。台本とか、打合せ一切なしだから。”

凱サンも。

“ ひーちゃんを悪く言うヤツはオレが許さん!! ”

流雅サン、

“ ビビったね、マジで。 ”

風雅サンも…。

みんな、移動中になのか、ちゃんと載せてくれてる。

すかさず龍神サンにメールした。

“ ありがとうございます。ありがとうございます。 ”

って。

それしか見つからなかったから。

“ 今日 は 1 日、とっても慌ただしかったです。実は真壁サンからパ
ルミナを頂いたのは昨夜で、そのコトで全然眠れないまま朝を迎え、
気晴らしに行ったコンビニで新聞を見てしまい…。何が何だか分か
らないままモトさんに言われるがまま東京に来て。まさに激動の 1

日でした。会見は事務所で関やvivienの皆さんと見ていました。マスコミに責められるばかりで何も言えない真壁サンがもどかしくて、無意識のウチに事務所を飛び出してしまっていました。“ケリをつけなきゃ！”と思っではみたモノの、追い駆けてきた関にメチャクチャ怒られました。でも、龍神サン達がすぐに車で来てくれて、察した龍神サン達が真壁サンの事務所に連れてってくれました。”

ブログとワンワ一のHPで経緯を説明した。

自分の気持ちも素直に打ち明けた。

“アタシ1人の身勝手な行動に、周りのたくさん大人の皆さんはとても温かく護ってくれました。社長もモトさんも、事務所のみんな、そして関以外のメンバーからも。あの会見の場であんなコトバが出たのは正直自分自身驚いています。今回のコトで、ワンワ一関係はもちろん、真壁サン、そしてvivienの皆さんのブログやHPにたくさん賛否両論のコメントが寄せられて、自分のしたコトの重大さを痛感しています。多くの皆さんにご迷惑とご心配をお掛けしてしまったコトを、この場を借りてお詫び申し上げます。大変申し訳ありませんでした。そして、たくさんの人達に最上級のありがとうを言いたいです。ホントにホントにありがとう！！”

“更新”
つつつと！

信じる者は救われる

夕方、真壁サンがマネージャーさんと共に挨拶に来た。

アタシはあえて立ち会わず、社長と何故か関ダケが対応して。

帰り際、

「これから応援してるよ。」

って、精一杯の作り笑いを見せてくれた。

『正直に答えて下さい。』

アタシは真壁サンを見据えて言った。

『パルミナは、ダイブラを下さった龍神サンへの挑戦状ですか？』

ホントは聞きたく無かった。

もしそれでそうだって言われたら、それはそれでイヤだから…。

でも、どうしても気になって。

「関クンにも聞かれたよ。関クンにはキツパリ否定したけど、そう言われればそうかもね。特別意識はしてないけど。どこかそう言う気持ちはあったかも。龍神サンにも挨拶に行くよ。龍神サンに勝てるわけないのにね。」

物凄く悲しそうな表情だった。

いつも見る明るい真壁サンとはまるで別人で。

『ありがとうございます。お幸せに!!』

どこことなく小さく見える真壁サンの背中に向かってアタシは深々とアタマを下げた。

オニ社長に容赦なく仕事を入れられ（今回のコトについてのインタビュー2件）、メンバーと合流したのは龍神サン達がホントに開いてくれた食事会だった。

今日は朝から怒濤のような1日だったな…。

やっと落ち着いたらドツと疲れが来たよ。

「お疲れ様！」

壁に寄りかかってボーッとしていたら、カクテルグラス片手に海崎サンがやって来た。

“食事会”とは言っても、それは飲めないアタシと関の手前の、あくまでも口実で、実際はワンワールとviven合同の飲み会。

男子は全員イイ具合にご機嫌。

飲んでないハズの関も、飲んでんじゃないか??? ってくらいに盛り上がってるから、ちょっと輪から外れてみた。

『お疲れ様です。』

カクテルが似合うなあ…。

思わず見とれてしまう。

「災難だったわね。あんなに散々アプローチ掛けてたのにね。サイテーなオトコね。」

海崎サンに言われると、無性にそう思えてしまう…。

確かに、“じゃあアレは何だったの!?” って、今さらだけど、落ち着いてみれば思うよね。

告白された時からのコトを考えると、振り回されたとは思えなくなる。

「でも、陽依ちゃんカッコよかったよ。良くやったわね!」

海崎サンの神憑りの笑顔は、神憑りの癒し効果もある。

何だかココロの中のモヤモヤがスーッと消えていく。

『みんなそう言ってくれますけど、イマイチ理解出来ません。アタシのしたコトは、マスコミにケンカを売ったんじゃないですか?』

海崎サンはクスツと笑って答えてくれた。

「確かにそうかもね。だけどオンエアされたコトにより、事実をねじ曲げて報道するコトは出来ないでしょ？ たくさんの証言者がいるんだもの。」

ふむふむ。

頷くだけで、黙って聞き続けた。

軟らかく、ふんわりと包み込むような温かい海崎ワールドにのめり込むように。

「しかもあんなに反響があるくらいだから、テレビ局にも相当問合せが行ってるハズよ。そしたら取り上げないワケに行かないし、むやみやたらに悪くも言えないでしょ？ そしたら局によっては真壁静哉の出来婚騒動よりも陽依ちゃんのコト取り上げるでしょ。」

そうか？

ちょっと顔を曇らせる。

少なくとも今日の夕刊と夕方の芸能ニュースは真壁サンとお相手の女子アナメインだったぞ？

1紙だけ

“超大型新人はお相手も超大物だらけ！！”

って違った視点で書いてあったくらいで。

まあそう言う内容は書かれちゃうだろうね、当然…。

「これだけの反響があるんだから、メディアだってほっとけないでしょ。ってコトは、明日には真壁静哉のコトより、きっと陽依ちゃんのコトが取り上げられるんじゃない？」

確かに、、、

明日も容赦なく仕事が入ってる。

学校休んでるってのに社長ってばメチャクチャ喜んじゃって、今日来たオフアー出来る限り受けちゃったから…。

関は明日の朝イチで帰らされるけど…。

イイのか？アタシ、仕事してて…。

まあ関はともかく、アタシはほとぼりが覚めるまで事務所で預かってコトらしいから。

芸能界は分らない・・・。

何がどう転ぶかなんて、芸能界に限らず何にしても分からないモノだね。

イイ勉強になったよ。

「陽依ちゃんは好きな人いるの？」

!!

思わず衝撃のあまり、何かにむせそうになった。

何をいきなり言い出すんだ？海崎サンてば!!!!!!!!!!

酔ってる？

『いいいです。好きとは違う、偉大すぎる龍神サンがいますから。』

一瞬思い切り焦っというて、冷静に答える。

「龍神じゃダメなの？」

海崎サ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ココロの中のアタシ、砂浜で夕陽に向かって大絶叫。

何てコト言うのよ!!

酔っ払ってるな、完全に。

咳払いをして、深呼吸して答えた。

『龍神サンは龍神サンでしかないんです、アタシにとって。向坂龍二サンにはなれないんです。どんなに手を伸ばしても届かない、だけどいつもすぐそばにいてくれる、かけがえのない先輩なんです。LOVEでもlikeでもないけど、オンリーワンなんです。』

龍神サン達の輪を見つめながら。

ごくごく自然に言えた。

「アタシにはそう思える人がいないから良く分かんないけど、今のウチに恋はたくさんした方イイよ。音楽の幅も広がるしね。」

海崎サンの笑顔が神憑りの様に眩しかった。

『だからある意味、ストレートに直球でアタシに気持ちぶつけてくる真壁サンがめちゃくちゃ羨ましかったです。』

ちょっと遠くを見つめる。

「そっか…。陽依ちゃんならイイ恋出来るよ！」

海崎サンもどことなく寂しげな顔になっていた。

翌日――――

“ 真壁静哉のお相手は超人気アイドル女子アナだった！！ ”

スポーツ紙の一面には真壁サンの名前が見事に並んでいた。

お相手の女子アナさんも、自局の朝の番組で直接説明していた。

仕事は続けるけど音楽番組は降板するとのコトだ。

が、しかし！！！！！！

スポーツ紙の最終面や、一面の片隅にしっかりアタシの名前が…。

“龍神に続き、真壁静哉もホレる超大型新人・彩沢陽依とは”

とか、

“「イイ大人のするコトじゃない」！！マスコミを一蹴！！！！”

なんて。

パパママ・サヨリにも迷惑掛かるんだろうな…。

昨夜連絡出来なかったから電話しとくか。

「陽依！大丈夫？？」

おとといの夜ぶりのママの声に、アタシはイッキに涙が込み上げてきた。

『アタシは大丈夫。それよりみんなに迷惑掛かる方が申し訳ないよ。職場や学校で色々言われちゃうね。』

涙ぐみながら。

「大丈夫よそんなの！それより陽依が心配よ。3人ともテレビ見て心配してるんだから。ちゃんと寝れた？ご飯は？」

我慢出来ずに声を上げて泣いていた。

『大丈夫だよ。ご飯は心配しないでイイよ、ちゃんと食べれてるから。アタシは全然平気。』

ママ・・・。

出来るだけこらえて冷静に話す。

「サヨリが猛烈に真壁静哉に怒ってたよ。“あんなオトコ人間じゃない！！”って。あんなにキヤーキヤー言ってたのにね。」

ママは笑いながら教えてくれた。

サヨリ・・・。

みんなの気持ち痛いくらい嬉しかった。

アタシにはこんなにたくさんの強い味方がいるんだ。

ヘコンでばかりいられないね。

誹謗中傷なんか負けてられるか!!

よし!!!!!! fightだ陽依。

夜。。。

アパートに戻り、ボーツとテレビを見ていたら龍神サンが電話をかけてくれた。

「オレのトコにも挨拶に来たよ。」

って。

ホントに行ったんだね…。

ちょっとビックリ。

「アイツ言ってたよ。」

えっ？

思い出し笑いしてる。

「関からもヒヨからも同じコト聞かれたって。」

まさか…。

「関には否定したけどヒヨにはホントのコト言ってたてな。アイツ、根っからの正真正銘の正直者なダメかもな。」

“正真正銘の正直者” ???

アタシにはイマイチ意味が分からなかった。

「オレに直接挨拶に来る時点で驚くのに、オレに対して対抗心があったってフツー正直に言わねえだろ。」

・・・。

黙って聴く。

「相手がいるのにヒヨに告白したりするのは許せないけど、ヒヨに對しての気持ちにウソは無かったってコトだろうな。」

龍神・・・さ、ん？

益々意味が分からないよ。

「オレに對抗心抱くってコトは、つまりジェラシーだろ？ってコトは、本気だったんじゃないかねえの!？」

じえらしい????????

嫉妬?????????

「ヒヨのコトホンキじゃなかったら嫉妬する必要ないだろ？興味本位ってコトも考えられなくはないけど、興味本位でパルミナはないだろ、いくら売れっ子でも。じゃなかったら完璧にオレにケンカ売ってるコトになるしな。」

関が言ってたコトを思い出した。

“からかわれてんじゃねえの？”

って。

さすが龍神サンはオトナだね。

“からかわれてる”なんて幼稚なコト想像する関とは大違いだよ。

って、当たり前か…。

20歳も違うんだもんねっ。

一緒にする方が間違えてんね！

それにしても、、

嫉妬・・・かあ…。

“龍神サンに勝てるワケ無いのにね。”

あの時の寂しそうな表情がしっかりと焼き付いてる。

後悔の表情にも見えて…。

“もしかしたら勝てるかも” って僅かにでも思ったってコト？

そう思うくらい人を好きになったコト、

無い・・・デスよお。。。

自分が何だか切なく感じるよ。

“今のウチにたくさん恋してた方がイイ。音楽の幅が広がる。”

海崎サンのコトバも同時に甦る。

“恋”かあ……

“恋”ねえ……

“人を好きになる”感覚、最近めっきりご無沙汰だな……。

“オナのコは恋をするとカワイクなるのよ!”

なんてコトも言ってたっけ、海崎サン。

“今のウチに青春しないでいつするのよ!”

とも言ってたっけ……。

“青春”……、かあ……。

“青春”て、

何だろう・・・。

アタシにとっての青春ってきつと、ワンワー一色なんだと思う。

学校行事よりも、練習やライブやバイトの方が思い出に残ってるものな…。

とことん、ワンワーづくめだったんだなあ。

そりゃ“恋愛”の“れ”の字のカケラもないよなあ。

修学旅行も遠足も、女子と一緒にだったし。

関とはまだそこまで仲良く無かったしね。

でも、

ワンワーが青春なんだとしたら、

いつも必ずそばにいたのは関だった。

アタシにとってのワンワに欠かせないオトコ。

関に限らず、テツちゃんに対してもまあクンに対してもセンちゃんに対してもなおクンに対しても恋愛感情を感じたコト、一度もなかったなあ。

メンバーは先輩としてしかみてなかったし、

関は音楽仲間としてしか見ていなかったし。

中学生の時はそれなりに好きな人いたけど。

そう考えるとこの3年間は、ホントに音楽漬けだったんだね…。

“好きな人”・・・

“viven”のボーカルの、

龍神サン———

くらいだったなあ。

恋愛か。

うゝあつつつ!!

ヤバひ!!!!!! 歌詞が浮かんで来たぞおおお!

アタシ、どこまでも音楽バカなのね…。

e n d l e s s s t o r y

v i v i e nのメンバーの皆さんの読み通り、

にわかには信じがたいコトなんだけど、

衝撃の事実・・・

w o n d e r f u l ☆ w o r l d

2 n d s i n g l e

桜の

樹の下で

1月・2月の売上・ダウンロード・有線リクエスト月間ランキング

2ヵ月連続で三冠達成!!!!!!

しかも、

ミリオンセラー突破

やつちやつたあああああ
・
・
・
・
・
・
・
・

まるで信じられない。

時期的にいろんなメディアで行う、“卒業生に聞く卒業式に歌いた
い・歌う曲ランキング”で、

どのランキングでも、

並みいる名曲を押し退け、

しかもこの時期、いろんなミュージシャンの方々が卒業ソングを出
す中、

1位になってしまった…。

あり得ないよ。

卒業式と言えば、名曲がたくさんあるじゃないのよ!!!!!!

そりゃ、“不朽の名曲を作る”って意気揚々と作ったよ!?

だからって、1位にならなくても…。

事務所には合唱用に編曲して下さいって依頼が殺到してるらしい。

ワケわからん…。

芸能界って、怖い…。

人生って、

何がどう転ぶか

ホントにわかんないね…。

お陰で仕事が一瞬、入っちゃって、

ココのトコロ全然学校行けてなかった。

やっと久しぶりに行ったら行ったで、アタシは担任からとんでも無いコトを告げられる。

“ 「代表答辞、頼むな」 ”

聞いた瞬間、思わず声が裏返ってしまっていた。

“ 『はああああん!?!?』 ”

って。

“「あの場であんな啖呵を切れるヤツに頼まないワケにいかないだろ。」”

“あゝああああん?!?!?!?!?!?”

まさか影響がここにまで来るとは誰が予想しただろうか・・・。

“『答辞って、フツー生徒会長がやるんじゃないの?!? イイの? アタシで…。』”

今までの通例として、歴代生徒会長が答辞をやって来た。

“「その生徒会長からのご指名だ。あの会見並の勢いで頼むワ。」”

何のこっちゃ・・・。

呆れる事態はソレに留まらなかった。

“ 「学校からの依頼で、サプライズでワンワ―でライブ演るから。」
”

ある日の移動中、モトさんから告げられた。

ここまで来ると、さすがにコトバすら出なかった…。

むしろクラクラした。

何なのよ一体…。

ワケが分からな過ぎ!!!!!!

“ バカじゃないの??? ”

そんなコトバすら浮かんでくるよ。

しばらく来てなかった学校は、周りまでもが環境が一変していた。

イヤミ女子達がイヤミ女子じゃなくなっていたり、

関のファンクラブが何倍にも増えていたり、

しまいにはアタシのファンクラブまで出来てしまっていて…。

アタシが知らない友人や、アタシが知らない近所の人が増えていた
り。

この状況に当の本人、さっつっつぱり着いていけない。

「すげえな。」

ある日の帰り道、関がボソツと呟いた。

『ホントだねえ。何だか別の世界に来ちゃったみたいだよ…。』

感情込み込みで。

「すげえな、オマエって。」

『はぁ?..?..?』

突っ込まずにはいられなかった。

「この反響、9割9分オマエだろ。」

関?

何てビミョーな表情してんの?

「音楽番組で演奏すんのはオマエのバージョンばっかだし。」

『ひがんでんの?』

って、軽く茶化してみたけど…、

「アホか。」

と、ただ一言だけ。

ヘンなヤツ…。

『でもさあ、環境変わりすぎじゃない?』

アタシが何の気なしに無邪気に言っても、

「ああ。」

ダケ。

話にノって来る気、全くナシ……。

何だ？ 一体…。

何か気になるなあ、関の表情。。。

『別にアタシがスゴいワケじゃないでしょ？ たまたまだよ。何気にしてんのよ、関らしくない。』

どんなにアタシがテンションをあげても、関はバックテンションのままだった。

「気にしてねえっての。ただホントに感心してるだけだよ。」

やっぱりヘンだ、こいつ。

『アンタさあ、ちょいちょい様子おかしくなるのヤメてくんない？』

わざとあおってみる。

「オマエがオマエじゃないみたいに思えてくるんだよ！！ グレイトロックの時もこの前の会見の時も。“コイツマジで3年間一緒だった彩沢陽依なのか”って。」

関？

アンタ、そんなコト・・・。

正直驚いた。

関の、“あの”レコーディングボイコット事件の後のブログで解決したもんだって、勝手に思ってたから。

『まだ治まっていなかったの？いつまでグチグチ言ってるのよ！！』
「たく情けないなあ。』

コレもわざと。

まあ半分以上呆れてるけどね。

「うるせえ！！」

ありゃ。

怒ってるよ…。

照れ隠しなのがモロバレだったの。

怒ってるよ純ちゃん。。。。

ったく！ちっさいオトコだねえ相変わらず。

アタシは、ふてくされたままの関の前に立ちはだかった。

「何だよ。」

『何だよじゃないよ！ちょっと来て！！』

素直じゃない関の手をつかんで、アタシは道路脇の土手に駆け上がった。

「何だよ！」

ビククリして動揺してる。

土手に駆け上がったところで関の手を離し、アタシは土手の斜面に座った。

「何やってんだよ。」

まだぶすくれてる。

『イイから座って。』

アタシは構わずに。

ったくこのオトコはどこまで情けないんだよ。

アタシは関が座ったのを横目で確認して、まっすぐ、川をみつめて話し始めた。

『アンタがどう思おうが、アタシはアタシだよ。何も変わってないよ。アンタがそう思うなら、ソレはアンタが変わっちゃったんじゃないの？』

・・・言い過ぎか？

いや、んなコタないよね。

『いつも言ってるけど、今のアタシがあるのは関のおかげ以外に考えられないし、今まで何度もアンタに助けてもらってきたコトは、何一つ変わらないよ？』

夕陽が水面に映って、とってもまぶしい。

『仲間がいるって、モノ凄くチカラになるんだよ？』

チラッと関を見た。

『アンタやメンバーがいてくれるから出来るって部分もあんの！！そもそも紅一点って、アンタ達には理解しがたいくらい大変なコトなんだよ？』

言いながらアタシはあるコトを思い出した。

『次に弱音吐いたらクビって言ったでしょ！しっかりしてよ。』

優しく言ってみた。

言えないでいる関に、見かねて思わず言っちゃった。

もう1つ思い出したコト。

『実はさあ…、』

ちよつとためらうなあ、さすがに…。

ホンの少し沈黙。

『アンタがメンバーで加入するって話の時、アンタには勢い混じりであんな偉そうなコト言っただけさあ』

やっぱり躊躇しちゃうな、あんなコト…。

でも、コレ以上ちっさいオトコになって欲しくないからね。

彩沢陽依、白状しまっす!!

小さく溜め息。

『一晩経ったら考えが変わっちゃってさあ。』

関はじつとアタシを見たまま黙っている。

『“今までずっと1人で頑張ってたのに何で今更メンバー増やすの？アタシじゃダメだったの???”って。』

言っちゃったあああ…。

関にだけは言いたくなかったのにな。

って言うか、今の関には逆効果かなあ。

でも続ける。

『テツちゃんの言ってるコトはもちろん理解出来たよ？現にまあクンとも意見があった時ってのはバンドとして間違った判断じゃないコトなのはバンド内の暗黙の了解だし。』

チラチラ関の表情を伺う。

凄くビツクリしてる。

『全国大会前にみんなの雰囲気が悪くなった時にアタシがブチ切れた時に、“ヤローだけでキツチリカタ付けるから”って言われた時だって凄く寂しかった。何となく疎外感を感じて。アタシだってちっさいオンナなんだよ、アンタだけじゃないの！！』

やっとまともに関の方を見る。

黙ったままの関。

耐えられずにアタシはなおも続けた。

『サヨリがさあ、メチャクチャキラキラしながら言ったの、“ワンワー無敵じゃん”って。ソレでふっきたんだ。ワンワーの為ならいっかって。』

沈む夕陽に向かって、アタシは関もこのコトで吹っ切れてくれるコ

トを祈った。

関の表情が少しダケしかめっ面に変わった。

んゝ、まだダメか？

仕方無いなあ！！

でも、無理無いかなあ…。

『サヨリがこうも言ってたんだよね。“他の、知らない人ならまだしも親友の関っちなんだよ？最強コンビ誕生じゃん！！”ってね。』

「最強コンビ？」

おっ！！やっと喋った！！！！

しかも笑ってる！！

良かったあ…。

ホッとひと安心。

『大体さあ、アタシの最初の頃のコト、覚えてるでしょ？』

思いだすだけで笑っちゃうよ。

『あんなハイレベルなメンバーに囲まれて、自信無かった時、励ましてくれたのはアンタじゃない。相方がアタシじゃダメだったの？アタシは、サヨリやボス達も言ってた様に、アンタならって納得出

来たんだから!!
』

わざとらしくふて腐れてみる。

関はフツと笑った後、ゆっくり立ち上がった。

「そうだな。」

ってダケ。

その後はしょーもない話をしながら帰った。

でもアイツ、

何であそこまで思い詰めるんだろう。

ちょっと尋常じゃないよねえ…。

いくらなんでも気になるぞ？

夜、龍神サンに相談してみた。

またしても龍神サン。

関とは言え、メンバーのコトだから、まずは第3者の龍神サンからかなと思って…。

「関の、オトコとしてのプライドなんじゃないかな、たぶん。」

ショックだった。

“オトコとしてのプライド”・・・。

また、“ヤローだけでキツチリカタ付けるから”の時と同じ様な、何とも言い様のない疎外感を感じた…。

「オトコってさあ、オンナには理解しがたいレベルのチンケなプライドで出来てんだよ。」

“オンナには理解しがたいレベル”

またコレか…。

カベにぶつかる度に“男と女の違い”が出てくるね。

「でも、何となく関の言うコトわかるな。」

えっ？・・・

龍神サンが？

オトナの龍神サンが、小僧関の言うコトが解るって？

「出逢った時は音楽のコトなんて何もわからなかったハズの同級生の女子が、気がついたら自分より成長してたなんて、オレでも戸惑うだろうよ。」

龍神・・・、サ、ン。。。

「身近な人が遠くに見えるって、結構キツイぞ・・・。」

そんなぁ・・・。

「だからと言って、ヒヨがどうこう出来る問題じゃないから、ヒヨは黙ってどっしりと構えてるしかないけどな。」

龍神サンは笑いながら言うけど、

アタシは正直ツラかった。

関がそんなにアタシのコトで思い詰めるなんて。

鳥肌立ってる・・・。

アタシの中では関は何1つ変わってなかったのに・・・。

“関は関”だったのに・・・。

“小僧関”だったのに・・・。

関とは違う意味で、軽くショックだ。

「お前らホントにいいコンビだな。」

えっ？

龍神サン、呆れてる？

今、ハナで笑わなかった？？

「羨ましいよ。」

何と！！！！！！！！！！！

天下の龍神サンに羨ましがられたっっっ→→→→→

おこがましいにも程があるっっっ！！！！！！！！！！

でも、

HPのカキコミにもアタシと関の関係は良く出てくるよね。

“ ホントに仲イイね。羨ましいな。”

とか、

“オレもひーちゃんみたいな相棒が欲しい”

とか、

“関！ひーちゃんはオマエに任せた！！”

とか。

ずっと笑い事にしてたけど、良く良く考えると恐ろしいよね…。

“関の分際で”

とかバカにしたりもしてたけど、

遠くに見えるのはアタシじゃなくてアンタだよ、

関・・・。

ウチらの、

バカやってふざけあって、

どうしようもないコトで笑い合えてた高校3年間で、

遠い昔に思えるよ・・・。

なんだかモーレッツにフクザツ。。。

いつまでも関は関だと思ってたんだけどね…。

“ヒヨが遠くに見える” って言ってるアンタが、

今、アタシには無性に遠くに見えるよ。

何なんだろう、アタシと関の関係って。

今までは親友だと思ってたけど、

“男と女を越えた” 仲だと思ってたけど、、

違ってたの???

precious

いよいよ今日は卒業式。

結構緊張するね。

とは言え、みんなもバカじゃないから、おおかた予想はついてるらしいよ。

“ワンワ―が揃う” って。

先生達も、ウチらも、キツパリ否定してるんだけど、

全く効き目無し。

朝から言われてるよ、

“メンバーは？”

って。

アタシも関も、誘導尋問に引っ掛からないように細心の注意を払ってるんだけど、全く無意味で。

午前中にセッティングは済ませておいてくれてるみたい。

まだ生徒が来ないウチに。

卒業式は午後から。

アタシと関は今日も一緒に登校した。

あれから関は何ともなかったけど、アタシがヤケに意識しちゃって…。

“好き”とかじゃなくて。

何だかとても良く分かんないんだ。

態度には出てない（と思う）ケドねっ！

「今日で最後だな。」

ボソツと関が言った。

『そうだね。』

何だかちょっとしんみり。

「3年間、ありがとな。」

なっっっ！！！！！

何てコト言い出すのよ→→→→

顔が紅くなっちゃうじゃないのよ。

『何言ってるの？コレからもよろしくでしょ。』

心臓バクバク…。

「高校生活は今日で終わりだろ。」

まあ、・・・そうだよね、確かに。

アタシは深呼吸して立ち止まった。

他の生徒がすれ違う中で。

『3年間ありがとうございました。』

深々とアタマを下げた。

「こちらこそ！」

関もアタマを下げる。

周りの同級生や後輩たちがジロジロ見てる。

さすがにすぐにまた歩き出したケドね。

「何やってんだ？」

呆れ気味の突っ込みがウチらに向けられていた…。

2人で顔を見合わせて吹き出し笑いしちゃったよ…。

「続いて、卒業生代表答辞…」

来たっつっ！！！！！！！

心臓が飛び出すかのような衝撃。

「3年F組、彩沢陽依。」

『はいっつっ！！！！！！！』

よしっつっ、行くぞ陽依！！

立ち上がり、大きく深呼吸して階段を上がった。

制服で隠れてるダイブラのネックレスに手を掛けて。

「ひよおおお！」

「ひーちやあああん」

ええええええ？？？？？？？？？？

まさかのコールに、アタシはイッキに緊張が緩んだ。

『この3年間、この学校で過ごせたコトを大変誇りに思います。』

若干うるうる。

ちよいちよい目が行ってしまう関の表情が落ち着く程に優しい。

『ですが正直な話、私の高校3年間の思い出は、バイトとワンワン漬けと言っても過言ではありません。』

ドツとざわつく。

呆れてる関の顔が見える。

『とは言え、もしもこの高校じゃなかったら、バイトももちろんワンワンも、思う存分出来なかったと思います。』

拍手が起きる。

・・・答辞って、こんな雰囲気だったか？

もっと厳粛なモンなんじゃないのか？

イイのか？コレで・・・。

でも構わず続ける。

『そして、“桜の樹の下で”もこの高校じゃなかったら、うまれなかったかも知れないです。』

「いよっ！！神曲！！！」

「1位おめでとう!!」

おいおい…。

何なんだこの雰囲気…。

先生達も黙認してるし…。

ま、いっかあ！

『だから、私はこの学校が大好きです。私はもちろん、皆さんがこの先もずっとつつじが原高校の卒業生だと、ワンワーと同じ高校の卒業生なんだと、胸を張って言えるように今よりもっと音楽活動に精進して参ります。この高校に関わる全ての皆様、3年間ありがとうございました。』

終了！

アタマを下げるとたくさんの拍手が鳴り響いた。

ちよっとうるうる。

「卒業生、起立！」

えっ？

元生徒会長の芦田クンが突然発した。

芦田クンの声に、3年生が全員立ち上がる。

戸惑うアタシと関。

卒業生の1人がピアノに向かった。

・・・ま、さ、か???

イントロが始まった瞬間、鳥肌と同時に涙が止めどなく溢れてきた。

“桜の樹の下で” 合唱V e r. だ…。

そんなあ…。

いつの間に？

涙でみんなの顔が見れないよ。

こんな段取り、聞いてないし…。

涙で歌えない…。

“この桜の樹の下で いつかまた 笑って逢おうね”

今のアタシは、笑えないよお…。

何とか立ち上がり、みんなの顔を確認める。

泣いてる人もいる。

在校生も歌ってくれてる。

父兄の皆さんも…。

パパママが泣き笑いでアタシを温かく見つめてくれている。

聴いたコトがない程の大音量の“桜の樹の下で”に、アタシはとてもじゃないけど、ガマンしきれなかった。

体育館裏のメンバー達、どう思って聴いてんだろう。

“咲き終わっても誇らしげに立ち続けるように 陽の光を受けながらひっそりとそれでもドッシリと立ち続けるように 寒い冬をジッと耐えて立ち続けるように 春が来て精一杯力を振り絞って咲くように そんな桜の樹のように強くありたい”

まだつぼみもつかない、校庭脇の桜の樹が窓の隙間から見える。

“ここで出逢ってここで育って いつも桜はみていてくれるから”

みんなのコトバを使わせてもらっても、歌詞に行き詰まった時、アタマに浮かんだのはあの桜の樹だった。

3年間ずっと見てきた桜。

“ココで出逢えた奇跡を大切にしたいから 何年経っても 何十年経っても 桜の樹の下でまた逢いましょう この桜の樹に誓おう”

アタシは歌が終わり、ピアノの演奏が終わるまで、ずっとみんなに向かってアタマを下げ続けた。

大歓声のなか、涙で視界が歪みながらもアタシは階段を降り、ゆっくりとみんなの顔を確かめながら自分の席に戻った。

座る直前に

『ありがとうございますあぁあ！！！！』

って叫んで。

みんな、ありがとう！！

イヤミ言われたコトも、今となっちゃイイ想い出だよっ！

アタシはその後も式が終わるまでずっと、いろんなコト思い出しながら泣き続けていた。。。

「以上を持ちまして…、」

来たっっっっ！！！！！！！

この閉式宣言がライブスタートの合図。

否応なしに涙が引く。

「…終了致します。礼！」

ざわついた瞬間だった。

ウチらのいつものスタート用SEが流れる。

イッキにテンションが上がり、アタシと関が極上の笑顔でステージにダッシュした。

周りのみんなもイッキにコーフンしてくれて。

前に押し寄せる人の波を掻き分けアタシと関がステージに上がるとすかさずモトさんがマイクを渡してくれた。

『今日は2人じゃないよ！！フルワンワ、スペシャルライズライブ、スタート！！！！！！』

アタシの掛け声と同時に紅白の幕がイッキに落ちて、メンバーの姿が現れ@のイントロが始まると、マイクの声も聴こえないんじゃないかなかって程の大歓声が沸き起こった。

嬉しビツクリなコトに、@もみんな歌ってくれてる。

“マイクなんかいらない”

そうとっさに感じたアタシは、マイクを床に置いて、マイク無しで

みんなと一緒に歌った。

関は一瞬ひきつってたけど、関はコーラスだからマイクを置かずに、時折アタシにマイクを向けてくれた。

今日のライブは今までのライブの中でも一番自然体。

2人ワンワ一の時より、グレイトロックの全国大会の時より、メチャクチャ自然体。

今まで考えたコトも無いくらいの動きとかコトバとかが次から次へと出てくる。

関もしかり。

テツちゃんもなおクンもまあクンもセンちゃんも驚いてる。

“自分の卒業式の後の、自分の高校でのライブ”ですから。

盛り上がらないワケがないよねっ。

@が終わる頃には、みんな椅子を避けて（どんどん押し出されたダメなんだけどね…）ステージ前ギリギリまで詰めてきていた。

もちろん在校生も。

続けてウチの校歌のワンワVer.（もちろん初出し）、ROCK!、tomorrowをノンストップで演った後、桜の樹の下での関Ver.。

学祭の2人ワンワ―時のコトを思い出して、ちょっとアツくなる。

アタシがピアノに向かう間、関が繋ぐ。

「えーっ、とお…」

何だ？

煮え切らないヤツだなあ。

「この曲の歌詞は、御存知の通り、メンバー全員の想いをヒヨがまとめたモノですが、今日は僭越ながら、オレVer.で歌わせて頂きます。」

はいいい??

開いた口が塞がらなかった。

何勝手なコト言っちゃってんのよ!。

「コーラスのトコロは変えてないから大丈夫だよ。」

関がアタシに向かって言った。

不覚にもドキッとしてしまう。

「もちろん初披露です。」

みんなの歓声がドッと大きくなる。

関がアタシに向かってゆっくり頷いた。

アタシも頷き返して、イントロを弾き始める。

歌が始まると、アタシはまたステージ中央に向かう。

「人との出逢いがこんなに奇跡を起こすなんて、初めて知ったよ。」
ん？何となく替えてるな。

「出逢えた奇跡、永遠の宝物だよ」

このフレーズ：

最後の最後まで悩んだフレーズだ。

もしかして憶えてた？

って言うかコレってまさか…、

“関Ver.” って言うより、悩んだフレーズ達じゃないのよ…。

関いいい…。

滅多に聴けない関のバラードに、泣いてる女子チラホラ…。

アタシも一緒にジーンとしちゃうよ。

もともとコイツの歌唱力はかなりのモノだと思ってたケド、やっぱ

りアンタは十分成長してるよ

何言っちゃってんのよ、ったく!!!。

こっちの方が名曲になったかも・・・。

ちょっとジェラシー。

と言うか後悔。。。。

関Ver. が終わったところで…、

「ラストナンバー行ってもいいですかあ？」

うわっ!!!!!! アタシの持ちネタなのに!!!

人の楽しみパクんなよお。

アタシ思わず頬っぺたを膨らます。

気づいたフロアの人々が笑う。

関は気にせず煽り続ける。

あれ?・・・

関、潤んでないか!?

目にうつすら涙があるような…。

さすがの純ちゃんもアツくなっちゃったか。

「ラストナンバー行ってもいいですかあ？」

「ダメえ」

「ヤダあ」

「いいですかあ？」

「ダメえ」

「ヤダあ」

このやり取りの繰り返しを何回かやるのが通常のライブでもお馴染み。

今日は“「ヤダあ」”コールにアタシも加わる。

んで、シメは、

「行っちゃうもんねえ！」

って、思いっきりドヤ顔で…。

コレもパクリかよ…。

まあいいや。

ご褒美にやらせてあげるよ。（何様だよ…）

ラストは、

「オマエらホントにラッキーだぞ？」

周りが反応する。

「学祭の時の桜の樹の下でと、今日の桜の樹の下でと、校歌に続き、」

気づいた人達がざわつく。

「最後の曲も、今日が初披露だあああ！」

館内、イッキに盛り上がる。

「しかも！」

関がアタシの顔を見る。

笑顔で返す。

「この日の為、ダ・ケ・に！！作りました！！！」

アゲ気味関を、隣で黙って見守る。

みんなもなぜか異様なくらいに盛り上がる。

初披露曲を含む、全6曲を終え、ライブは終了した。

ソッコーでアンコールしてくれて、アタシと関は着替えずにそのままブレザーだけ脱いでとりあえず2人で出ていった。

2人でみんなに何を聴きたいかリクエストを募って。

意外に、みんな“いつの間に!?”ってくらいに詳しく知ってくれていて、こっちが驚くような曲名をあげてくる。

中には真壁サンの曲を言う声もあって、関がすかさず突っ込んだり。

「バカ言え!!」

館内がドツとわく。

普段のライブにはないノリのライブだな。。。

客席に向かって“バカ言え”なんてさすがに言えないもんね。

言うコトも無いだろうし。

いかにも自分達の高校のライブだよ。

“blue moon”

えつつつ!!!!!!

いろんな曲名がコールされるなか、はつきりと聞こえた。

「何かメツチャコアなコト言い出す人いるねえ。もしかしてグレイ
トロック行ったでしょ!? いんじゃない?、あの“伝説の” blue
moon。」

ばっつっつっつ、バカなっつっ!!!

何勝手なコト言ってるのよ、関ってば!!

「さっき、体育館裏でスゴいモン聴かせてもらったお礼しなきゃな。
」

えええええ???

テツちゃんのコトバが合図になり、blue moonのイントロ
が…

みんな、いつの間に…。

フロアのテンションが最高潮に達した。

さすが天下のvivien!!

しかもblue moonを知らない人はいないんだね。

ってか、イイのか? 勝手に演って…。

しかも、超難関ナンバーと言われるblue moonを弾けてる

ウチの皆様……。

泣きすぎて歌えないじゃないのよ！！！！！！！！

バカあああああ！！！！！！

つて、
、
、[illegible]

サックス吹いてるよおおお!!!

いつの間に・・・。

関のサックスにも大歓声。

ダメだ、アタシ。

ホントに、

アンタの方が十分遠くに見えるよ、

関
●
●
●
○

vivienの神曲とも言えるblue moonをおこがましくも泣きじゃくりながら演った後、一番リクエストの声があった“桜の樹の下で”アタシVer.（もちろんマイク無し）の2曲を演奏して、サプライズライブは終了した。

最後のホームルーム終了後は、殺人的な記念撮影攻撃をしばらくの間2人で受け続けた。

同級生、後輩、果ては先生達まで…。

撮影ラッシュがやっと終わって歩き出した時だった。

「屋上、行かねえ？」

関からの思わぬお誘い。

『イイねえ。ウチらの思い出の場所だもんねっ。』

ご機嫌のアタシとは正反対に、何だか真剣な関。

『どうしたの？めっちゃマジメな顔しちゃって…。』

関の顔を覗き込む。

関は無言。

「楽しかったな。撮影攻撃はキツかったけど。」

話そらされたあああ！！！！

まあイイヤ。

『楽しかったねえ。ってか、アンタ勝手なコト言わないでよ!! 勝手に演って良かったの?』

本人達の許可無しに勝手に演っちゃダメでしょ…。

「ダメだったらモトさんが止めてんだろ。」

まっすぐ見つめたままの関があらさまに呆れて言った。

確かに…。

そっか。

『しかもアンタいつの間にサックスアレンジなんてマスターしたのよ!』

アタシ、まくし立てる。

また無言…。

ただ薄ら笑いして。

『アンタさあ…、』

さすがに関の顔を見れないからうつ向いて。

「あん?」

おっっっ！反応してきたよ。

『アタシが遠くに見えるなんて言ってたけど、アタシからしてみりゃアンタが遠くに見えるよ。だいたいアンタがアタシのコトをそう見てたってコト自体、アタシにしてみりゃシヨックだし、桜の樹の下でのコトにしても、サックスアレンジのコトにしても…、』

言うのを止めちゃった…。

「あんだよ。」

一段と真剣な関。

ますます顔が見れないじゃないのよ!!!

屋上到着。

立ち止まり、空を見上げて言った。

『いつまでも小僧関だと思ってた!』

言っちゃったよ!!!

恥ずかしっっっっ!!!

「あんだよそれ。」

若干キレ気味の関。

そりゃそうよね。

「お前さあ…」

ん？

いつになく真剣。

ってか、最近良く見るよ？この表情…。

「龍神サンのコト、好きなのか？」

ああああん？

何だコイツ！！！！！！

やっぱり小僧関だっ！！！！

『アンタ何回同じコト聞くのよ！！やっぱり小僧だね。アタシにと
って龍神サンはスキとかキライとか言うレベ・・・、』

アタシの視界が一瞬グラついた…。

『関？・・・』

グラついた後には、

アタシ、

関に、
、
、

強く、

しっかりと・・・

抱き締められてない・・・

か？？？？？

衝撃が許容範囲を軽くぶつちぎってるから、全くコトバが出ない…。
関の力の強さに、身動きも取れない。

事態が全くとってイイ程、把握出来てないヨ。。。。

イヤ、出来るワケないでしょ!!

一体何がどうしてどうなったらこんな展開が起きるってのよ!?

誰が予想出来るんよこんな展開!!!!!!

ってか、これって夢!?!?!?

b y e f o r n o w

『ちょっと！！！！！！！』

アタシは力ずくで関の腕を振りほどいた。

関の力がハンパなくてなかなかほどけなかったけど、関も観念したのか、ようやくほどけた。

ド真剣な関に向かって全力で叫ぶ。

『あんたナニ言っちゃってんの！？』

余りの動揺っぷりに、とてつもなく声が裏返っている…。

「ぷつつつ」

一転、いつもの笑顔に戻った関。

超高速で顔が紅くなる。

『アタシをこれ以上スキャンダル女にしないで！！そもそもメンバー内で恋愛なんてあり得ないし！！』

今のアタシの脳内↓

“ スキャンダル女に早くも次のお相手！！ ”

“ デビューして早くも3人目！！華麗なるプレイガール、彩沢陽依 ”

泣かずにはいられなかった。。。

ショックだった。

今まで“小僧”だと思っていた関に、

“好きだ。”

なんて言われちゃったコトが…。

「だから、この気持ちからも卒業したいんだ。」

んなっつつつつ!!!!!!

泣き顔のまま、関から目が離せなかった。

「オマエがこれ以上悩むの見たくないし。言わないままの方がオマエの為になるとは思ってたけど…」

あれ？

言い掛けて、関は背中を向けた。

「オレ、ちょっと武者修行に行ってくる。」

※※#∞@←◎§→⇄▽◇▲★?..?..?..?..?..?..?..?

クラクラしてきた…。

またアタマを抱える。

「グレイトロックTVの企画でさあ、世界代表のUBRの地元のロンドンで武者修行しないかってボスに持ち掛けられたんだ。」

何言ってるの？ 関…。

感情が交錯し過ぎて、ワケ解んない。

笑えないし怒れないし泣けないし喜べないし、全くの無感情。

「もちろんテツさんは知ってるよ。テツさんはあの通りだから笑顔で賛成してくれた。他のメンバーにはまだ言っていない。」

ばっつっつっ…。

コトバが出ない…。

“『バカじゃないの!?!』”

って、思いっきり全力で叫びたいのに…。

「実は…」

またコトバを濁す。

今度は何!?!?

「この企画、龍神サンのアイデアなんだ。」

ピ↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓。。。。(思考回路完

全停止の音)

龍神サン・・・・・・・・・・

ダメだ、立ってられないや。

アタシはその場にへたりこんだ。

関は柵にもたれ掛かって続けた。

落ち着けアタシ。

何度も深呼吸。

「オレ、今のままじゃオトコとしてヒヨに向き合えないです」
つて。」

息が苦しい…。

ノドがカラカラ。

リュックからペットボトルを取り出す。

「龍神サンはすげえな、やっぱり…。オレがオマエのコトを好きな
コト、気付いてた。その上で聞かれたんだ。“ホントに好きなのか
?”って。」

りゅう・・・じ、、さ・ん????

アタマの中錯乱。

龍神サン・・・。

「さすが天下の龍神だよな。“オマエにとって大事な存在であるコトよりかは負けるかも知れないけど、オレにとってだって、ヒヨは大事な存在だ。だからこそオマエを同じオトコと見込んで言う。”って。メツチャカツコよかったあ…。」

思い出して、薄ら笑いしてる。

龍神サン・・・。

「“ヒヨへの想いを確認するためにもイイんじゃないか？”って言うてくれたんだ。真壁じゃねえけど龍神サンに勝とうなんて、死んでもこの先も思わねえけど、今のままじゃ自分自身に納得行かないんだ。」

龍神サンからもらったネックレスを強く握り締める。

龍神サン？　こういうコトかアタシ、全然理解出来ません…。

関？

アタシの目の前にいるのは、ホントに関なの？

アタシの知ってる関なの！？

3年間、同じクラスだった関純也なの??????

まるで違う人みたいだよ？

アタマに血が上って、益々把握出来ない。

「ちょっと、来てくれ。」

関はアタシに寄ってきてスツとアタシの腕を掴み、そのまま屋上を降りた。

もうほとんど人気のない校内。

アタシと関が3年間通った高校。

アタシと関が出逢った場所…。

すれ違う人達に写真や握手を求められながら着いた場所は…。

桜の樹の下だった。。。

校庭にも人気は無い。

まさに“桜の樹の下で”のモチーフになった桜の樹。

まさに思い入れのある場所だ。

ちょっと感慨深い。

「いつでもどこにいてもキズナは強くあるから」

コレ、関Ver.の“桜の樹の下で”だ。

あれ？そーいえば……。

この、関Ver.って、

もしかして……

「心はずっと離れない　いつでもどこでもココロは1つだから」

モーレッツに鳥肌。

さっきはただフツーに聴いてたけど、

「あの日あの時君に出逢えてなかったら…」

今聴くと、もしかして…？

「今は無数の星屑でも　いつか必ず夜空に耀く星になるまで歌い続ける　明日の為に」

まさか・・・

「今のオレの気持ち。気付く人は気付いたかな。」

やっぱり・・・

「一応、こんなオレでも、旅立つ前にやれるだけやってみようと思
ってさ。」

一言一言ゆつくりと、どこことなく照れ臭そうに言う。

「半年から1年。自分で納得行くまで行ってきたていいよって、テツ
さん言ってくれたから。」

何なんだっての？

「今のままじゃオレ、ワンワ一のメンバーとしても、オトコとして
も、胸張ってオマエの隣にいけないから。今よりも遥かにでっかく
なって戻ってくるから。」

顔がアツい。

全身の血がアタマじゃなくて、顔に昇ってるみたい。

どうなってんの？

“今より”って、、

今でも十分なのに…？。

“『何勝手なコトばかり言ってるの!?!』”

とか、

“『バカじゃないの?』”

とか、コトバは次々出てくるのに、

口に出せない…。

なぜだろう…。

その後も、制服で通る最後の通学路も、アタシは終始無言だった。。

アタマの中は、関の発言や、今までの関との思い出で埋め尽くされていて…。

“今のままで十分だよ。”

そう言いたいのに…。

アイツのココロのモヤモヤは、

アタシが勇気を振り絞ってカミングアウトをしたにも関わらず、

全然晴れてなかったんだね…。

アタシに対する勘違いかも知れない思いが邪魔してたんだね…。

今のアタシには、関に掛けるコトバがナイよ。

龍神サンに対しても、何て言えばイイか、

全くコトバが見つからないよ。

自分の部屋の最終撤去作業が、全く以て上の空。

手はかろうじて動いてるのに。

今日中には出発しなくちゃいけなくて、その出発時間が迫ってるってのに…。

今のアタシのアタマの中には、こんな時でもやっぱりvivienが流れてる。

“「この企画、龍神サンのアイデアなんだ」”

関のコトバが何度も繰り返し甦る。

「ひーちゃん？早くしなよ！！乗り遅れるよ！！」

サヨリの超音波はホントに耳を貫くよ。

とっさに詰めるだけ詰む。

「それ要らないでしょ！！」

かなりの動揺っぷりに、意味不明に制服を入れ掛けて突っ込まれる情けない姉。

ホントに、着替えとか“お泊まり道具”的なモノしか無いハズなのに、

とんちんかんな行動ばかり続く。

卒業証書入れてみたり…。

「持って…くの？」

疑いの冷やかな眼差しのサヨリ。

苦笑いでごまかす。

そんなこんなで、何とか時間内に済ませ、

みんなに飛びきりの笑顔で見送られ、アタシは関と旅立った。

『おばさん達、何て？』

新幹線の車内で窓の外を見ながら話し掛けた。

「そりゃビックリしてたよ。でも、すぐ賛成してくれた。TVの企画なら大丈夫だろうって。」

あっけらかんとしてる関。

もう多少のコトじゃ驚かないのかな、関パパママは。

付いていったダケのハズの息子まで何故か契約書を持ってきてみた

り、

上京するハズの息子が国内どころか国外に行くコトになったり。

関パマママ、“この親にしてこの子あり”を地で行くからな。

カラカラしてて明るくて。

さっきも眩いくらいの、メツチャ笑顔だったし。

『ゴメンね。』

自分で言っというて、泣きそう…。

「何が？」

いつもと同じ、素っ気ない言い方。

だけど、余計にツライ…。

“関がそんなに悩んでるってコト、全然気付いてあげられなくて。”

ってココロの中で。

「ゴメンはオレの方だろ。余計なコト言っちゃまったんだから。」

かあああああ……

アタマに血が昇るのが明らかにわかった。

『アタシが小僧なんて言ったから気にした？』

恐る恐る尋ねる。

「バカ言え。」

ハナで笑われた！！

メチャクチャ気にしたのに！！！！

ついふてくされる。

「オマエに言われたコトでどんだけ励まされてると思ってんだよ。」

関…。

苦笑いで答えた。

新幹線の中は、気がつけば2人とも寝てしまっていて、目が覚めたのは間もなく東京に着くコトを知らせるアナウンスだった。

関がいなくなるってコトが、夢ならいいのに…。

今のアタシの脳内は、関に好きだって言われたコトよりも、

その何億倍も、

例え半年であろうとも、関がいなくなると言うコトの方がショックで耐えられない。

と言うか、ワケがわからない。

アタシには、とても理解しがたい。

エスカレーターを降りても、

改札まで歩いてても、

ワケが解らなすぎて、泣くに泣けないでいる。

ちょっとダケ涙腺が弱くなったのは、改札を出てすぐに、待つてくれていたメンバーの顔を見た時だった。

他のメンバーは、ライブ終了後、片付けして、一足先に帰ってきていた。

今日はこれからみんなで卒業祝パーティー。

でもアタシは、

『テツちゃん…。』

その前にどうしても、

「ん?。」

行きたいところがあるんだ…。

『アタシ、ちょっと用事済ませてから行ってもいいかな。。。』

テツちゃんはいつもと変わらない優しい表情。

どうしても行かなきゃいけないところ。

今すぐ逢わなきゃいけない人…。

自分でも全然分らない。

“衝動的”ってこのコトを言うんだろう。

「オメエら、かっこよかったぞい!!」

みんなにもみくちゃんにされてる関のそばで、ハンパなく真剣なアタシと、

いつもと全く同じ笑顔のテツちゃん。

「ヒヨの用がある人は、八重洲口で待ってくれてるよ。行っておいで。」

まっ!!!!!!!!!!!!!!

驚きの余り、心臓が飛び出しそうになったのと同時に瞬間的に目を見開いて、

アタシは1人、一目散に走り出した。

目にたくさんの涙を溜めて…。

無我夢中だった。

八重洲口までの距離が、こんなにも永いモノだっただろうか…。

いろんな想いが駆け巡り、視界がぼんやり滲む。

声に出して泣きたい。

今すぐ。

龍神サンの前でなら泣けるから。

思い切り。

“龍神サンが待ってくれてる”

それだけで天にも昇る想いなのに、

今はとにかく逢いたい。

いつもの妄想暴走モードも当然、発動してるのに、

とにかく逢いたい。

なぜだろう…。

アタシにとって龍神サンは、かけがえのない存在。

唯一無二の存在。

loveでもlikeでもないハズ。

けど、

それは、

テツちゃんも、まあクンも、なおクンも、センちゃんも、

関も同じだ。

けど、

やっぱり龍神サンは別だ。

“龍神サンは龍神サンでしかないんです、アタシにとって。手を伸ばしても届かない、けどいつもそばにいてくれる。loveでもlikeでもない、only oneなんです”

海崎サンに言ったコトバが甦る。

もしかしたら海崎サンの言う通り、恋愛感情なのかも知れない。

現に、

関のコトでこんなにアタマの中が埋め尽くされてるにも関わらず、

やっぱりどうしようもないくらいに龍神サンに逢いたい・・・

好きなの？アタシ、龍神サンのコト…。

“「実はこの企画、龍神サンのアイデアなんだ。」”

龍神サンの真意は分からない。

それどころか、どうして関が龍神サンに相談したのかがアタシにはさっぱり分からない。

正直関と離れるってコトが、全然想像がつかなくて。

考えたコトもなかったよ。

龍神サン！！

“何で関に海外修行を持ち掛けたんですか？”

って食って掛かりたい気持ちと、

“ 関と離れるなんて想像付きません ”

って弱音を吐きたい気持ちと、

“ 関に告白されちゃいました… ”

って、甘えたい気持ちが三つ巴で埋め尽くしている。

アタシにとって龍神サンは *only one* ……。

like でも *love* でもないんじゃないかと、

その上（最上級）だってコトなの？

龍神サン…。

早く逢いたい！！！！

我を忘れて猛ダッシュで外に出たのはいいけど…。

龍神サン？…

ドコ？？

あゝつつっ！！！！

あの車は！？

見覚えのある車にアタシは全力で駆け寄った。

龍神サンの車だ。

アタシに気付いたのか、車のウインドウが開いた。

「お帰り！！」

だ
あ
ゝあ
ゝあ
ゝあ
ゝあ
ゝあ
ゝあ
ゝあ
ゝあ
ゝ
→
→
→

でゅーじざああん!!!!!!
(訳.. 龍神サあああん)

雪山が雪崩たみたい、に、物凄い勢いで涙が込み上げてきて、

瞬殺で大号泣しちゃった。

何なんだ、この壮絶なまでの安堵感。

神々しさすら感じる。

やっぱり龍神サンは龍神サンだ。

だけど気付いた気がする。

“アタシにとって龍神サンは龍神サンでしかない” コトは、

“決して向坂龍二ではない”
ワケじゃなくて、

“龍神サンは龍神サン”に違いなくて、それ以上でもそれ以下でもないダケなんだって。

「そんなトコで泣いてないで早く乗れよ。」

龍神サンの笑顔、眩しすぎる。

こんなにぐちゃぐちゃの泣き顔のアタシでも。

いつもの何億倍も…。

しかも今日はいつもと変わらないハズの龍神サンの声が、ヤケに胸に響く。

こんなにも胸に響くコト、今までなかった。

でも、、確かに車の前で泣いてたら目立つよな…。

よし!!!!!!

人生2度目の、龍神サンの愛車に乗った。

『お邪魔します…。』

前回同様、心臓が木端微塵に碎け散りそう。

なのになぜか落ち着く…。

何だか不思議な感情。

龍神サンの車内で流れていた曲は、とても懐かしい曲だった。

“ 振り返りはしないさ　また新しい出逢いの未来が必ずあると信じているから ”

アタシが小学生の頃に流行った曲。

卒業式で歌った思い出がある。

メツチャ久しぶりに聴いたよ。

“ 今そこにあるのは光耀く素敵な明日ダケ　君がいるそれだけで何もいらないから ”

小学校の卒業式だから、もう6年前か…。

関のコトが浮かんじゃうな、この詩…。

今はこの時期でもあまり聴かなくなったけど、当時は良く聴いてたな。

“ 「今日は卒業ソング特集をお送りしてます。」 ”

ラジオだったのね。

3月アタマだからストレートに時期だもんな。

“ 「全国の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。続いては、ご自身も今年高校を卒業なさいました、この方達の曲です。今年の卒業ソングの代表曲となりました、…」 ”

まさか？

顔を上げると龍神サンの微笑みが見えた。

“「wonderful☆world“桜の樹の下で”」

車は走り出した。

今日、何回聴いただろう。

今日は（特に今は）この曲、ヤケに泣けてくる。

泣きじゃくりながら卒業式でのコトを話した。

ずっと笑顔で聞いてくれて。

「すごいな。聞いてるだけでも鳥肌だよ。」

龍神サン…。

何だろう、この、同じ人間とは思えない神憑りのな安堵感。

人間業とは到底思えないよ…。

収まっていた涙が再び溢れ出す。

そしていよいよ本題へ…。

『関に…、武者修行持ち掛けたんですか？』

泣きながら聞いた。

「アイツは大したオトコだよ。オレ的には自分で言う程ちっぽけじゃないと思うんだけどな。」

龍神サンのコトバに、涙増量。

「でも、だからこそ言ってみた。アイツがテツヤじゃなく、オレに言ってきた意味を考えてな。」

“龍神サンに言ってきた意味”??

思わず顔を上げて、運転中の龍神サンを見た。

龍神サンの表情は、どこことなく優しさと憂いが入り交じっているように見えた。

アタシには解らないケド、

きっとコレが“オトコ同士の何とか”ってヤツなんだと思う。

このバンドにいて得た知識の1つ、

“オトコのコトはオトコに委せろ”

に、従おう。

「でも驚いたよ。今回はテツヤ経由じゃなく、直接アイツからオレに言ってきたからさあ。」

思い出し笑い？

でも嬉しそうに見えるよ？

アタシもビックリだよ。

「ヒヨは？ 関のコトどう思ってる？」

[illegible]

何と唐突な……！

涙ひいてないってのに！

なんとムチャな…。

何度か深呼吸して。

『正直、分かりません。』

うつ向いたままで。

無言の龍神サン。

『今のアタシがあるのは、ワンワ一って言うんでもないモンスタ一バンドの中で、無我夢中でいろんなコトを経験しながら、こんな小娘の暴走とも取れる行動を何も言わずに見守ってき続けてくれたテツちゃん達最高のメンバーの中で、女子1人で必死になってボーカルを務めてきたからなダケで、もしワンワ一じゃなかったらきつとアタシは今のアタシじゃなかったと思うんです。』

目の前に広がる夜景を前に、素直な気持ちを龍神サンにぶつける。

ぐずぐずの声で。

『そのアタシを造るキツカケを作ったのは、誰であろう関で、アタシにとってアイツは最高の友達であり、言わば悪友と言うか戦友です。アイツがいなかったら、ワンワールのヒヨは存在しなかったハズですから。だから、ワンワールのスタッフやるまで、一度たりともドキドキどころか恋愛感情を持ったコトはありませんでした。』

鼻をちょいちょいすすりながらゆっくり答える。

『全国大会が決まったくらいから、何度かドキドキしてしまうシーンがありました、あくまでも友達感情の方が遥かに強いので、アタシはすぐに抑えられました。』

尚も龍神サンは無言。

『だから関の気持ちを知って、それはもう驚きました。』

ただただ笑顔の龍神サン。

アタシは龍神サンの笑顔につられてなのか、全て打ち明けた。

高校3年間は、とにかくワンワールとバイトに明け暮れたから、恋愛がどうか、一切考えなかったって話から、

中学の時はそれなりに好きな人はいたってコト、

海崎サンに言われた内容のコトまで。

聞かれてないコトまで喋ってた。

もう自分でも何が何だかわからなかった。

ただ1つハッキリと解るコトは、

今のアタシは、龍神サンの前で完全に無防備だってコト。

完全に“コドモ”だった。

“妹”でも、“舎弟”でもなくて。

「別にイイんじゃないの？ソレで。」

へっ???

夜景がキレイに見える場所で車を停めた龍神サンが発したコトバは、驚く程に何とも簡潔な一言だった。

「ソレでイイと思うよ、別に。ソレはソレでヒヨなりの愛情なんだから。」

かなり拍子抜け。

一世一代くらいの大告白だったのに!?

「そりゃ海崎の言う通り、ヒヨくらいの時代はいろんな恋をした方がイイとは思うケド、ヒヨみたいなのもアリだと思うぞ?」

龍神サンに言われると、無性にそう思えてくる。

不思議な力だ。

「そう言うのも、一種の“恋愛”だと思うし。」

コレも“恋愛”?

呆氣に取られるアタシ。

「“人を想う”って気持ちには変わらないだろ。」

あ・・・。

目からウロコだった。

“人を想う気持ちには変わらない”

なんて…。

思い付きもしなかったよ。

さすが龍神さんだ・・・。

やっぱりスゴいよ、この人は。

目の前に広がる夜景が、何となく切なく見えてくる。

さつきまで涙で歪んでた視界が、今はハッキリとクリアに見える。

神のような超ロマンチックな夜景の前で、隣に龍神サンがいるにも関わらず、最初みたいなドキドキが全然ない。

むしろ、この世のモノとは思えない、無限大の安心感がある。

「そう言う感情ってさあ、ソレだけヒヨが気持ちの温かい人間だから持てるコトだと思うんだよ。」

アタシが、

“温かい”
人間？？？

ハテナがぶっ飛ぶ。

「ソレだけ周りに恵まれてるとも言うんだと思うケド、やっぱりオマエは大したヤツだよ。」

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ (全身の穴という穴から力が抜ける音。)

龍神サンの手がアタシのアタマに触れた。

途端に肩の力が抜けた。

「ヒヨが思う通りの、今のままのヒヨに、真壁も関もオレもホレてんだから、イイんじゃないの？」

えっっっっっっっっ！

“オレもホレてる”って……。

だから何でこの人はそう言うコトサラッと言っちゃうワケ！？

ドキドキしちゃうよおお！！！！！！

いくら心臓があっても足りないよ！

アタシをショック死させたいのかなあ…。

って言うか、

マジになるからヤメて下さい。。。

いや、ちよつと危険水域に入ってるな……。

「オマエらにしかない友情なんだろうな。」

えっ？

遠くを見つめるような目の龍神サンに、益々ドキドキしちゃう…。

「アイツもヒヨとほとんど同じコト言ってたよ。だからこそ、離れて確認する為にも、ボーカリストとしての武者修行の為にも、持ち掛けたんだ。」

何だかわずかに罪悪感…。

「羨ましいな。オレにはそこまで想える女性がないからな。」

あれ？この表情とセリフって、、

海崎サンを思い出すよ…。

「じゃ、行くか。」

『えっ!?!』

車のエンジンが掛かった。

とっても落ち着くカーコロンと座り心地抜群の座席。

車内照明の紫も、何だか龍神サンを照らしてるようで、何とも華やか。

落ち着くな、やっぱり…。

何なんだろう、この安心感。

誰にも感じたコトのない感覚だ。

やっぱり“love”とか“like”とかの次元の問題なんかじ

やないんだな。

今アタシの目の前にいるのが“vivienの龍神サン”だろうが
“向坂龍二サン”だろうが、アタシにとっては“龍神サン”以外の
何者でもない。

ソコに恋愛感情があるとしても。

b y e f o r n o w (後書き)

奇跡篇はコレで完結致します。

この後、続篇に続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3163n/>

wonderful☆world～奇跡篇～

2011年8月22日19時44分発行